

一同 みちのく 一同 はせ川
 一同 いくの 一同 たちへ
 一同 いま川 一同 まつがゑ
 一同 とこよ 一同 ゑぐち
 ▲一かこい とやま 一かこい 松しま
 一同 はなの 一同 かつの
 一同 高さき 一同 のあき
 一同 せんじゆ 一同 かよひぢ
 一同 わか山 一同 若まつ
 ▲下の町 かしわや又十郎内
 ▲一天神 大さき 一天神 むらさめ
 ▲一かこい さかた
 太夫合拾三人 一天神合五十七人
 一鹿戀合五十四人
 ▲是より端女郎の分
 ▲中の町 ふしみや三郎兵衛内
 一まつかぜ 一たむら 一いくよ
 ▲同町 一文字や次郎右衛門内

一たのも 一とやま 一ちくご
 ▲一あわぢ 一はやま
 ▲同町 ふしみや次兵衛内
 一みづき 一さんか 一よしざき
 一たか尾 一かせん 一あらし
 ▲同町 いづみや市右衛門内 一玉を
 一いくの 一かわち 一おとわ
 ▲同町 わちがいや八郎右衛門内 一こにし
 一みづえ 一若くさ 一まんこ
 一わか木 一ゑもん 一あらし
 ▲同町 いづゝ屋藤左衛門内
 一もしほ 一もんど 一わかな
 一あふよ 一大しま 一しぼぢ
 ▲上の町 江戸屋利左衛門内
 一なでしこ 一まつ山 一ともゑ
 一さらしな 一かうばい 一山ぶき
 一のしう 一ながと
 ▲同町 かしはや平左衛門内

一おのへ 一せきしう 一まつかぜ
 一高さき 一よしたか 一かもん
 一みさん 一こたか 一むら井
 一のかせ 一かづさ
 ▲同町 まつばや彌右衛門内
 一かつやま 一いせき 一まんよ
 一ちくぜん 一うきはし
 ▲同町 ひしやじゆてい内
 一玉の井 一とのへ 一みさほ
 一よし川 一あさぎり 一はつざき
 一ゑちご 一しが 一からさき
 ▲西の同院 大坂や利左衛門内
 一しゆぜん 一たむら 一さくら木
 一玉の井 一高しま 一ちくご
 ▲同町 大坂屋庄左衛門内
 一ほのか 一たまの 一しほがま
 一かつの 一よしおか 一まつゑ
 一ふぢと 一玉がき 一しのだ

一まさご 一しら玉
 ▲同町 ますや平左衛門内
 一くも井 一みよし
 ▲同町 たんばや彌兵衛内
 一せんじゆ 一みかさ 一つま川
 一一はし 一よしだ 一をとわ
 ▲同町 三文字や又左衛門内
 一玉川 一きてう 一よしまつ
 一きぬゑ 一とやま 一さもん
 一いちはし 一わしう 一よしう
 一市川 一かしう
 ▲同町 もつかうや九郎兵衛内 一そめ川
 一とやま 一よし川 二玉はし
 ▲中どうじ 大和屋重兵衛内
 一わしう 一きよはし 一ましほ
 一とざわ 一とやま
 ▲同町 はりまや安兵衛内 一いおり
 一玉かづら 一うねめ 一きく川

- 一 たまがき 一 おか山
- 一 おとわ
- ▲同町 大坂屋傳左衛門内 一 あかし
- 一 はつば 一 よしざき
- 一 はつづき 一 かづさ
- ▲同町 住吉屋半左衛門内 一 やまぢ
- 一 かせん 一 今川
- ▲同町 かしは喜右衛門内 一 とさ
- 一 たか尾 一 いづゝ
- 一 よし川 一 一高さき
- ▲同町 うろこがたや内 一 いちほし
- 一 ちとせ 一 一玉ぎく
- ▲同町 大和屋左兵衛内 一 はつね
- 一 のぶ 一 きんご
- 一 かづま 一 うつの
- 一 とよ嶋 一 さよき
- 一 あさか 一 つねよ
- ▲同町 たんばや徳兵衛内 一 みり
- 一 玉の介 一 おきつ

- ▲同町 ぶぢや淨和内 一 たかね
- 一 ちやうざん 一 むめがゑ
- 一 かしう 一 みくら
- ▲下の町 ぶぢや十郎兵衛内 一 てうざん
- 一 さんしう 一 きてう
- 一 くわさん 一 大くら
- 一 三さん 一 小てう
- ▲同町 かしわや宇兵衛内 一 わさん
- 一 おのへ 一 しづか
- ▲同町 かしわや三右衛門内 一 はつ花
- 一 たかつ 一 一みうら
- 一 さかた 一 一よしたか
- ▲同町 かしわや又十郎内 一 あやめ
- 一 よしざき 一 小ふぢ 一 玉川
- ▲同町 かしわや次郎兵衛内 一 たかさき
- 一 きてう 一 やしほ 一 はつね
- 一 よしや 一 ちよに
- はし女郎合 百八十四人

女郎惣數合 三百八人

以上但シ北むきは書のせず

▲あげ屋町 廿四間の揚屋

- ▲上は東がわの分 北
- 一 松屋半兵衛 一 すみや徳右衛門
- 一 玉屋久右衛門 一 ますや傳兵衛
- 一 二文字屋惣兵衛 一 扇屋長左衛門
- 一 桔梗屋五郎左衛門 一 山形屋榮山
- 一 橋屋太郎左衛門 一 八文字や喜右衛門
- 一 篠屋源左衛門 一 ふろや作左衛門
- 一 ひしや六郎兵衛 一 三文字や治兵衛
- 一 三文字屋平右衛門 一 花びしや伊兵衛後家
- 一 かぎや重右衛門 一 ぶぢや傳三郎
- 一 かたばみや惣左衛門 一 ぶぢや又左衛門
- 一 井筒屋甚左衛門 一 東がわ十四間也
- 一 いづゝや半右衛門 一 西がわ十間也
- 一 丸田屋新兵衛
- 一 柏屋權右衛門

▲出口の茶屋の分

- 一 舛屋庄右衛門 一 丸屋五郎右衛門
- 一 きくや太右衛門 一 一文字や庄左衛門
- 一 二もんじや吉兵衛 一 ぶぢや庄右衛門
- 一 近江屋孫右衛門 一 池田屋六兵衛
- 一 龜屋忠右衛門 一 ぶびや嘉兵衛
- 一 平野屋七兵衛 一 大和屋後家さん
- 一 柏屋四郎兵衛 一 笹屋仁兵衛
- ▲北の茶屋の分 合十四間
- 一 大和屋太兵衛 一 八文字屋長兵衛
- 一 萬屋庄兵衛 一 大一屋次郎兵衛
- 一 たち花や六左衛門 一 津ノ國屋小兵衛
- 合六間 茶屋數合 廿間也
- ▲太夫 七十六人引舟女郎共にあげやノ取廿三人
- ▲天神 三十人 あげやの取 拾人
- ▲鹿戀 十八人 あげやの取 八人
- ▲端女郎あげやへ行ばかこい同前(座敷に入は十二人あげやの取六人也)
- ▲端女郎出口の茶屋遊。北の茶屋も同前也

以上

晝斗十貳匁内宿へ六匁取 夜は茶屋でならず。半夜あげやへは行

正月節句もん日は十六匁宿の取同前

▲太夫正月節句 庭錢十三貫文

祝儀は太夫へ壹角ヲ貳粒。宿へ三步貳は一はい

やり手へ貳角。出口茶屋 丹波口茶屋

料理人おろせへ壹角づゝ。宿ノ男女へ金一はい

▲天神正月節句 庭錢六貫五百文

祝儀壹角ヲ十五粒。其外ノ衆中へ少づゝよはし

第一 花の下紐ながと短かと

身ばかり物魂は彼里にいたり大盡

せちべんなる心から。傾城と土風にはあはぬが祕密と。いひ出せし者の顔が見たし。物のあはれも是よりぞ知る。戀の只中少しの内も浮世の暇さへあらば。此美君をながめまゐらせ。揚屋酒に氣を延ばす事。仙家の不老不死の妙薬よりは増りて。命の洗濯水遊びの上も。何か此外に世界の娛み又有べきや。人生七十古來稀なる世に。始末の二字にくゝられ。まうけ溜て使はぬ人の心が知りたし。今でも冥途から使が来れば。行かねばならぬ身を持たながら。ある金を我樂しみにはつかひもせて。來年の何月迄と切きつて。金貸人程大膽なる者はなし。今宵も知れぬは命なりと。一生役體もなふ身を浮雲の天水といふ男。晝酒の醉覺しに東邊へ出かけぬるに。むかふから來る男を見れば。當流の

後あがりの天窓はやる時。厚髪にして。然も鬢を巻立て。神主かと思へば。赤地の裏を羽織につけたり。又大盡かと思ればつゞく暫間もなし。芝居役者には色黒し。いかさま一癖ある奴と。近寄て見れば。是は古目を掛てとせし。落語の咄をよう夕顔の。五條邊りに住みし表辻伊勢之助といひて。浦辻まさりと潜上いひし。安筆屋の浮氣者なり。借今程は何處に居るぞと問へば。筆の命毛あれば。又お目にかゝると。まだいひかけの口合はやまず。京も住憂。多くの借錢も寝て伏見の里に。今は諸の師をして三人口ゆるりと美事な暮し。されど此身に成ても。まだやまぬは御存じの悪性。是も大方ならぬ因果。鐘木町の龜屋の井筒に深き中。ちと賢覽に供へたし。自然大坂へ御下りあらば。必ず御立寄待入なり。扱今日の出京は餘慶のない謠を教盡して。外百番を毎日上京迄。一番づつならひに參つて。又それを其日に教ゆるいそがしさ。さのみ是は苦勞にも存ぜぬが。折ふしお屋敷方の御留守居より。囃子のあつて。互に大笑ひ暫らくなりしが。何やら上から聲高に。鉦太鼓をうちならし。をかしげなる人形を作り。焼印の編笠を着せて。大勢色紙のざいを持って。傾城買を送るは。おくるはくゝと。聲々にわめいて來る。是はしたり。昔より風神を送るといふ事はあれど。傾城買を送るといふこと。いまだ年代記にも見當らず。さりとはかはつた思付。いかさま謂あるべしと。後にさがりしざい持親父に尋れば。我らがあたりは近年老若共に。家業に疎く。島原狂ひに賢くなつて。多くの金銀を蒔散らす事砂の如し。それも我物あつてつかへばまだしもなり。三月延の借り米。なしくつしの借錢。買置して賣損の金廻し。又は家質或は連判銀にて紋日をつとめて。面々杉焼も鯛青鷺ならては喰れずと。宿は大唐米に。五斗味噌添てくふなりして。伽羅も鹽釜はしたるき所あつて悪しと。黒木たく身袋にて。無用の贅をやつて。我家のとりぶき屋根のぎゝぬけを葺替る力もなくて。揚屋の座敷が廣ふての逼ふてのとのせんさく。皆氣違ひの沙汰なり。北隣りには息子を勘當すると誓く。南隣りには主人へ大分の損をかけて。今日請人へ手代を預ける相談。

▲鹿戀 正月節句 庭錢四貫文

祝儀壹角ヲ七つ十粒。其外ノ衆中へ天神を少しづゝ

あらまし如此。家々にて庭錢も不同是先中也

▲新枕出る時はあね女郎共に。太夫でも天神でも兩人を

三日が間あげづめ。祝儀新枕へ斗太夫へなし。庭錢も

なし。其外やり手あげや茶やおろせ皆々有

▲端女郎茶屋にて正月節句する女郎へ祝儀二三角。宿へ

壹角やりておろせ宿ノ下女へ銀壹貳匁づゝ

▲女郎をもらふは宿へ取銀をもらふ方を出す也 以上

筋向には悴が傾城狂ひゆゑ。三代續きし家を人の手に渡すと。母親涙を流し。馴染の町を立退るゝ。其隣はよい年をして。白髪拔を仕事にして阿房を盡し。子供には古布子さへして着せずに。太夫が所へ小袖してやる目論見。やくたいなしと申さうか。あいだれといはうかと。女房順志を燃して。茶碗茶釜摺木鉢迄打割ての女夫喧嘩。總て町中四十軒の内。賣家三十七軒。残り五軒も家質に入てあれば。是とも我物ならず。近所は云合し様に。將棊倒れと云ものにかたひしに倒るゝ事。皆是傾城狂ひより事起れるなれば。片時も早く此傾城買の心玉を人形に移し町送りにして。丹波越さすべしと。才覚なお宿老殿の仰に従ひ。送るはくゝと。よい年してわめいて行くを。伊勢之助取付。近頃それは素人なる了簡。今時の悪性者。仕過してもいかな。丹波越杯することにあらず。京の者は江戸へくゝと下り。江戸の者は上方へ上つて。當所なしに相應に請人屋あつて。悪性者を請込む家あれば。立身して重て又各々の町へ。遣崩しに立歸るまじきものでなし。爰が大事の思案所。同じくは雨降續く水の出ばなに。川へさらりと流したし。是水は川へはまるの道理なりと。口拍子につて云へば。親父横手を打つて。智慧かな。成程其方の異見に任せ。五條の橋より下へ流すべし。何れも若い衆。是から五條の橋へ向けて送らるべしと下知すれば。伊勢之助又親父を招いて。何と其人形に。各々家々より十二燈を一つ宛添て。我等へ渡されまじきや。さもあらば御町へ道切の呪して參らせんといふ。元より愚に作つたる親父。是忝しと。町中の若い者共を片端より。あたまた割に十二文宛出させ。子孫々迄傾城買は申に及ばず。茶屋狂ひ小宿狂ひもせぬやうに。御祈念頼むと。伊勢之助に人形共に渡して歸りぬ。天水我を折つて伊勢之助に向ひ。汝それを引請て何にかするといへば。されば是には深き存じ入あつての事。私杯に此人形が取つて。お蔭つかひくづす程の身になれば満足なり。わるい女房持て田舎商すると。獨法師の歩行とは。留守に密夫盗人の氣遣ひなきやうなものにて。我らに傾城買の生靈取付いた分では。何もつかはふ種がないゆゑ。此人形を煎じて吸ても氣遣ひなし。扱是を貰ひしは。以前私五條に借屋して居りし筋向に。鎌倉屋の源と申て。江戸

大坂に店あつて。手廣く商ひせし分限者ありしが。其身若ふして然も兩親なく。自由なる身を持たながら。色事に一錢もつかはず。生れ付て吾奴にて。じゆつながら銀共を箱へ押入々々。内蔵につめるを樂みにして。一代絹の下帯かゝず。口に魚鳥の味を知らず。色狂ひする者を呆氣とぬかして。拙者が身持杯見ては。おのれが苦にもならぬ事じやに。向ひの筆屋とつきあふな。あいつ今の間に身代潰す仕果なりと。物憎さふに手代共へ異見の引事。聞く度に無念重なれ共。其奴がいふに違ひもなく。二番目の手代も我らが引導にて。桔梗屋の雲井に登りつめさせ。一年経たぬ内に。親方の手前不首尾にさせぬれば。いふも道理とは思ひながら。畢竟誘ふ者に科はなし。其身器用はだにて深入して。おのれと仕損ふなれば。外に憾みはない筈なるに。二日寄合の次手に會所にて此噂。ばつと尾ひれ付て申せしゆゑ。律義な家主にて。色狂ひする者は切支丹の頭取程に恐がり。吝心から半年餘の宿代の滯勘忍して。宿を替させし恨。偏に此鎌倉屋の源が。頼ぬ口をきしゆゑなれば。此人形を彼奴が門に捨置。ものゝ美事な傾城買になして。身代採み潰して。見て慰まん爲に。人形を貰ひしなり。まはり遠き事ながら。是かや厄病の神にて。敵とる思案と始終を語り。只今是から直に參ると。暇乞して立別。それより昔住馴し五條あたりの。彼鎌倉屋の店へ投込。跡をも見ずに伏見の里へ逃て歸りぬ。抑々此鎌倉屋の源と申は。親より家藏諸道具の外に。八百貫目の譲りを請てより以來。假にも遊樂の道に心を寄せず。世渡りに賢く。朝暮小判を溜める思案をのみめぐらし。何によらず江戸大坂にきくべき物を。見立聞たて。買廻しよく店に下し。其身三十一歳になる時。二千貫目餘に元手をふやし。溜ては箱に押入。釘付にして藏につめ置。つひに揚屋の手にも渡さず。況て野郎宿の花にもならず。一生男をはずに朽果る美なる娘の如く。よいめにもあはずに。可惜金銀埋れるこそ悲しけれ。然るに源州ふと暮方より無常心になつて。つらつら思ふに。今もしれぬは人の身。何時迄慾に身をこらすべき。心に叶ふ娘をせんが爲に。金銀ほしき願ひなり。其望みなくしては。石瓦も同前。分別する程分もなき今迄の覺悟さらりと改め思ひきつたる色遊びして。世を心の儘

にさわぐべしと。始末せし身を忘れて。俄に男作り。今迄は夢に見しこともなき。島原に通ひ出し。ものゝ美事な色狂ひ。元より員數持餘つて遣ひ捨るに分別極たる大盡。親はなし。女房持ねば子もなし。浮世は暇なり。異見すべき重手代は。近き頃頓死する。世界我物といふ男。奥州を面白がつて朝暮通ひしが。上京の大銀持何程といふ銀の員數計りがたしとて。斗方なしといふ大盡と張合。無性に募つて。急に取出す談合せしうち。毎日の〇〇〇〇〇〇〇〇をわすらひ出し。里通ひをやめて。四五日養生せし間に。はや奥州は斗方なしが根から引ぬき。庭前の花とながめ。我物にしての樂しみ。去とは彼奴にだしぬかれ。扱も無念々々と齒切をして殘念がれ共。今は人の物になれば是非なし。最早此里も面白からずと。色川原の野郎遊びに模様替る思案せし時。色友達の松原の闇の夜といふ。跡先しらぬ瓢箪の川流れ浮にうく男が。源をすゝめて。奥州がぬとて。外にも戀はあるもの。仕掛し女郎狂ひをやめて。野郎狂ひにせんとは。尻も結ばぬ糸なり。針のみゝずより天覗くとは汝か心せばし。彼太夫に美しさ増つて。智恵あつて功者で。一座が面白ふて。まだ〇によい所があつて。古今無類の太夫職。是に情の橋をかけて。今迄の女郎と渡りくらべて見よといふ。お名はと問へば。露と答へてきゆる程の君。それは長門の萩焼。お茶の呑めるのか。それよ。その君。すぐれて美しきに何とて出かねけるぞ。日本國の末社。かたの如く取持ちけるに。今に此女郎に麻の住居させ給ふは。いか成貧乏神の仕業ぞ。汝福の神となつて根引にせよといへば。我も其君には戀あり。成程つかんで。斗方なしにも廿方にもおそらく負ぬ名を取るべしと。それより又色をかへて。長門舟に乗かゝつて。留途のない大騒ぎに。年々うめきし銀箱。あけくれの付とゞけに。いつともなふ皆になつて。家藏斗残りし時。源が懐より。かの傾城買の生靈。揚屋酒に酔て。赤色の玉となり。晝中に飛出。丹波の方へ欠落しぬ。其時源は正氣になつて。今迄の遊びを夢のやうにおぼえ。去とは我ながら合點のゆかぬ事と。内藏へ入て見渡せば。銀も小判もなかりけり。浦の苦屋の明箱ばかり二三。鼠の下屋敷となつて。いかな。包紙も残らず。是はとけふもあすもさめはて。足摺して泣てもか

へらず。兎角思案に落ぬ所へ。御意に入の末社。花笠左七。按摩とりの道安御見舞申で。いつもの調子に是旦那。君よりの御書簡到来。さだめて身請の御事ならん。先是は何としての御延引。又奥州さまのやうにだしぬかれ給ひて跡での御後悔見るやうな。なんと道安左様ではないか。中々あのやうな御心底の眞なる太夫様は。日本廣しと申せ共。ま一人あらばいふてござれ。此首水もたまらず進上致す。我らよい身でござれば。後ともいはず抓む事じやに。何とて旦那は壽命の洗濯に。日和見てござあるぞ。早う奥様にして。お中のよいを見ましたいと。そやし立て嵩高な文御前に差置けど。源は悪性の生靈去て正氣最中の時なれば。太夫が文も満足がらず。苦々しき顔して道安に向ひ。御自分には拙者共よりはお年かさとし殊に御法體の御身として。日頃入魂に申談する甲斐には。不行跡にもござれば。御異見でもなされて下されふこなたが。傾城白拍子等の賤しき者を請出し。婦妻に致せ杯とは。近頃本意を背いたおすゝめ。お恨みに存ると。常に違つた挨拶すれど。兩人の飛上共まだ氣がつかず。偕は旦那はしやれて堅い御口上。神ぞ孔子もはだし。諸客〇に入の門に入ては。朝に曲をして夕べに〇〇ます。御感をきかては面白からず。いざお出とすゝむれば大盡眼すわつて。お身達は人を馬鹿にめさるか。神八幡堪忍ならぬといふては。ま一言きかぬ男と。脇差取まはすを見て。兩人驚き。こりやならすの森の郭公と。こくうに飛て逃て行きけり。其後源は遣ひ捨し銀のかへらぬを悔み。手代共をよせて勘定して見るに。現銀二千貫目。五年半にうつくしう皆になるのみならず。揚屋に五七百目の拂ひ残りあり。其外伽羅屋吳服屋兩替屋より當座借の金銀。合三十二貫六百廿一匁三分九厘の負銀。ある物とては居宅諸道具二十貫目が物はありなしなり。然れば是を渡しては。手と身とにて退といふもの。何卒家藏此儘にて。人手に渡さず續て行きたしと。さま。分別して見れ共。兎角分散にせねば濟まぬに究まるとき。源智恵を出し。我を育てし乳母が亭主。南都手具といふ所に居るを呼び登せ。思案を申きかせしは。其方年恰好人物よければ。今日より我が實の親と頼むとあれば。是は迷惑千萬と。疊へ天窓をすりこむ。いや是が身共が仕出しなり。元此借

銀色狂ひより出来し事。誰しらぬ者はなし。去に因て負せ方を残らず呼よせ。其中にて其方我らが親源右衛門と名乗つて。久々江戸の店に罷在る留守の中に。悴め大分の金銀をつかひ失ひ。剩へ各々方迄借事申し。存もよらぬ引負を致す事。前代未聞のたはけ者。只今勘當いたす。彼奴を斬てなりとも突てなりとも取つて給はれ。濟すあてがあればこそ。各々よりかりも買もしたてござらふ。最早拙者も法體いたし。あいつに諸事を渡し隠居もいたし。樂々と後生をも願はふと存じた所に。去とは情ない事でござる。見れば瞋恚の炎の種じやと。此脇差をぬいて。我等を追走らかし給ふべし。時に手代共左右に取付御尤もくじまいにして。此借銀をまひをさめん。負方の中てむつかしう云はん者は。兩替屋のこまかい手代共より外はなし。其外は呉服屋伽羅屋。色宿は今迄拂ひしり残りなれば。勘當せらるゝ上は役にたぬと。粹共なれば二言と云ふまじ。然らば我らは江戸店へ下り。一稼ぎすべし。京都は其方手代共心を合せ。随分仕末し銀を溜るべしと。此手にて借銀を云延し。それより五年たつて後。大分金銀を仕出し。江戸より都へ立歸り。借銀残らず皆濟し。二度富貴の家を榮え。島原より吹く風は。魚屋の南風をいやがる程に恐れ。太鼓を見ては。雷よりはおぢおそれける。

第二 花を繕ふ柏木の衣紋

身を隠し物姿は酒樽に入りまいのよい親父

昔より今は商がないくと獨して氣をやむ親父あつて。子供の行末の事まで。無用の思ひ置。是其身愚にして商賣の道に疎く。身過の種を工夫して。黄金の花さく春を。知らぬから起つての案じ過しなり。されば都の廣き事。小さい心から計り難し。頃日九州より獨樂廻しの小人のぼりて。四條川原の小芝居にて。さまざまの曲獨樂を廻し。數萬の金を取て。歴々の大芝居をすがらせけるが。尙は盛になつて。町々に此獨樂を求めて。家々に觀びし後は。隠居の親父共まで。念佛講に參り。持佛堂に御明は黠しながら。鐘木の先にて曲獨樂それよりはたゞき鉦の真中にて廻ふ音。そのまゝ蟬の聲に似て心の涼しさ。何れ餘念はなかりき。なまなか心に利慾の考して。口にて念佛申さふよりは遙にましと。佛も時の流行物に氣を移して。是計は叱らせ給ふまじ。去程に家々に獨樂五つ六つ。或は十廿買求めしを。おしならし一町に二百宛と積りて。獨樂一つ十二文づつにして此代二貫五百文。凡そ京中三千町にて獨樂の錢高七千五百貫。銀に直して百五貫目餘なり。然れば商ひがないといはれぬいひ過しなり。爰に人の異見きかぬ氣の大盡あり。銀づまりにて是非なく。彼里先はやめ分にて。面白からぬ無色の酒香ふて居るゝ所へ。日頃お目かけらるゝ末社共四五人飾りたてゝ參る。是は何處へと問はせらるれば。今日は東山へ獨樂の會に參るの由申す。然らば下稽古に廻して見よとの仰せ。承つて何れも上手顔して。懷中せし獨樂取出し。やつて見れど。いかなく思ふやうにまはず。是は我等が手にあはぬとて。さまざま獨樂に難をつけて。地が傾いてまはぬこそ不興なれ。大盡をかしく。上手になりたくば。文庫持ておいでなされ。一曲一角づつて祕傳を教ゆる事ぢやとあれば。然らば旦那のお手前みたと申す。それこそやすきこと。九州の子供も恥る程に。さまざまの曲獨樂。何れも我を折り。可惜お手が旦那にある事。既に我々があの如くまはせば。早速金になる事ぢやと羨む。それは平生の所作を恨むべし。大盡は金をまいて廻す事を得給ふ。末社は廻る役目にして。遂に人を廻して見た事なし。草木心なしとは申せ共。此理を獨樂も合點して。末社の手にあふては。廻りが悪さうな。若汝等にまはさるゝ獨樂ならば。よもや大盡獨樂ではあるまいといへば。獨樂は根本の廻し手からが。小人じやと。笑ひ立にして東山へ參りぬ。されば道々によつてさかしき世とは今なるべし。宮川町の子供屋の主不斷常香盤も。舞臺藝不器用で暇日の多い若衆に。枕かへし扇の曲。參るゝの仇口やめて。同じ慰ならば。獨樂まはしこそ面白けれと。親方許して。黒塗の獨樂を買ふてあてがひけるに。渡りに舟と悦び。其身の腰元役をしまふて。樂屋に入ても一心不亂に。獨樂をまはして慰みけるが。下地蝶廻しの手利なれば。其格を

もつて早速上手になつて。初太郎も恥る程なりしかば。大盡の御機嫌取に參りし役者共が噂して。若衆は曾て思つきなく。獨樂の曲見ん斗に。諸方より招て。はき、の太夫子よりは。格別流行て其名高し。我等もさる暇な女郎に。二三度お情にあづかりし事あり。其恩謝に此の思ひ付をさせて。くわつと流行らし。いよく人知らぬよい事に遇べしと。鳥箒の忠内と申す幫間が。笑を含む。是大きな了簡違ひなり。太夫達の曲見たきとの願ひなれば。何時にても大盡うなづき。早速九州より来る根本の廻し手を。金にあかして呼寄せ。居ながら自由に見せらるれば。今から取付いて精根盡して廻し習ふが損ぞかし。惣じて色里の事は。何によらずひすらこげなくおほやうなるが好し。過し頃迄毎年定つて正月十六日に人形見世出して。揚屋の門々押分難く。いかなる太夫も其日の大盡の迷惑かへり見ず。我物いらぬくせに。價に構はず。十兩廿兩が。翫びを調べ。暫時の慰みに。人形屋數千兩の商をして悦びけるが。廊の中に世智賢き男あつて。前日に人形屋手前より多の人形を買ひ切り。廊中に店を出し。一匁物を百目といふても。値ぎり手のない商ひ。只取とは是なるべし。是憎き仕業と。其頃の大盡云合て。又來る春を待て。面々手よりの人形屋を呼寄せ。美を盡したる人形屋を。五兩七兩がつつ前かたに求めおき。大盡一人に人形屋一人づつ召連れ。十六日の晝から揚屋に來りて。太夫禿の望み次第の人形。掴み取じやかと。座敷中に蒔散せば。金銀の箔の光り家内を照し。錦の衣裳着そこらきらめき。紅のぼつとしたる慰み。又此外にあるべきやと騒ぎ合て。せちな男のまはしもの人形店には。誰が一人買者もなく。多くの仕込其儘に捨て。大分の損となつて。是より人形店飾る力もなくて。今の十六日遊び去とはをかしからず。とかく色里は内にはつかむ心あり共。表向は大やうにして。大盡を登らせ。そだてて取るが肝要なり。又大盡も世智賢くまはつて。金銀すくなう出して。よい事せふと思ふ氣からは。神ぞ傾城買はるる筈はなし。それよりは諸道具の取賣りにかゝつて。掘出して遊ぶかたがましなるべし。惣じて今時の悪がしこき大盡大こといふもの費の至り。更に身の爲にも。女郎の爲にもならず。きやつに取らする物を溜て。ひそかに太夫に

遣たがましと。ひすい了簡。こんな氣で太夫にも美事に物やる者にてなし。殊更色町は男つきにも座配にも限らず。金で萬が濟む所なれば。男作るは前方なるせんぎと。木綿の仕立着物で出かけぬる人あり。此心で太夫にあはふよりは。〇〇の古きに遠慮なく。めんくの〇〇に思ひ出して慰むが兩爲なり。女郎狂ひといふは。男も衣裳好みして色作り。伽羅も惜まず焼すて。引舟に小歌望みて。それには耳も傾けず。末社相手にいたり話して。金も手づからは遣らず。幫間に捌かせ。萬事大名氣になつてこそ御女郎買の甲斐はあれ。百貫目の銀を仕末して。五年に遣ふて遊ばふより。半年程に蒔散して。名を色里にはつと残し。しやんと早くつかひやむこそ此道の粹とはいはれ。兎角女郎狂ひの仕末必ず無用なり。其銀とて残るものにはあらず。只嬉しがる物やらいではをかしからぬ所なり。何ぼう高ふ登つて位を取給ふ歴々の太夫達でも。つまる所が金次第で。廻りのよい事水車の如し。淀鯉といふ男此里の水を呑んで。粹ともいはれし身なりしが。今少しの事を走りて。桔梗屋の天職を。親方に斷りいふて。年賦にしては請られしぞ。更に可笑かるまじき事と思へど。當所のない金遣ふて。揚屋の手前不埒にしてしまふ人より。遙にましと笑ひぬ。爰に信濃の住人麻生殿の御内に下六藤六とて兄弟の樂助ありしが。金はありても遠國の不自由さ。遣ひすつる遊山所なくて。身を病ものに作りて。兄弟共に都に登り。四條の西に住所定め。さまんの遊興。金有餘つて蒔く事に苦のない大盡。わけて舍弟の藤六は産れ付ての分知り。京着其まゝ。三一と替名して。柏木に比目の〇を並べ。毎日の大騒ぎ。役日も常も外べやらず。前より逢馴し都男を淋しがらせける中に。半六といふ大盡久しく逢馴て。互に命ぎり云替し。浮氣を去て實なる中なりしが。いつぞの頃より藤六といふ大盡に隔てられ。幾日も差合ひ。さふく借も品わるくて。宿屋夫婦を頼み。やうく暮より貰ひて。藤六に負ぬ大氣を出して。萬大場にさばき。揚屋一ツ家に満足がる物とらして。めつたに募つて出て。人の嘲り世の取沙汰何共思はず。名高い末社を數十人集め。天職鹿戀女郎。

めつた掴みにつかんで来いと。太夫手前のぜいに。一度に費の金を撒き。夢中になつて遊ぶ所へ。紺の單物着たる六尺五人して。一石斗り入る酒樽を荷ない来て。是は半さまのお口に合ふ伊丹の蘭菊と申す名酒。去方さまより進上と。臺所にどつかと降せば。一家悦び。大盡様のおかけて結構な名酒を澤山にたべんと。皆々手をかけ。座敷の眞中に直し。才覚な幫間が紅裏の着物うらがへして着し。大盃を手にもち。よもつきじく。萬代迄の酒の大盡と。狸の足元して大盡を祝へば。半さらに其意を得ず。まづ來た所の先はどこじやといはるゝ時。樽の内にこそあつて。來所はきづかひすな先は慥な身共じやと内より樽のかゞみを取て出たる者をよく見れば。半が親父苦々しき顔して息子をにらみ。數度の異見を尻にきかし。野郎狂ひに大分の金を費ひやしける時。勘當すべき所を。町家の詫言ゆゑ胸をさすつて勘忍すれば。又品をかへて此里狂ひに金をあけるやくたいたなし。宿にて勘當せんと思へど。又々親類町中の扱ひ喧し。去によつて此所にて恥を與へ追ひ失なはんと。此頃爰に尋來れ共。宿屋がさとくて風をくひ。つひにおのれに逢せぬ故此方便にて今日逢ふが親子の縁の切目。未來をかけて勘當なり。手振て傾城買れうならば。萬年も爰に居て。仕度事して遊ぶべし。揚屋の爺も金取らずに客にしやらば。それはそちの勝手次第。勘當するからは。向後いか程の出入有ても。身共は必ず知らぬぞやと。跡の跡まで念を入れて。座敷をにらんで歸られける。太夫を始め座中の女郎泣出して。譯もなう成ける。太鼓持の中に手まりの才助といふ頼瓢者驚かず。大盡に力を付けて。是旦那男は裸百貫と申す氣落なされな。親父様も棺桶の試みに酒桶へ入つて御座つた。追付めたい御往生のずいさう。去とは爰が揚屋てなふて。寺でもあらば。一度桶に入れてござつた親父なれば。かへさぬ法じやと。こりや見事に生ながら土葬にする事じやに。大盡のお肩が悪ふて。寺でなかつた斗りに此理屈が云れぬと。頭をかいて悔めば。いづれも涙片手に笑ひ出し。是を肴に亦酒を呑みかけ。責ては半をいさめけるに。はや宿屋にはげんを見せて。手を叩いても返事せず。茶呑もと云へば。兩の手に天目二ツ持て來て。立ながら差出し。歸りさまに。蠟燭消して油火に仕替て行

宵からお前に罷出。輕薄盡して。御機嫌とりし揚屋の男も。勝手から呼びもせぬに。まつかせといひ立にはいつて後に出ず。臺所には吸物仕掛かゝつた鍋の下をひいて。女郎夫々に呼立る。扱もく替るは色宿の習ひ。人の情は金ある内なり。太夫身にしては悲しく。獨り跡に残り泪に沈みければ。半も口惜さ胸に迫り。命を捨るに極めしが。太夫が同じ道といふべき事を悲しく。兎や角思ふうちに。女郎色を見濟し。方様は身を捨給はん御氣色。近頃夫は愚なる思ひ立ち。此儘にて無理死遊ばしては。恥の上の恥也。子として親御の勘當請るが。世になき習ひにてもなし。我身事は如何にしても世に名残あり。勤は夫々に替る心なれば。何事も逢はぬ昔々。是迄の御縁と立行。去とは所思違ひ。半も我を折て。如何に傾城なればとて。今迄の好情を捨。淺猿しき心底。かうは有間敷事ぞと。泪を溢し立歸り。其夜は日比目をかけ置し御方が方にて明し。兎角生ては居られぬ所。とても死なふなら。心底犬に劣りし太夫奴を差殺し。其後いさぎよく腹搔破つて。未來迄も付添。此恨をいふべしと覺悟を極めて身を行水にて清め。死ぬるに思ひつめて。翌日あげやに行て。内儀に逢ふて。先親共の機嫌直る迄。江戸の手代共方へ立退也。然れば太夫に又逢ふ事も稀なれば。暇の盃せんため參つた。竊に是へ呼て給はれと。昨日に替るあいさつ。慇懃に述べれば。内儀も泪ながら。去とはおといしい御事。成程太夫様へもお知らせ申へし先々奥へと。情深ふ申すについて。是等さへ斯く誠ある志なるに。如何なれば太夫はと。愈々にくさも増りて。酒も胸につかへて通らず。枕引よせ世を味氣なう寝るより外はなかりき。太夫其日は風呂屋の作左方に藤六と出合。何か申出して甚しき口舌仕出し。互にふんづ踏れつ。盃みちんになつて。かん鍋に小波たつて。座敷は暴風の朝見る如く。分もなふ亂髪して。太夫がいふ程の事皆無理にして。揚屋一家罷出。さま／＼なだむれ共聞かず。兎角方様に飽ました。向後女郎替てあふて給はれと云ふ。そもやそも男たる者。金でなる女に嫌はれ。何と一分立ものぞ。生ては居られぬ所と。藤六ははたし眼になつて立腹する。所へ遣手が參つて。半様御越と耳語けば。女郎聲高に。何の面目が有て。心汚なう半さまには逢ひに御座つたぞ。昔の如く

よい身になつて御座らぬ内は。千年立ても逢はぬ太夫じやと申と云ふて。歸しましてたもと。すげなくいひ切り。偏に狂女の如くにて前後揃はぬ事のみ。一座不思議をなして。物慣たる末社が罷出て。先大盡を鎮め申す。是にはいかさま仔細の有べき御事。兎角太夫様思召の一通りを繕ひなしに眞直に仰せられいては。眼前旦那が生てござらぬ御心底に極まつたる所。此里に女早はせまじ。お氣に入らぬに無理に逢はふと仰らるゝ大盡にも非ず。只御心の底を明して。様子よく旦那の一分立やうにして。此口舌まひ納め給へ。さもなくては百年経ても濟ぬ事と。道理を責て申せば。さりとはさふじや。皆わしが誤りました。藤六さま。何事も今迄の好に御勘忍なされて下さんせと。人目も恥ず誠の泪を流し。暫く泣て申されけるは。全く藤六様に飽まして申すに非ず。皆も存じの如く。兼て深逢ます半さまと申すお敵。昨日俄に勘氣を受させ玉ひ。當座の恥辱に跡先の考へもなく。死ぬ覺悟極めさせ給ふと見しゆゑ。心に思はぬ詞を申して。水臭く思はしまし。去とて女郎ほど不心底なる者はないと。おはらたつ氣に連て身をすて給ふ覺悟も替り。死にさへなさらねばあなたのお爲。又私の心中なり。仔細は人の親の子を見限りて勘當致すに。其身を匿して此里まで来て。勘當なさるゝ親御はなし。是誠の長き御勘當に非ず。我人身を飾る色里に来て恥辱を興へられしは。此以後此里へ是を恥て。永く足踏し給はぬやうにとの深き親御の御思案にてし給ふ勘當なれば。暫く我事を忘れ給ひ。御出なければ。追付御機嫌なほるに知れた御勘氣と見ました故に。つれなう申たなれ共。藤六様に今迄の如く逢ひましては。折角わしが半様へお爲に致した不心中が誠の不心中になるが悲しさに。女郎替て逢ふて下さんせとは申しました。其思はくは。こなさまと云ふ幅のある男がある故。今迄深い半様を見捨てた。世間の人にいはれては。此云わけ成難し。誠我身事不愆と思召下されなば。半さま御かんきゆるされ給ひ。むかしの如くならせられてのうへに御心かはらずば今迄の如く御不愆加へられ下さるべし。此後變らぬ心底は毎日文して申上べし。御見に入る事今暫しの間遠慮致し度と。涙玉をなして語り給へば。大盡苦ひ顔して。それでは半への心中には成申さふが。更に身共へ

のお心入はないと云ふ者と。急心にて言るれば。さ思召も。理ながら世上にて不心中者と我事悪しく評判致さば。逢て御座る此方様までが御心ようは御座るまい。但し御念比なざるゝ太夫が不心中なといはれても苦しうないか。夫ては御一分よはしとあれば。一座是は尤もと心入を感じぬ。時にねどひの又右衛門といふ物事念を入れる素人末社進み出で。扱太夫様には。親の勘當するに。許す勘當。許さぬ勘當といふ脈あぢ何して御存と云ふ。さて親が子に勘當するに。所を見立てすべきや其儘お主の内にて。何とやうにも竊にかんどうの成され様有るべきに。お年寄られて身を酒樽の中に匿し。窮屈な目をして此里までござつて。大ぜいの付合の中で勘當なさるゝは。懲しとより外見えず。夫も半様が主かゝりにて此首尾なれば。親方腹立の上にて。責ての腹いせに。かく有べき事にも非ず。左ある時には。此方から半さまを進めまして成共。一所に死なねばならぬ場也。是は重ねて立身の當なし。半様はさに非ず。御親子の中と云ひ。殊に御一子と聞けば。暫く此里遠さかり給へば。おつゝ昔に歸り給ふ御身なる故なれば。態と今日もつれなう申て逢はて歸しましたも。あなたに氣を持しまして。無理死なされぬやうに。又此里を見限り。重ねて逢に格子へも御座らぬやうに。愛想もなふ申ましたは。皆あなたのお爲なれと。さぞや今は恨に思召さんと。其日は一日泣いて暮されける。是等を誠の心中とやいはん。半は此心底を知らず。落たと見て逢はぬと心得。兎角遊女程水臭きものはなし。斯不所存なる賣女めに浮々と心を盡す所に非ず。さうした冷たき女と死ては。跡々迄の笑草。此里通ひも今日切りと我と合點の仕時遅けれど。今は早取返しもならず。廣き都に身の匿し所もなく。舊離切れて便りなき身の悲しさの儘。科なき一門を恨み。何も知られぬ町の宿老を識り。振舞の時大きな焼物するがふて。詫言して呉れふともせいで。去とは氣の付かぬと無理な事獨腹を立て。歸らぬ。昔の奢の戀風に。吹上げられて。天竺浪人と成る淺猿しき今日の日も。早や吳竹の伏見の里に。ある人悪所の出合に頼母敷言葉を残されけるを便りに尋行き。漸々其處に嘆きいふて頼めば。主見捨す。表の借屋を明させ。先取敢へず此所に身を置給へと。おろかならぬ接待嬉しく。

半年餘も爰に暮せしが。此門前は大坂街道にして。往來の人絶ず。或日表の店に出て通りの旅人を見れば。町人らしき者四五人連立ち。兎角あなたのござる所は。新町ちかくか道頓堀邊にて有べし。先此二所を第一に尋ねんといふ聲聞けば。皆手代共也。是はしたり何處へ行ぞと。懐しさに思はぬ涙をながせば。お悦び遊ばしませ。大旦那の歸依僧。浄土寺の和尚様色々御詫遊ばされ。頃日御勘氣を許さるゝに極まつて。諸方へ人を差遣はされ御尋遊ばし。我々も大坂へ御迎ひに參る所に。幸ひ爰でお目にかゝる事。私共が仕合と悦ぶ事限りなく。主にも一禮のべ。半を駕籠に乗せ申し。都の住居の御供申せば。親父の機嫌母の悦び。親類家來出入入までいはひの酒盛賑ひ。夫より親父は。萬事を半に渡して。岡崎に隠居し給ひ。思ふ儘なる仕合。聞くと均しく藤六尋來りて。對面し太夫が辛き詞も今此時を未然に知つての事也と。具に語り。扱其後は二人連にて。同じ太夫に〇を並べながら。下卑て首尾する譯もなく。味な事共斗り。前代未聞の傾城買と。世上に是沙汰。事知りとは是なるべし。

第三 花崎實のる玉の輿

身は捨物命は無に打付た太鼓持

五體は違ひなくて。人程變れる物なし。前生にて善き種蒔置けるにぞ。假令ば忍び駕籠に乗る人のあるに。まはす人あり。金銀も死すれば瓦石の如くなるが。生ある内は。是に増れる重寶なし。殊更色里は員數にてはのきく事。一入大盡の威勢も飛鳥仲間とて。上京に御さげの者はや使ひ。江戸に二挺立の小舟。大坂に浮世小路の悪所駕籠。此の如く道の急がるゝ者を拵へ置きぬ。昔は何の書にもない事。今の世の自由さ。次第に人賢ふ成つて。萬に氣をつけ。かゝる事まで巧出せり。迎もの事に。雷を地の底でぐわらつかせ。地震を天へ宿替させ。物前に借錢乞のかたから出違ふやうにさせば。世界に何か思ふ事あるまじと。花の都にも大喧日に留守遣ふ太鼓持風俗恰好願西に似たとて。念

西彌七と云ふ素人末社ありけり。折節吾妻の大盡始て上方見物に上られしを。幸ひと取付き。各所古蹟はお下りしなにも見らるゝ事。先女郎の美しい島原といふ色所を御覽じませと。仲間の可笑き男共七八人招き。まんまと色に赴かせ。何れも伽羅を磨て。大門口より繰込み。萬かさ高に。氣の取上る春なれや。陽氣な男共わやくといふて。丸屋が方に押込。諸事彌七が承つて。幅廣にしこなし。随分粹自慢して。あげ屋へ内證申すは。先金銀蒔に斗り。態々御上京の大盡。お國にては金も瓦も同じ事。兎角人に物遣ねば氣色の悪うなる旦那也。扱此里へは今日が始めての御出なれば。誰方なりとも御意に入たる女郎様あれば。おつとつて當年中は揚詰になさるゝ事也。兎角今も云ふ通り。此度初上りにて。諸分未熟なお客なれば。素い事共あるべし。必ず笑はぬ様に。上する女共にもよく云付けらるべし。お金の蒔時分おそくば。我等まで差込給ふ可し。八幡其處等は抜からぬ男。壹歩といふは初心な事。頭から小判の花を降らす事じやがと。亭主が悦ぶ上を云へば。萬事は貴公を頼み奉ると。疊へ頭を植て悦び。扱女郎様は何れにかとお伺ひ申せば。大盡仰らるゝは。今も彌七がいふが如く。遠國者なれば。かさねて上るもしれ難し。只國方の話の種に。此所の御太夫さまに逢てとあれば。先夕霧さま拍木さま。長門さまさんごさま花崎さま。惣じて斯様の太夫さま達。俄にはなりがたしと申す。如何にもさこそ有べし。併し汝が働にて。もらふとやらは成るまいか。先是にて見事な智恵を出し何卒才覺致すべしと。小判一兩投出さるれば。去とは旦那は京にも稀なお粹さま。どなたなりと命にかけて。もらふて見ませんと罷立。暫くあつて。先以て大盡様の御仕合。拙者が満足は花崎さま。今日は文字屋方に御座りますが。只今御内證聞しましたに。ちと様子ござりまして。もらひがなりさうなと申す。やれ夫こそ取遁すな。人橋かけよといらち給へば。畏て追々人を遣し。愈々ござるになつて來た。是ありがたの影向やと。一座勇みて待つ所へ。御機嫌よく太夫様入らせられ。のつしりと座に付給へば。口鼻出て御引合せ申し。夫より酒面白くなつて。押へたしもせい。しめた間。合點か彌左衛門。心得たんぼ。嫁菜交りのかるい吸物。春めて吞めるはと。

無性に呑て。片端から行きつくを直に床に片付。大盡も寢所へいらせられ。太夫としめやかなる物語。初會のしこなし。此里の目口かわきのそれしやも。我を折る程の床の首尾にて。諸事を捨て此君ならてはと。大方ならぬ打込やう。明日から當月中迄外へ約束無用と。亭主に仰付らるれば。明日明後日は京の大盡さま即ち此所にてのお約束と申す。然らば明々後日か必ず晦日迄。堅く極め置べしとあれば。其段は明日京のお客様に尋ねましてから。お返事申上べしといふ。時に大盡むつとしたる顔にて。扱は身を田舎者ののび助と思ひ。張合をかけ。さしますると見えたり。愛宕。白山。出やうが悪いと聞かぬ氣な男と。六ヶ敷顔付。成程御尤ながら。明日のお客は。兒玉黨の何某。立賣の玉中さまとて。太夫さまとは深い御馴染。此里に匿れもなき御方。あすの御きげん次第で。當年中もその儘と仰出さるゝ事あれば。あなたの御意聞かずにはお約束なり難し。何卒其日の首尾次第に。又今日のやうに。貰ひまして進ぜませんといふ。いや／＼金銀出しながら恩に着て貰ふなどといふ事。大きにいやなる穿鑿。第一其男め戀知ずめなり。金銀の威光に任せ。外の戀をさきて。廓に置ながら。餘の人の自由にさせず。幅なき大盡共の胸を焦させる段。戀は互といふ事知らぬ癖物に。鼻あかせて。一代思ひをかけて後悔させん。さあ此智恵出して見よと。七八人の太鼓共を。近くへ寄て仰らるれば。いづれも爰は一思案と。宵の酒の醒る程案ずるに。兎角太夫様を。引抜き給ふより外はなしと。口を揃へて申上る。成程々々。我等が思案も。夫に極め置べしと。少しの事に氣を持って。ばつとしたる穿鑿。女郎も夫程に満足がらぬ事に。八百五拾兩の内證約束。亭主落付爲とて。紙入に有合の小判渡して。再び歸らぬ金子。残り四五日に才覺して指越べし。今少しの事にて。跡々にさもしき噂もいやなれば。此上に二百兩三百兩餘計の入分は苦しからず。萬事分あしからぬ様に頼むと大場に出て。扱太夫置所は。樵木町の伊寺やらが座敷と極めて。お内儀。木屋町の家見に何を以て御座るぞ。芝居見がてら朝とくから御出を待なり。恐らく日本廣しと雖とも。初會から受出すといふ事。我ならでは有まいがと。いづれもよい機嫌で笑ひ立にし歸りぬ。翌日玉中爰に來りて。機嫌子を聞

より胸塞がり。去とは無念千番。兼て我受出す方存なりしが。今少し心得かぬる所あつて。その心底を見届るまでと延引して。今の後悔。太夫と我中。凡西三十三ヶ國には誰知らぬ者も無きに。今外の手に渡しては。此里知りぬ男共。に後指さるゝ所。生てはいらぬ首尾。死ては猶又此上の恥辱と。大分は亂氣の如く狂はれしを。亭主を始め末社共取付止て。昔より身請に貰ひといふはなき事ながら。是斗りにはどうぞ貰ひがなりさうな所ありと。亭主申し出すに力を得。金銀づくでなる事ならば。廓中に金をしくべし。随分智恵を出せとあつて。當座に見事な御事。兎角斯様な事にせいたは悪しと。仔細らしく鎮めて申せば。尤も慥に請るとの約束ながら。此客始めてなれば。あなたがち馴深て引抜かるゝとも見えず。酒機嫌に少しの事を氣に持ち。せんしやう一遍に請らるゝ様子なれば。何卒手を入れ。かの大盡の膝元去すの彌七と申す太鼓に。内證からお頼みあらば。十に五且那のお手に入るやうに成まい者でなしと申せば。大盡喜悅あつて是は責ても手がかりのある相談。どうぞその彌七に吞込せやうの才覺あるべきことあれば。愚や且那。其邊は小判で頼張るなり。殊に此者今居る夷川の借宅居なりに貰ひたきよし。家代二貫七百目の願ひ。頃日大盡へ訴訟の最中。是さへ遣はするれば。自身胸をさいて。生肝にても指上るは慥な事と申し。夫は何より易き事。兎角は彼奴に片時も早く逢ふて。先様の所存聞たしと。談合半へ彌七次の座敷へ參つて。何か内儀と密に内談する體。いよく極めに參つた者であるべし。爰こそ件の家買ふ代金。皆迄いふな。五十兩の小判にねたば合せて待てゐる。早く連れて參れの。御意畏つて次に立て。彌七に逢ふより早く機嫌取顔にて。こりや世界の仕合男。家てか金でか望次第に。貴殿が心任せの春じやとめつたにのぼらすれば。そういふ主人が機嫌程迷惑な。兎角口先では。いひ抜のやうにて一分よわし。斷は是也。何事もこの心底にめんじて。勘忍してくれと。兩肌ぬげば下に經帷子を着し。左の手に珠敷を持ち。右の手にて脇差抜く時。亭主肝を潰して。やにはに取付。先様子を問へど。死て跡で知れる事と語らず。兎や角いふ聲に驚き。奥より大盡を始め末社残らず駈出。何がなしに先脇差を引取り。兎角様子を語りてのう

へ。兎も角も汝が心任せといふ。然らば仔細を語るべし。昨日供して参りし東の大盡。太夫様を請出すに極めて歸りしゆゑ。愈々堅めに。只今知恩院門前の旅宿へ参りしに。朝未明に宿をあけて。釜の下の塵も灰もないやうに仕舞ふて立退ける。左様の大管者とも知らず。眞實と思入れ。諸事を嵩高に捌き。各々を我等がちよろまかしたと思はるゝ手前。如何にしても面目なし。とかくは死て我等ぐるみに欺されたる所をお目にかけんと。涙を流して申す。各々横手を打ちて。これは格別なる首尾。玉中さまのお爲には。又なきお仕合。去とは彌七いひ出しやうが早し。今少し待て。あなたの事を聞てから覺悟極れば。兼ての願ひの夷川の家が手に入ものを兎角果報のない曾我耳じやと。大盡の思召しいれ残らず話せば。彌七死ぬるを止て。扱も残念千萬。此方から詫口云はずに。あなたから言はせませす事じやにと。大笑ひになつて。愈々太夫の身請に究り。千兩の光り廓に輝き。榮花の花崎威勢の盛り。幾千代かけて御中よく。太夫さまは九十九迄相生松風。小歌の聲で樂しむ。

第四 花は散れど名は九重に残る女

身は賣物心は自由自在にならぬ天神

世に親仁と名さへ付ば。我人恐れて。仕掛し色話を止めて。當年は麥がようござるのと。手の裏をかへすやうに。話も一調子低うなつて。一座俄にめいる事親仁身にしては迷惑千萬。親仁とても人間の種にあらずや。本悪性人が。年のよりたるが皆親仁といふ。怖きものになれば。あなたが滅多に怖がらふものでもなしと。後家おやにかゝつて我儘に背たる男が。世間に厳しき親仁のある事を知らず申し出せど。恐い親仁は當世の浮氣男とは格別仕込の違ひし者なり。第一若い時から身過を大事にかけて。かせぐ事には夜を寝ず。氣根つよふ勤て來た目で。今時帳合仕さして。遊ぶ事に夜を寝ぬ息子共を見合ては。氣に入らぬが道理なり。昔とても色遊びのないではなけれど。金の使ひや

う格別なり。先親より譲られし銀など。仇に遣ふ事に非ず。商事に自然の仕合よく。思ひの外に利徳を得し時。まづ冥加の爲とて。お伊勢さまへお初尾銀十二匁。りんと掛けて退けておき。扱旦那寺へ盆正月の禮の外に。いまだ遠き母の三十三年忌の布施まで包み。其上に今年四ツに成る乙娘が。嫁入する時の心當に。長持をあつらへ。水風呂より湯風呂が徳なれど。拵へる事を造作に思ひ。四五年も案ぜしに。是幸ひとして仕舞。こんな仕合一代のうちにさいさひはなき金儲なれば。思ひ切て鹿戀女郎只一ツ買ふて見んと。遣ひ残りし五十匁餘の銀の内から。随分つきの悪きを撰り出し。十八匁に少し輕うかけて。獨り行くも淋しく。幸ひ參宮せし時分。留守見舞に看くれられし返禮に。向ひの四郎左を招ぎ。揚屋の夕飯振舞ませうと。雨の降らぬ日。朝とく起て。朝飯さし急いで。はやり芝居見物に行にもはやき時分。揚屋に行て遊びしが。今時の若い者は。此處から彼處の一跨ぎある島原へ駕籠に乗て行げな。あゝ勿體ない事斗りと。輪珠數線々昔を語るゝ年寄あり。されば一切の親仁皆斯の如く。物堅きかと思へば。去とは世界廣し。東洞院に隠れもなき。鱗形屋の徳政とて。有徳なる禪門ありしが。六十已後唐物のあがりを受けて。俄に樂しくなり。それよりいよく借し銀が働き。内藏にもあまりけるが。若き時より秤目をせりて。朝暮渡世に油斷なく而も下戸なれば。浮世の樂しみ絶て。やくたいもない年月を送られしが。物には時節あつて。此禪門七十と申す春の比より島原狂ひを志ざし。夢の如く氣を浮して。頭から一文字屋の名高い太夫に馴染て。其頃の至り末社共を召つれ毎日通はれける。是かや日暮て道を急ぐに似たり。撞木杖ついで床入せられしが。腰は反橋の如く。誠の事は思ひもよらず。足の延び屈みさへ成がたくて。齒もないはぐきをくひしぼり。身をもやして無念がり。我責て廿年前に此里狂ひの志あらば。仕度事をして樂しむべきに。今となつて口惜や。兎角向後床を止めて。名に聞し太夫天神を残らず招き。太鼓におもしろい酒を吞せて。金に飽して騒いで遊ばんと覺悟究て。人のほしがる者懷より取出し。出る程の者に五兩七兩づつ取らされければ。いづれも悦び。是は親仁さまに死花がさくと勇みける。其より次第に粹に

なつて。一座の酒ぶり味をやられ。輕忽の落語も仕覚え。仕掛の嘘も見出し。七十に及て譯知りといはるゝは。誠におんざの初物なり。或時出入の素人末社を召れ。我若く盛にし。女郎に鉢巻もさする程に勢の強き時は。揚屋の小盃をだに手に取らず。さもしくも金銀溜る事に可憐年月をおくり。今樂み至極の色遊びに肝腎の分の立たぬ時に至つて。此心ざしの出来し事返すくも残念なり。然れば色狂ひの盛といふは。二十三より三十五迄なれば。世倅政右衛門にも今〇〇〇〇〇時。色遊びをさして。人間に生れし甲斐を知らすべし。是が眞の親の慈悲なり。汝等依て此道を勧め。人にも大盡といはする程の。粹にして得させよ。金銀は息子が心當に内藏一ツ手を付けずのけて置たれば。かならず始末せずにはつとした騒ぎ致す可し。穢なびれた差配して。親の名までを下すな。女郎は大坂やの若むらか。みやまぢ好かるべしと。物馴たる末社三人御子息に付られ。親父金本しての女郎狂ひ。神代此のかたない事と。藏の鍵まゝならぬ息子共が。咽喉を鳴らして羨みけるも道理ぞかし。此息子當年廿八になつて。器量よく。姿は當世男に生れ付け共。正直にて嘘付すべをしらず。律義千萬にして物堅く。我妻の外には。女の肌といふものをしらず。姨のもとより給はりし桃色にせめし。柿染のふんどしを今にかきて。後生大事とかまへたる男なれば。末社共が勧め更に耳に聞かれねば。禪門氣の毒がられ。兎角當流の末社は。物がたき風にはあはぬ筈と。日頃息子がねんころに語る。我より下めな友達共二三人に大略を語りて頼み。不食な病人に。粥を進めるやうにいろく〜と謙し。一ツは親仁が氣休めなれば。親孝行と思ひ。永ふとはいふまい。責て今年中。女郎狂ひをしたもれと。やう〜と合點させ。痛いものにさはるやうにして。島原に伴ひ行き。揚屋へも親仁から此内證申しつかはれ。常の客とは替り。諸事物堅うしかけ。何卒其里飽ぬやうにしてくれとお頼み。夫畏て。物に心得たる揚屋の亭主。下袴着し表までむかひに出。座敷に通しまし。見苦しき所へ忝きお出と。時の旦那の氣に入るやうに。慇懃に手をつけて申せば。息子大盡作り付の人形のやうに畏り。私義は東洞院通りに罷在る鱈形屋の政右衛門と申すものでござる。扱是なるは

同町橋屋道西老の借屋に居られます。請酒屋の五郎兵衛殿と申。又それなるは。珠數屋の喜助殿とて。善願寺前の人。爰なは私南隣に突米屋の茂平次殿とて。ほりり商賣でござれども。七人口ゆるりとの暮しと。微塵匿さず有の儘に引合せば三人の連は汗をかいて。さあ〜酒にせまいかとまぎらかせば。亭主可笑さを胸に納めて。是は詳いお引合。近頃よい御近付を求めましたと。臍の緒きつて。遂に申さぬ挨拶すれば。自然町筋へ御出の折から。驟雨に何時なりとも。下駄傘の御用には立ませうと。物堅き口上すんで。扱女郎さまは一文字屋の天職。とも多といふ若女郎に内證申して。内儀つれまして出られ。近付にいたされ。それから。盃事始まつて。座中酒機嫌にもんさく盡して高笑ひすれど。大盡は膝も直さず。盃手前へ来る時は。手習寺でならふた通り。念ひていたゞき。大事にかけて雫も酒をこぼさず。一滴七十五粒が所と。過てもあけるといふ事なく。さゝれた方へ屹度戻し。其度毎に看をはさみ。其箸を我もいたゞいて下におき。さま〜可笑き身振。一座勘忍し兼てこりやならぬはと笑ひ出せば。我事もしらず。おなじやうに大笑ひ。亭主夫婦も我を折り。天地開けて。揚屋といふものはじまつてより此かた。かやうの珍らしきお客はなし。親仁さまとは格別世界と申あへり。扱膳出れば。座のせんぎ暫時して各々膳に向へば。大盡亭主に丁寧なる時宜をのべて。一献過て。焼鳥蒲鉾を。上する女が見ぬ内に。鼻紙だして手ばしかく包み袂に入る時三人の連興を醒して。兎角此世の人ではなし。長居する程恥のかきあきと。床にも入らずつれ歸りし。世には息子もあれば。世界の事一概にはいひ難し。或時越後の半九と云ふ大盡の元より。澁紙包一ツ。職人らしきひわかい男があげやへ持参して。御亭主に直に渡し度と申す。主罷出て請取。御太儀に忝なし。御茶でも参つて休みてござれと云へば。まづそれをあけて見て下されといふ。中改めて請取書で進するに及ばず。追付こなたから御國元へ。御返事を申上べしと云へば。其中に私金がござります。改めて見て。傾城買はして下されませと申せば。亭主ぎよつとして。紙包ほどき見れば。島桐の小箱の中に金子百兩半九大盡の添書一通開き見れば。此吉藏と申す男。一文字屋の天

職。巴と申す女郎を。去春御影供の歸るさにちよと見しよりも。大方ならぬ思ひとなつて。此度態々と其女郎に逢に
 斗り罷登るの間。随分馳走いたさるべし。先色狂ひの手付金に百兩相渡さるゝ。是に限るべからず。いかほどにても
 入用次第。其元我等定宿へ申遣はされ。其里の分悪からぬやうに頼むのよし。懇に書かれたり。亭主俄に詞を替て。
 よくこそ御入り。先奥へお通り遊ばし。御酒でも召上られました上にて思召入も承り奉らんと。内儀も出られ。
 樋て庭はき紅はき詞に色を付てさすくのもてなし。扱女郎さまけはならしやりませぬと。遣手が申す詞にすが
 り。けふのお客のおもわく詳しく語りて。あるじ夫婦ひたすら頼めば。此遣手後世願ひにや。よく聞入れて女郎に申
 入れば。情にまはる巴にて。御志の嬉しければ。此方のお客に斷り行べき由。大盡へ文を遣し捨て其まゝのお出。
 忝なきは揚屋の仕合。お引合の酒事すきて○○○○ども。吉藏酔ひて何の事なく○○○○らず。其夜は明て其儘歸
 りさまに。又の日から千日續けて契約いたし。此所に礎をおろさせ申し。沖に漕たる遊興。末社もなくて一家をあつ
 め。主に預けし百兩を心よく蔣散せば。揚屋のさしきは時ならぬ山吹の岸かと思えて。宇治へも聞ゆる斗り。辰巳上
 りな聲を出して。聞しに増る大盡と。笑を含み悦びあへり。されど此吉藏大盡。○○○○ど終に一度も分を立たる
 事なし。女郎不審さに。大盡にも面白く酒を進め。我身も酔ふ程呑て。今宵は慮外も酒の科にして許し給へと。わが
 方○○○○。○○○○。○○○○。○○○○。○○○○。大盡更に其景色なく。何事も叶はぬ
 うちこそ戀路なれ。心の儘に自由なしては。妻女も同前。是ばかりは残しておきて。志の互に變らぬこそ。本戀なれ
 と。誠は解けぬ○の結目。堅い○とは是なるべし。ある時女郎申されけるは。その事なくては。御心底斗りがたく。
 萬に心おかれて。更に面白からぬ御事。誠我思召ての御出とは存せず。逢ひまして廿日に餘る○○。夢斗りのおた
 はふれば。釋迦でもあるまい物てなし。兎角御心の底打割て聞まじいと。巴は浪の紋郡内の袖を濡してかき口説
 かるれば。愚や思はぬ御身に。大事の日を爰に暮して。艶顔を拜し申すべきや。誠の心は今日ぞ知るべしと。亭主に

兼て申渡せし身請の事も。愈々今日に極むべしと。五百兩の外に。五貫二百目の借銀まで持せ來れりと。供の者共呼
 よせ。挾箱あくれば。それにちがひはなかりき。女郎尚ほく不審晴ず。此里御出し下さるゝ。御心入は嬉しけれ
 ど。逢染てより今日までの御しなせ。更に實とは見えす。よもや戀にて引抜き給ふにはあるまじ。さあれば方様に
 連られて參ること。嫌と申し切る。亭主夫婦遣手まで。是は一興なる太夫さまのお詞。此里を出給ふは御身の譽れと
 申。御一生の片付。何とか心得給ふと叱り申せば。大盡聞れて。いやくはは女郎の道理なり。今は誠をあかして聞
 せん。我事實は越後の者に非ず。皆も知るゝ。當地に於て隠れなき曲水と替名を申して。此女郎の姉御菊川といふ美
 君を先達根引にし給ふその大盡の家來。吉藏といふ者なり。頃日菊川我旦那に願ひ申されけるは。我身事御影にて廓
 の苦思を遁れ出で。かく榮花に暮し侍る事。深き御恩。死しても忘れ難し。併し御存じの如く。獨の妹を。廓に残
 し。憂き勤をさせぬる事。此身になりて思ひやる程可愛し。逆ものお情に。妹巴も我に同じき身となし給ひ。兄弟
 共に御不慙加へられなば。何か此上の望あるまじと。わりなき心底。大盡聞届られ。夫こそ安き望み。早速今日にも
 請て逢すべけれど。そなたを請てまだ間もなきに。又引ぬきしと。世間の人に。奢のやうに沙汰せられんもむつかし
 とあつて。即ち昔の色友達。越後屋の半九様へ此趣を仰つかはされ。あなたの添状もつて。越後者と偽り。表向は
 我等がつかむ分にして。内證は御兄弟一所におかせるゝ心入。必ず外へは沙汰なしと。一家の口を堅め。直に姉御
 の方へ御乗物を掻入れ。廓を離れて兄弟の對面。是斗りには嘘のない涙を流し。悦び泣くとは床の外にもある事か
 と。吉藏が一代の出來口。先取あへず盃事しまふて。是から申椀がはじまり。うれしい時の酒は胸にたゝへず。何
 時よりは大酒となつて。曲水大盡もよい機嫌して。菊川といふも流に近き名なれば。けふよりして人のほしがる物の
 色に粧へて。山吹とめされ。月にも花にも。雪にも螢にも後付のよい兄弟の女郎を眺め。あした夕の樂みに。姉に
 色系ひかせ。妹にうたはし。萬自由の暮し。天晴此家の大將木會殿の顔して。右左に巴。山吹をおいて。床のたはふ

するといふ。扱はさんご様の御敵か。儘に此願成就なり。かく鯛やの門口で逢ふたからは。目の好いは知た事ぢやといはゞ。近頃満足。此太夫様を。又出来まじき上作物。ぬり砥にかけても。みぢん病けのない生れ付。さのみ酒事に上手をも出し給はず。詞に數なくして只何となく機嫌よく。角々まで氣もつけられず。如何にしても一座の大様なる所。假令島の木綿布子着せましても。誰が目にも太夫さまと見ゆる女郎は此君ぞかし。あはれ人の目がお役に立者ならば。我が兩眼攫出して。太夫さまの御目御養生なさるゝ間掛がへに進じまして。大盡お手前。眼代として二百ばい程申うけ。東寺あたりによい田地求て。物前しらずに大晦日の闇も目くら蛇におぢず。杖一本で。行たい所へ行身になる事じやにと。無用の欲ばなし。汝如きの末社の眼をかりて太夫職を勤め給はゞ。大盡のよい羽織に目がつき。脱るゝと直に着取の胸算用したり。一盃受て。呑苦い顔して。花待ツいやな。下心など。取手引手に欲て仕擧た眼なれば。お役にたゝぬがましと笑ふ。いか様云は云通り。女郎は無欲で持た者。又大盡の金銀の沙汰なく。賢過た方より。少し鈍き方が。大様にしてよし。去ば今日病の地藏へ代參仰付られし大盡は。糸屋町に匿れなき。色狂ひの旗頭。熊谷笠の新平と名のつて。島原陣に一度も不覺を取られず。金銀の矢種盡ねば。當るを幸ひに。はらりくと蒔散し給へば。揚屋一家はいふに及ばず。犬まで見しり奉つて。尾を振てお出を喜ぶ。同じ人間と生れて。斯る浮世を面白めにあひ給ふは。よくゝ前の生てよき種を蒔おき給ひ。今女郎に拔せらるゝ鬘とは。生出侍るか。高足駄はく行人も。此大盡を見て。又の世の事頼母しく修行致しぬ。こんな大盡に合せらるゝ太夫様は。大果報者といふ者。追付根引の花やつて。乗物の内より東山の春を詠めやり給ふべしと。四十末社の物共。大盡の御意に入べしとて。もて囃せば。去とは太鼓持には似合ぬ不物好きな事を申者共かな。世間の大盡。女郎を請出すは。昔。奇心から。算用づくで請る也。假令ば一度に千兩出して引拔ば。當座は大氣に聞ゆれども。揚つめの算用して見た時は。三年過ると只になる也。我等が物好きは。其算用づくには構はず。愚を事一にすれば。何時迄も此里において見るが面

白し。色里離て町家に於ては。常の女の少し取りなしのよい分なり。下屋敷に於て通ひ女にと思ひよれど。是も半分は汝等が物になれば。我逢ふ内は人に逢せず。千年も揚詰にして遊ぶこそ心よけれと。毎日手を替へ品を替へての大騒ぎ。殊更過し名月の遊び。月宮殿にて玄宗と楊貴妃兩吟にして。曲拍を舞されしも。廻り遠き慰み。ほしがる物ばつばつとやつて。人をまはして見る程の遊び。又外にあるべきや。いつもといひながら今宵の爲には。分て柏屋權右が二階座敷。南うちはれて夕眺め。月は手池にして。太夫のさんご夜中新月の色深く。二千里の外までまはらせ。色糸ひかせて謠して。面白過てけうとい程に騒ぎぬ。爰に此大盡のお友達。大文字の山様といふを知つてか。成程夫は洒落た事のお好な一文字屋の井筒大盡か。如何にもいかにも。浮世の遊び事仕盡して。萬に洒落た物好き。酒がちな提重拵らへ。近所ののらさをさそひて。都一番の月の見所を。我等案内して見せ申さんと。島原なる南の揚屋の堀の下なる。島の中に酒事始て。爰の月のおもしろき事。人は知らざりけるといはるゝ聲。柏屋の二階にきこえて。大盡耳敏く。今の聲は儘に山てはないか。何として其處には居るぞ。是へ參つて面白き酒を呑めと。詞をかけられしに。そこへ行けば氣がはつて慰みに引口あり。心をそこになして爰での月見。堀一重の違ひ斗り。物の入らぬ遊興。ねざめ心やすしといへば。二階も下もどつと笑ふて興になる時。其座に入鹽居られしが。聲かけて。是は替つた出掛やう。山さま。うまき物を進じますと。一重に芋入て。帯にて下られしを請取。近頃お氣の付た女郎さま。是忝しとかへしさまに。前巾着より錢十五文取出し。重箱へ入れて却へされしに。入鹽は紅葉を顔に散し。赤面して。此錢はと問るれば。儘當年は一升が十五文かと存じたと。又大笑ひに腹を痛めし。其夜は事なるに。或女郎好物の由にて。臺所に芋をしたゝかせしめられ。口拭ふて二階へ揚り様に。箱階子の中程にて。取はづしての高鳴座敷に響渡り。へ風はげしく。二階のおのゝ驚き。女郎様さうなが。天晴見事な秋の夕べかなといふ時。太鼓の吉介下に居しが。頓て女郎の尻を突ば。手を合して拜まるゝ。すかさぬ男なれば。合點でござるか。詞をかけて女郎を下して。吉介二階に

上れば。未社の身として人も無氣の振舞と。大勢立重つて胴を打されて濟ぬ。いて其時のへを負し其返報に。加賀一匹當座にもらひ。其上に此女郎の年の明まで。毎夜錢入ずによい目に逢事。こんな身替りには我々とても立たしと。髭の喜八が咄聞けば。又氣を死なさうものごなし。太鼓がきかずば。随分男作つて。生付の低い鼻を引延して成共。見せつきを拵へて。金後家に思ひつかるゝ仕掛すべし。さりとは世をせきせまう。思ひ給ふな人々と。いさめて其夜を明しけり。

傾城色三味線 京之巻終

傾城色三味線 大阪之巻

大坂新町女郎惣名よせ

▲新町筋大坂屋しほ内

- ▲一太夫 すみのゑ 引舟 こぶち
- 一同 ゑぐち 同 大しま
- 一同 やしほ 同 岩さき
- 一同 かしわぎ 同 高さき
- 一同 花さき 同 こにし
- ▲一天神 たちばな 一天神 なにはづ
- 一同 きよはし 一同 大はし
- 一同 しが 一同 さもん
- 一同 おかやま 一同 ふもとち
- 一同 さんご 一同 こゝのへ
- 一同 ともり 一同 高つの
- 一同 むこく 一同 ありはら
- 一同 うきはし 一同 たき川

戀づま 一同 きく川

▲一かこい した川

- 一同 戀づま 一同 きく川
- ▲一かこい よしたか 一かこい 玉がわ
- 一同 おのやま 一同 山がは
- 一同 岩くら 一同 いわさき
- 一同 ふなばし 一同 高さき
- 一同 はなさと 一同 さくらゐ
- 一同 こにし 一同 小ふぢ
- 一同 みをの 一同 やまざと
- 一同 大しま 一同 せんよ
- 一同 なかやま 一同 わかし
- 一同 田むら
- ▲同筋 木屋長右衛門内
- 一同 一太夫 さど 引舟 のせ
- 一同 きんご 同 さもん
- 一同 ゑちぜん 同 さかた

▲一天神 やへぎり 一天神 ちさと
 ▲同筋 つち屋彦兵衛内
 一太夫 たか田 引舟 せ川
 一同 おぐら 同 かせん
 ▲一天神 今川 一天神 緒川
 ▲同筋 丸屋九郎左衛門内
 一太夫 小ふぢ 引舟 くも井
 一同 おうしう 同 はつの
 ▲一天神 ふぢゑ 一天神 ふぢ山
 ▲一かこい はつの 一かこい くも井
 ▲同筋 扇屋牛之助内
 一太夫 若むらさき 引舟 にしを
 一同 もろこし 同 こにし
 一同 きちせう 同 もがわ
 一同 小むらさき 同 もなか
 ▲一天神 かづらき 一天神 大はら
 一同 まつ山 一同 あさづま
 一同 かわち 一同 山ぎし

▲一かこい つまぎ 一かこい さわだ
 ▲同筋 扇屋四郎兵衛内
 一太夫 しきぶ 引舟 きてう
 一同 大くら 同 大濱
 ▲一天神 ちよはし 一天神 おぎの
 一同 せやま 一同 みやこぢ
 一同 とよ川 一同 はつね
 一同 山の井
 ▲一かこい 高さき 一かこい みちしば
 一同 小いづゝ 一同 みざわ
 一同 きんさき
 ▲同筋 住吉屋長左衛門内
 一太夫 うてな 引舟 つまぎ
 ▲一天神 やへやま 一天神 やまと
 ▲一かこい つまぎ
 ▲同筋 扇屋三郎右衛門内
 一天神 大しま 一天神 たかを
 一同 とよさき 一同 はつ山

▲一かこい よし川 一かこい きよはし
 一同 たかつ 一同 市はし
 一同 みやま 一同 かづらき
 ▲同筋 車屋庄左衛門内
 一太夫 おうしう 引舟 おのへ
 ▲一天神 みちしば 一天神 わこく
 ▲同筋 近江屋後家内
 一天神 玉かづら 一天神 千種
 ▲同筋 繪屋吉右衛門内
 一天神 大倉
 ▲越後町筋 よしのや勘左衛門内
 一太夫 あふ夜 引舟 しのぶ
 ▲一天神 からさき 一天神 かりう
 一同 大さと 一同 鶴川
 一同 はな川 一同 うぢはし
 一同 高はし
 ▲一かこい すみのゑ 一かこい 小ざつま
 一同 せがわ

▲同筋 茨木屋妙了内
 一太夫 かほる 引舟 もんど
 一同 よしの 同 とやま
 一同 ことうら 同 いづみ
 一太夫 半太夫 引舟 こてう
 一同 わかうら 同 花前
 一同 万太夫 同 高津
 一同 小太夫 同 つがわ
 一同 しづか 同 いくしま
 ▲一天神 みうら 一天神 わかわら
 一同 長はし 一同 小いづみ
 一同 しがの 一同 きんざん
 一同 かしはぎ 一同 はせ川
 ▲一かこい よしざき
 ▲同筋 丹波屋吉右衛門内
 一太夫 うき舟 引舟 ふじたに
 ▲一天神 井づゝ 一天神 小むらさめ
 一同 三濱 一同 稲野濱

- ▲一かこい 梅がえ 一かこい いづも
- ▲同筋 いさご
- ▲同筋 さかいや半右衛門内
- ▲一天神 さわなみ ▲かこい きんご
- ▲同筋 茨木屋次右衛門内
- ▲一太夫 あづま 引舟 わかの
- ▲同筋 若くら 同 きよしま
- ▲一天神 やしう 一天神 木の間
- ▲同筋 かつしま 一同 とのも
- ▲一かこい きゑつ
- ▲同筋 和泉屋治郎右衛門内
- 一太夫 みよしの 引舟 はつの
- ▲同筋 みちのべ 一同 なかつ
- ▲一天神 みなぎり 一天神 かよひち
- 一同 むめがゑ 一同 うす雲
- 一同 かまくら ▲かこい 松さん
- ▲同筋 京屋千太郎内
- 一太夫 御幸 引舟 左京

- ▲一天神 おこと 一同 つまぎ
- ▲同筋 たかま
- ▲同筋 京屋喜左衛門内
- ▲一天神 みちしば 一同 あふさか
- ▲同筋 高嶋屋九郎左衛門内
- ▲一天神 みやこ 一天神 山路
- ▲同筋 のかせ ▲かこい さやま
- ▲一かこい きよはら 一同 きしだ
- ▲同筋 ぶぢ屋兵左衛門内
- 一太夫 よしだ 引舟 よしざき
- ▲一天神 みさ山 一天神 やゑがき
- ▲一かこい うねめ 一かこい こゝのへ
- 一同 やちよ 一同 しきつ
- 一同 ふぢ山 一同 わかを
- ▲同筋 伏見屋忠兵衛内
- ▲一天神 高田
- ▲一太夫 あわぎごいしや彦右衛門内
- 一太夫 みちとせ 引舟 かつま

是より端女郎の部

▲新町筋南側の分

- ▲一天神 いもせ ▲同 万代屋治兵衛内
- ▲一天神 あづま 以上
- ▲つちや彦兵衛出みせ
- 一かげ 長ざん 一同 ゑちご 一同 のむら
- 一同 つまぎ
- ▲木屋市郎右衛門内 一しほ 右京 (一かげ しづゑ 同 たかせ 一太夫)
- ▲ふしみや大吉内 一しほ あつま
- 一かげ いさご 一かげ つま川 一かけ ふぢゑ
- 一かげ こゝのへ 一同 大しま 一同 まさづま
- 一同 たかま 一同 わかを
- ▲ゑなみや治右衛門内 一かげ 正之介
- 一同 はつはな 一同 正をか 一同 とやま
- 一同 よしの

▲大和屋宇右衛門内

- 一かげ なにわ 一同 はつね 一同 ふぢへ
- 一同 みかさ 一同 いりゑ (一月 もなか 同 やま)
- ▲ゑや吉右衛門内 一かげ 松がへ
- 一かげ ふぢがへ 一かげ はせ川 一同 みな川
- 一同 初ふぢ 一同 はつ花 一月 梅がえ
- 一月 たき川 一月 もなか
- ▲八木屋武右衛門内 一かげ なか山 (一かげ おたまき 同 たかつ)
- ▲まるや勘右衛門内 一かげ 玉おり (一かげ 市むら 同 もろこし)
- ▲あはぢや仁兵衛門内 一同 なるせ 一かげ ふぢなみ
- 一かげ わか山 一同 なるせ 一かげ ふぢなみ
- 一同 ふぢさき 一同 しら玉
- ▲まるや九郎左衛門内 一しほ はつせ (一かげ うきはし 同 玉がわ)
- ▲もづや勘右衛門内 一かげ なるせ (一同 たかつ 同 もなか)
- ▲しほや三右衛門内 一しほ かつ山 一しほ たらさき 一しほ はつぎ
- 一かげ ふぢゑ 一月 とみ川
- ▲車屋庄左衛門内

- 一かげ かつらき 一かげ きよ川 一かげ あさづま
- ▲かしわや治郎右衛門内 一かげ あやめ 一月 かるも
- ▲くるまや庄三郎内 一かげ うき舟 一かげ 岩さき 一同 はつゑ
- 一同 かけはし 一同 長ざん
- ▲吉野屋孫太郎内 一しほ 小太夫 一かげ 金太夫 一かげ 萬太夫
- 一かげ よしの 一かげ かつらき (一かげ 市しう 市しう)
- ▲花田屋庄右衛門内 一月 よしおか 一月 さんしう 一月 はや川
- 一月 みざさ 一月 吉の丞
- ▲田中屋おぬい内 一かげ きよ 一かげ いくた 一かげ のかぜ
- 一月 やちよ 一月 右京
- ▲久代屋作兵衛内 一かげ かつらき 一かげ かつさ 一月 きよ崎
- 一月 たかを

- ▲天王寺や平兵衛内 一かげ おどわ 一同 すみのゑ 一同 まんよ
- 一同 ちとせ 一同 だいぶ 一同 せがわ
- ▲田中屋辰之助内 一かげ たき川 一同 はつ川 一同 すみのゑ
- 一同 さもん
- ▲ふしみや彦左衛門内 一かげ やそ嶋 一同 若むら 一同 おだまき
- 一同 住のゑ 一同 正ちよ 一月 かつらき
- 一月 みづき 一月 もしほ
- ▲大和屋宇兵衛内 一かげ くめ川 一同 ふぢ川 一同 みかの原
- 一同 しき嶋 一同 あふさか 一月 あり原
- ▲くるまや庄兵衛内 一月 とよ川 一同 とよ嶋
- ▲是々新町 北側の分
- ▲かわちや善四郎出みせ

- 一月 はつね 一同 よしざき
- ▲つち屋彦兵衛内 一しほ よしの 一かげ はつせ 一かげ みかさ
- 一かげ わかを 一かげ わかえ 一同 よし松
- ▲かわちや善四郎内 一同 かつらき 一同 川ぎし 一月 右京
- ▲あなみやおぬい内 一同 くに川 一同 たき川 一同 せ川
- ▲いせや養庵内 一同 いくよ 一かげ やへざくら
- 一同 いくよ 一月 きく川 一同 くめ川
- ▲ふしみや喜右衛門内 一かげ よしざき 一同 きり嶋 一同 あやめ
- 一同 ちち川 一同 よしをか 一同 よしの
- 一月 あふ坂 一月 たかを
- ▲やましろ屋妙意内 一かげ はせ川 (二月 だんぶん かせん)
- ▲ふしみや八兵衛内 一かげ きよはし 一かげ はつざき
- 一月 かつらき 一同 かわち

- ▲ふしみや大喜出みせ 一月 きんご
- ▲京や仁左衛門内 一かげ のかぜ 一同 おとわ 一同 市川
- ▲ひらのや伊左衛門内 一かげ いくよ 一同 おぎの 一同 大なみ
- 一同 おのしを 一月 おのへ 一月 せんよ
- 一月 おだまき 一同 みなと
- ▲かわちや七兵衛内 一かげ さくらき 一同 左源太 一同 やちよ
- 一同 つま川
- ▲ふしみや五郎吉内 一しほ 梅がへ 一同 おぐら 一かげ はぎの
- 一かげ みさほ 一かげ むめ川 一かげ はへの
- ▲ふしみやめうと内 一かげ はせ川 (一かげ よしざき)
- ▲住吉屋長左衛門内 一しほ はつせ 一しほ かけはし 一かげ 住のゑ
- 一かげ 大ぶね 一かげ みなと (一かげ たかま 一かげ みさき)
- ▲つたや三郎兵衛内 一かげ やちよ (一かげ おぐら)

- ▲あふみや貞壽内
 - 一しほ 玉ちよ
 - 一しほ 玉むめ
 - 一かげ 玉いせ
 - 一かげ 玉き
 - 一かげ 玉のと
 - 一かげ 玉ぎり
 - 一同 玉はし
 - 一同 玉ぎく
 - 一同 玉しげ
 - 一同 玉もと
 - 一同 玉きよ
 - 一同 玉くに
- ▲いづみや宗佐内
 - 一かげ こまざき
 - 一月 小まづま
- ▲山しろや次郎左衛門内
 - 一かげ こがわ
 - 一同 やへやま
- ▲扇屋四郎兵衛内
 - 一しほ はつざき
 - 一かげ かづらき
 - 一かげ よしをか
 - 一かげ 小がわ
 - 一かげ しなのち
 - 一かげ かづらへ
- ▲大こくや右兵衛内
 - 一月 からさき
 - 一同 さくらざき
- ▲京屋市兵衛内
 - 一月 いこま
 - 一同 ちくさ
 - 一同 いさご
 - 一同 やまぶき
- ▲くるまや忠右衛門内
 - 一月 たつた
 - 一月 小源治
 - 一月 きてう
 - 一かげ きよさき

- 一月 山川
- 一月 きよはし
- ▲やまとや宇兵衛出みせ
 - 一かげ ここのへ
- ▲新町よこ丁筆屋庄兵衛内
 - 一月 梅がえ
- ▲同よこ丁ふしみや市兵衛内
 - 一月 しな川
 - 一同 いづも
- ▲同よこ丁この村や治兵衛内
 - 一月 しらふち
 - 一同 はつざき
- ▲同よこ丁錢屋おせん内
 - 一かげ いく世
- ▲越後町 南側の分
 - ▲さかいや長兵衛内
 - 一かげ とら
 - 一同 みつ山
 - ▲八木屋六右衛門内
 - 一かげ りせう
 - ▲いづみや治兵衛内
 - 一月 万太夫
 - ▲ふしみや藤左衛門内
 - 一しほ もりをか
 - 一同 さわなみ
 - 一かげ たがわ
 - 一かげ やよひ
 - 一かげ 松がへ
 - 一かげ かづさ
 - ▲あふぎや甚右衛門内

- 一しほ もしほ
- 一しほ たきなみ
- 一かげ 都ぢ
- 一かげ ちよに
- 一かげ あふ坂
- ▲ふしみや忠兵衛内
 - 一かげ 藤しげ
 - 一同 もろこし
 - 一同 川さき
 - 一同 きり嶋
 - 一月 里しやう
 - 一月 やしう
- ▲京屋めうせい内
 - 一かげ みふね
 - 一かげ 左京
 - 一同 みづき
 - 一同 花の井
 - 一月 市はし
 - 一月 さもん
- ▲天王寺屋平治内
 - 一月 ぶぢおか
- ▲てんわうじや庄兵衛内
 - 一しほ やしほ
 - 一月 やくも
- ▲ゑいらくや平三郎内
 - 一かげ 松ざき
 - 一かげ 松ざわ
 - 一同 まつ山
 - 一同 ちよざき
 - 一月 まつよ
- ▲ふしみや治郎左衛門内
 - 一月 つねよ
 - 一同 まさよ
- ▲かわちや清右衛門内
 - 一かげ いくよ
 - 一かげ あふゑ
 - 一同 梅がへ

- 一同 いもせ
- 一同 おざさ
- 一同 正きよ
- 一同 ゑちご
- 一同 あふよ
- ▲紙屋八郎兵衛内
 - 一しほ みふてふ
 - 一かげ 住のゑ
 - 一同 ものゝべ
 - 一同 ちよふき
 - 一同 かづらへ
 - 一月 さくらへ
- ▲ゑいらくや喜世三郎内
 - 一かげ とよ澤
 - 一同 ときわ
 - 一同 市川
- ▲きよやうや源兵衛内
 - 一しほ 山ち
 - 一かげ 澤なみ
 - 一同 まさつね
 - 一同 たかを
 - 一同 山川
- ▲おりや六右衛門内
 - 一かげ よづま
 - 一同 たむら
- ▲高しまや半左衛門内
 - 一月 かづらき
 - 一月 だいぶ
- ▲是々越後町北側の分
 - 一月 小ざつま
- ▲京屋安右衛門内
 - 一同 をとわ
 - 一同 のしほ
 - 一同 のざわ
- ▲小くらや牛之助内

- 一月 つまぎ 一同 色づま
- ▲かみや清兵衛内 一同 きゑつ 一同 よしだ
- ▲ひせんや權兵衛内 一同 しが
- ▲はりまや助九郎出みせ 一かげ あづま
- 一同 小太夫 一同 よしの 一同 みかさ
- ▲のまや六兵衛内 一月 花がき (二月 みはし 大さき)
- ▲びせんや六右衛門内 一月 おきつ 一同 つまぎ
- ▲いつみや次郎兵衛内 一かげ はせ川 (一かげ のかせ とき)
- ▲さど嶋や與三兵衛出みせ 一かげ 井つ
- 一かげ かめ山 一同 ふぢおか 一月 みよし
- 一月 きよ川 一月 みさき 一月 もなか
- 一同 かせん 一同 さがの
- ▲さかいや半右衛門内 一かげ とやま 一同 こしう 一月 わしう
- 一同 長しう

- ▲たんばや吉右衛門内 一かげ かめおか 一同 うこん
- ▲茨木屋次郎兵衛内 一同 よし澤 一同 吉川 一かげ きん崎 一月 まつざわ
- ▲あわざ筋東側の分
- ▲大和屋久太郎内 一月 山川 一同 せきしう 一月 よしの
- ▲ひめぢ屋虎市内 一同 せきしう
- ▲九文字や八郎右衛門内 一かげ おか山 一同 きぬがへ 一同 なるを
- 一月 みをの
- ▲八木屋ていりん内 一月 もがわ 二月 はや川
- ▲わかしや八左衛門内 一月 とよ川 (一同 よしざき 同みさき)
- ▲ごいしや彦左衛門内 一かげ 花ぞめ 一かげ くに山 一同 よをか
- 一同 はつせ 一同 せ川 一同 みさほ

- 一月 ざこく 一月 あさの
- ▲いばらきや傳右衛門内 一かげ はずへ 一同 小むらさき 一同 右京
- 一同 玉のゐ 一月 さほ山 一月 とみ山
- ▲万代屋治兵衛内 一かざ よしおか 一月 うねめ 一同 玉水
- ▲山ざきや甚左衛門内 一しほ みちのく 一かげ たかを 一同 ふぢゑ
- 一月 こゝのへ 一月 おとわ 一月 しが
- ▲小山屋おたつ内 一月 竹川 (一同 まつかわ 同こざつま)
- ▲おび屋清兵衛内 一同 よしだ 一同 みくに 一同 いくよ
- ▲しほや六右衛門内 一かげ 若くさ 一月 小ざくら 一月 みなと
- 一月 竹川 一月 おとわ
- ▲是よりあわざ北側の分
- ▲松原作右衛門内

- 一かげ さんか 一同 花のい 一同 くの助
- 一同 やへがき 一月 小源太
- ▲ごいしや彦太郎内 一かげ 大さと (一同 すみのへ あさしほ)
- ▲金田平左衛門内 一かげ よしだ 一かげ みはし 一同 もなか
- 一同 きんご 一月 かほる 一月 とよをか
- 一月 よしざき 一月 大ちき
- ▲錢屋彦兵衛内 一かげ かづらき 一同 なるせ 一同 まつ山
- 一月 よしの 一月 たき川 一月 はせ川
- 一月 みさき 一月 小やなぎ
- ▲大和屋せいりん内 一同 みづき 一同 大ぎし 一かげ 左源太
- 一月 たかを 一同 さくらぎ
- ▲大和屋右右衛門出みせ 一月 よしの
- ▲かはちや勘兵衛内 一月 みなと
- ▲さかいや忠左衛門内 一月 山ざき
- ▲紙屋與三兵衛内

- 一しほ かづらき 一かげ 正やま 一同 かつ山
- 一同 玉かづら 一月 さわ井
- ▲住吉屋與左衛門内 一月 さくらぎ
- ▲京屋八郎右衛門 一かげ もろこし
- 一かげ こゝのへ 一月 今川 一月 はつ嶋
- ▲吉原の分大かた分女郎月斗をしるす 一月 ふぢがへ
- ▲かみや徳太郎内 一月
- ▲さかいや六左衛門出みせ 一月
- 一月 かつら 一同 うきはし
- ▲びぜんや權兵衛門 一月
- 一月 えざわ 一同 きてう
- ▲十九や平右衛門内 一月 あふさか
- ▲小くらや勘兵衛内 一月
- 一月 かづらき 一同 やしほ
- ▲しほわ 三匁 ▲かげは 貳匁 ▲月は壹匁也
- 此外二分と申て五分女郎の分は書のせず
- ▲九軒町あげやの分 一月
- 一あげや 紙屋おまん 一同 川口屋彦市

- 一同 さかいや市左衛門 一同 井筒屋太郎右衛門
- 一同 京屋淨清 一同 吉田屋喜左衛門
- 一同 住吉屋榮心 一同 山口屋勘兵衛
- 一同 住吉屋四郎右門
- ▲あちご町あげやの分
- 一あげや いばりきり治兵衛 一同 あふみや善三郎
- 一同 折屋伊左衛門 一同 おりやおまさ
- 一同 あふぎや伊兵衛 一同 とばや幸十郎
- 一同 いばら木や長左衛門 一同 高嶋屋作左衛門
- 一同 木屋權左衛門 一同 いや彌太郎
- ▲あわざあげやの分
- 一あげや 大和や吉左衛門 一同 川口屋八左衛門
- 一同 かわちや龜松 一同 山崎屋甚次郎
- ▲よし原あげやの分
- 一あげや いばらきや長七 一同 いばらきや治郎三郎
- ▲佐渡嶋町茶屋の分
- 一茶や 住吉屋又兵衛 一同 中村屋八兵衛
- 一同 平地屋甚左衛門 一同 まつや武兵衛

- 一同 さかいや吉兵衛 一同 井筒屋庄兵衛
- 一同 いづみや喜左衛門 一同 すみや權兵衛
- ▲新町茶屋の分
- 一入口北 平野や後家 一同 平のや吉左衛門
- 一同 三木屋五郎兵衛 一同 ならや九兵衛
- 一東) まつや後家 一東) 入口東 京屋利右衛門
- 一入口東 木屋五郎兵衛 一同 河内屋理兵衛
- 一同 日野や久右衛門 一同 なたや勘左衛門
- 一同 森口屋嘉兵衛 一同 みのや三郎兵衛
- 一三丁目 さかいや伊兵衛 一三丁目 丸屋清兵衛
- 一同 天王子屋善兵衛 一四丁目南 住吉屋八兵衛
- 一四丁目南 かわちや惣兵衛 一同 あまがさきや庄太夫
- 一同 みなとや長兵衛 一同 北 こいや清兵衛
- 一同 北おしろいや利右衛門 一同 いづみや七兵衛
- 一同 ゑびすや新兵衛
- ▲あちご町茶屋の分
- 一茶や 平のや太郎右衛門 一同 池田屋治左衛門
- 一同 あふぎや嘉兵衛 一同 久寶寺屋作兵衛

- ▲あわざ茶屋の分
- 一茶や ふしみや長右衛門 一同 松原屋權太郎
- 一同 さゝや太郎兵衛 一同 かねや九兵衛
- 一四丁目 八木屋八兵衛 一四丁目 川口屋伊兵衛
- 一同 入口 京屋庄兵衛 一同 入口 嶋屋惣兵衛
- ▲よし原茶屋の分
- 一入口 高瀬屋利兵衛 一同 津の國屋半兵衛
- ▲太夫合 三拾七人
- ▲引舟女郎 同前
- ▲天神 九十一人
- ▲鹿戀合 五十三人
- ▲端女郎 合四百廿四人
- 合六百五十二人 分ノ五分女郎入 八百人餘
- ▲あげ屋合二十五間 ▲茶屋合四十五間
- 一太夫引舟共に六十三匁 内あげやの取廿三匁
- 一天神 三十匁 同取 十匁
- 一鹿戀 十七匁 同取 七匁

- 一端小天神 廿三匁 同取 八匁
- 一同 半夜ハ 十五匁 同取 五匁
- 一端女郎 十貳匁 同取 同斷
- 一局遊 小天神十五匁

第一 梅も松も打交ての大寄

廊では口せつ宿ては女夫いさかひ

色遊びの面白といふは。今此時津浪打寄る大湊。人の心も打ひらいて小道なる事をしらず。是所繁昌の故ぞかし。大氣に生れついたといふても。儲なくば自ら遊びもちひさかるべきに。抓取の心覚えあればこそ。おつひらいたる穿鑿。越後町扇風方の大寄。太夫は泉屋のみよしの。茨木やのことうらかほる丸屋の小ふじ。天職は背山。山の井。八重山。ありま。大崎。其外かこひ女郎十九人の手のつゞくほど色糸弾て。小哥は蚊の鳴くごとく。禿共は手替りの踊けいこ。正身の大神も岩戸をひらいて出給ふべし。おもしろいといふは大抵の事なり。暮てはそれ／＼の床の取所。かゝる揚屋の手廣き事餘所には見もせぬ事なり。此家のみならず。九軒の住吉やには。八鹽。江口。みやまぢ。小藤。浮舟。小太夫。名高い太夫職。かれこれ六人。梅はあり原。井筒。藤崎。其外しらぬ鹿戀女郎五六人。次の間は遠柳風の小哥。利兵衛ぶしのかげ物揃。抑此御佛と申は。淨飯大王の御子悉陀太子と申せしが。十九歳にて御出家ありと語り出すより。さりとて釋迦は若い時から。無分別な如來ではあつたぞ。此面白い事をすて。何の當があつて檀特山へは夜ぬけにせられしぞ。其身大王の御子なれば。よもや金に事缺ての事ではあるまじと。酒機嫌で申せば。其座に坊主墜の西念といふ按摩取が申は。今の世界にも。金銀大分持ながら。此里のありがたき道をしらす。あたら日を談義参りしてくらし。無用の僧をやしなひ。又は突鐘の密進して。衆生に懸の別れをなげき悲します。其罪のがれがたし。只慈悲心におもむくの第一は。死に一倍の請判をしてしんぜまし。此所へそゝのはかして御供申て参つて。色にすゝむるを大善人といへりと。昔衣かけて出飯の文となへて。食いたゞいてくうた時を知て居るものもあるに。時々の商口を申て。旦那の御機嫌を取ける。惣じてかやうの繁昌の所に。勤め給ふ女郎は仕合ぞかし。常さへかくはやらせらるれば。物日はさぞお隙があるまじ。三ヶの津の内にては。此里の女郎斗は。借銀の事はおいて。年中に餘程づつ延があるべし。臍銀があらば。ひそかに内證て歩を安うして借りたいと。萬にこまかい開帳場へ錢見世出す。細元手の男。大盡につれられて。酒吞を樂しみに。宵から参りて。なんの役にも立ぬ事を。歴々の太夫殿に尋かゝれば。あのいはんす事わいの。物日紋日役日を勤めて貰へばとて。其揚錢は親方の爲とこそなれ。私が徳にはならず。衣類の外身ごしらへ。禿の仕出し。親里への合力。其外昔に替りて。人のしらぬ氏神せんさく。京の祇園會を大坂にて渡シ。堺うまれの女郎は。大寺祭を喰て果され。新紋日十二日は三津寺薬師。廿八日は北野の石不動。是等迄賣日になりて。義理思うての身あがり。殊更近年世につれて。至り留木も。人のきゝしれる名木を焼ねばならず。十種香源氏の道具。楊弓の一ながれ。讀でも二十一代集。宇治に壺をつかはし。見る事もならぬ能芝居の棧敷を取。しらぬ國の筑紫に石の鳥井がたつの。東の淺香山とやらに。裸形の阿彌陀が出来るのと。見ぬ神佛の事迄。縁を求めて奉加帳。いやとはいはれず信心なる顔付して。一角づつ投出すも悲し。それに限らず高うはいはれませぬが。町よりわせる太靴衆。染出しのゆかたなどとらるゝは。惜き心にもくからず。たゞ無理にかなしきは。脇指を。こしらへるとて。柄籠を買ひかけらるゝ。女にかやうの迷惑度々なり。かゝる事にて。勤のうちに。太夫といはるゝ程の全盛なる女。私にかきらず。皆借銀となるなれば。今時の女郎。ずるぶん貫はではすまぬ算用とあり體を語るゝ。いかさまさもあるべし。去年の七月十日の暮方に。さる女郎懇なる宿小座敷に入て。揚屋の

- 一同 貳匁女郎 十匁(登匁女郎)
- 夜ニ入ハ 一三匁女郎 十匁
- 小天神と云ハ 三匁女郎也 一壹匁女郎 六匁
- 一貳匁女郎 八匁
- 一五分女郎 八匁
- 四匁也
- 以上

す。あたら日を談義参りしてくらし。無用の僧をやしなひ。又は突鐘の密進して。衆生に懸の別れをなげき悲します。其罪のがれがたし。只慈悲心におもむくの第一は。死に一倍の請判をしてしんぜまし。此所へそゝのはかして御供申て参つて。色にすゝむるを大善人といへりと。昔衣かけて出飯の文となへて。食いたゞいてくうた時を知て居るものもあるに。時々の商口を申て。旦那の御機嫌を取ける。惣じてかやうの繁昌の所に。勤め給ふ女郎は仕合ぞかし。常さへかくはやらせらるれば。物日はさぞお隙があるまじ。三ヶの津の内にては。此里の女郎斗は。借銀の事はおいて。年中に餘程づつ延があるべし。臍銀があらば。ひそかに内證て歩を安うして借りたいと。萬にこまかい開帳場へ錢見世出す。細元手の男。大盡につれられて。酒吞を樂しみに。宵から参りて。なんの役にも立ぬ事を。歴々の太夫殿に尋かゝれば。あのいはんす事わいの。物日紋日役日を勤めて貰へばとて。其揚錢は親方の爲とこそなれ。私が徳にはならず。衣類の外身ごしらへ。禿の仕出し。親里への合力。其外昔に替りて。人のしらぬ氏神せんさく。京の祇園會を大坂にて渡シ。堺うまれの女郎は。大寺祭を喰て果され。新紋日十二日は三津寺薬師。廿八日は北野の石不動。是等迄賣日になりて。義理思うての身あがり。殊更近年世につれて。至り留木も。人のきゝしれる名木を焼ねばならず。十種香源氏の道具。楊弓の一ながれ。讀でも二十一代集。宇治に壺をつかはし。見る事もならぬ能芝居の棧敷を取。しらぬ國の筑紫に石の鳥井がたつの。東の淺香山とやらに。裸形の阿彌陀が出来るのと。見ぬ神佛の事迄。縁を求めて奉加帳。いやとはいはれず信心なる顔付して。一角づつ投出すも悲し。それに限らず高うはいはれませぬが。町よりわせる太靴衆。染出しのゆかたなどとらるゝは。惜き心にもくからず。たゞ無理にかなしきは。脇指を。こしらへるとて。柄籠を買ひかけらるゝ。女にかやうの迷惑度々なり。かゝる事にて。勤のうちに。太夫といはるゝ程の全盛なる女。私にかきらず。皆借銀となるなれば。今時の女郎。ずるぶん貫はではすまぬ算用とあり體を語るゝ。いかさまさもあるべし。去年の七月十日の暮方に。さる女郎懇なる宿小座敷に入て。揚屋の

鼻には十露盤おかせ。遣手に手帳を付させ。盆の事共を仕舞れしを。襖ごしにきくに。其節の客七人ありしに。皆無
 心いはるゝ程のなじみ。拾兩五兩三兩取あつめて。四拾八兩もらはれしに。是にては中々不埒と。大方の拂は半分濟
 せとの内談。され共毎年の御つかひ物。奈良晒廿五疋。大鯖貳百三拾指。錢七貫。素麩七把。箱の團五十本。ほゞづ
 き挑燈三十は。火の雨がふつても調へずにはおかれず。太夫さまの外聞と。おつ取て遣手がいふ。聞にむつかしき付
 届。町屋にて手前よろしき人の。世間もつはらにするも是程の事にはあらず。色道なればこそ今此借かりの不自由な
 る銀を。やうはやる事なり。貰うて女郎の身にはつけず。とかく今程女郎のむつかしき事なし。義理は武士の如く立
 て。内證さぞ苦かるべしと。氣を慰めに參りて。世界のせばうなるやうは咄しを仕出し。次第に調子びくになつて。
 三味の音たる。聲賣女郎も小哥機嫌はなくて。連歌座敷の如く一座しめりて氣のつきる所に。其夜の大盡何か女郎と
 はなばなしき口舌仕出し。とかく心底のみこまぬといふ時。習の泪をこぼし。其上に小指切て投付け。跡は永々とし
 たる恨。是はどうでも旦那のが無理さうなど。末社共取あつかひ。ざつと酒にして歸りしが。其中にかの錢見世出す
 こまかい男。此口舌に氣を移して。大盡より先へぬけて内に戻り。酒機嫌に内儀を呼つけ。遊女の如く宵の口舌を思
 出して。今更我は憎からぬ心中ならば。指を切といひ出す。女房驚き。夫婦となれる身のうち。いづれか此方の物
 にあらずや。つがもない事と。けうとい顔をすれば。亭主眼色かへて。扱は此男を振と見えたり。さうした事なれば
 なほきらさねば一分たゞず。さもなくば向後御目にかゝらぬ。只今爰を出て行。親の許へ身上げとやらをせよと。い
 よいよ募りて出れば女心に悲しく。さりとは其方に物が憑いて狂すか。指がなうては明日から仕事ならぬが。い
 かに女房なればとて。むりなる事をと啼出せば。そんな前方なる仕掛の泪などに。ふわと乗る男にあらず。どうでも
 切といざれば。あひ借屋の親父共目をさまして。夜更ての高聲只事にあらじと。夜中に家主をたゞきおこし。借屋中
 八人。大屋敷を先にして。借屋の戸をたゞけば。女房涙ながらに。表を明てよい所へ御出。大抵の女夫いさかひに
 あらずと。始終を語れば。いづれも我を折り。とかく酒に酔れしものならん。何とぞ夫は權めやうの有さうな物と。
 いづれも内に入て。色々いはるゝ程きかず。かやうにくるわ中一倍に。靈顯致しては。なほ一切さてはおかれずと。
 氣色替て申せば。家主智恵を出して。然らば其方を思ふとの誓紙を内儀に書すべし。是にて堪忍し給へと。さまんく
 に侘れば。しからばおのくの仰にまかせ堪忍致すべしと。女房に起請をかゝせ。其奥書に。右の通内義其方を思は
 れ候所實正明白也と。家主を始。借屋中連判して渡せば。是ほど慥な起請は。唐にも有まいと。亭主悦て取て
 置ける。

第二 梅よりすいた萩野が一風

雪のはだへはぼだいの障り

當流分里の興女。金つかふ人斗をよしとせず。たとへ分限なる男も。前方なるを嫌ひ。徳のゆかぬ男の名代にな
 つて。一座のさばけるにあひたがる事。勝手はともあれ世間は是なり。今時新地の茶屋女さへ。不便をかけてこま金
 を取せ。京郡内の着物をしてとらす男の事は。さしにあうた時ばかり泣て見せて。浮世男の名の高いもの。輕口教へ
 て歸るは。何の役に立ぬ事なるに。此男にあうた事を客毎に是非に咄しける勤の身は。内證の用に立男を。縦ば片つ
 らの耳がなく共。いふ事さへ聞てくるれば。たんといとしがる筈とおもへど。勤なればこそ。いやな男にもあうては
 やらるれ。金でならぬ身ならば。不器量なる男は。美男によい事斗してとられて無念度々成べきに。有難は金の威光
 で。一代楊枝つかはぬ口をもつて參つて。紅舌を嘗め侍る。女郎もこんな男にあはるゝ時は。よもや人間と思ひては
 あはれまじ。小判にあふと思ひ給ふ故に。酒の上にも迎ひ氣の來ぬ事と。随分世間へ出されぬ男の申侍る。爰に天満
 に銀で自由自在に天神をまはす男有けり。生れ付不束なる上に。近い比楊梅瘡の出た跡一めんにくえて。面は一度

いたやうになつて雲紙を見るにひとしく。濱芝居の見世物に出しさうな男と。人皆磯螺大盡と申あへり。是をよい事と心得。伽羅之助といふ替名をやめて。いそらと申せば喜悅致しぬ。ある時酒染末社共。よい機嫌の餘りに屏風を圍ひて。其内へ旦那を押込め。いづれも屏風の口に立て。さあ／＼今度海中で仕過し致し。龍宮城を夜ぬけにして。始めて此里へ出現いたした。磯螺と申嶋もの。毎日かるもといへる女郎を三づ／＼くうて命をつなく稀もの、生捕。銭は戻りぢや。さあ大夫さま方。奥は廣いとわめけば。龜相いふな。女郎さま方に。奥の廣いは差合ぢやと。座中どつといふて大笑ひ。皆する程の事大盡をつかうて。大鞍共か。慰。是から磯螺に裸で餓鬼をどり所望と申出せば。酒が過たに許せといふを。不仕付なと叱。是非なく大盡裸になつて。餓鬼をどりを致せば。旦那踊の出来た祝に一角づ、致さうと申せば。踊は何遍でも致さうが。是は許せと手を合すを。大夫さまのごさる前で。ひけて見ゆるとばやけば。詮方なくて親の借銭なす様に。ふしやう／＼に一角づ、取しける。是程うらはらなる事はあらじ。たとへば妾に内儀の機嫌取て給仕して食はさるゝに似り。いづれ世界は廣し。随分取ぐるしい氣を取て。連添ふ女房の隠す事迄。人中ていはさせ。其上いやな酒のんで。殊更大盡に悪い癖ありて。酒過ると其儘理屈を申出られ。其擧句に双物さんま。命勝負をこらへて。五六度も御供申て。漸二朱一つ下さるゝ。是にも忝い百程いふて戴くに。さりとは磯螺について歩行く末社共。果報過て。追付太鞍冥加につきさうなもの。中間寄ての是沙汰。かく面長成大盡にあはるゝ女郎。無や心憂かるべし。然し今時女郎の氣に入大盡は。位斗とつて勝手にならぬ事いふに及ばず。迎も勤の身なれば。二つ取には紋日役日にへら遣はず。勤てくれる男が氣骨をわいてお爲によかるべし。随分しやれたる男。自慢の人。大坂堺にも數多あれど。あぢやりだてに皆になし。晝中には揚屋の門を通らぬ男多し。此比も難波一番の色男。始て女房を迎しに。是等は遊女とちがひ。一生の詠物なるに。難波一番の悪女。然も腕がくさく。ようもあのやうな物にそつてゐる事よと。近所の人我を折しに。五十貫目といふ數銀の光りて。揚貴妃に見ゆると。氣に入らうに寄から寝よろこばしける。町にてさへかくの如し。増てや金で賣身の。ぶ男なりとて磯螺に思ふ管はなしと。後家にかゝつて身體しなほしたる男の申侍る。爰に西の國にかくれなき男。松の位を根引にせし。十八公といふ大盡。暫く當地に逗留して。扇屋の萩野を面白がり。四五會して何の事なく引抜。都に住所をもとめ。月雪の朝。紅葉の暮にも萩野をながめ。萩の下露濡深く樂しみ此家にと。少し自慢して宵は色川原の名取。器量も諸藝も。打揃うたる具足屋といふ子を手池にして。面白く酒のんで夜深くなれば。萩野上風身にあてじと。釣夜着の下に抱いて寝て結構なる夢を見盡し。目がさめると夫婦起て。紙燭ともしつれ臺所に出て。棚にさしかり。卵子五つ。赤貝も煮る斗にして是幸と。爐の火を起して薄鍋をかけ。何もかも打入れて。此うまさ事どうもいはずと。舌打して。女房共はんはよいかと。差向ひに。さしつさ／＼れつ。さま／＼の戯れ。ひとしほ酔も面白かるべし。女郎請出しても。こんな事して暮してこそ。樂みも深かるべきに。根引にすると其儘。紺の布子させて。萬の鎧を腰にさげさせ一文がつまみ菜をねぎらせ。味噌煮迄の世話として。然も昔語りし人にも。遠慮せず出て挨拶するなど。何としても其心は殘ル物を。世間かまはずお内儀様にすること。無分別の至り也。されば此萩野。夕霧についての上作もの。美しいというて又比べものなし。ある時座敷踊の仕舞。亂姿の暮方に。召替の浴衣腰より下の一重も。今日の汗にとて。そこ／＼にとき捨て。行水の御裸身。白く妙にして。彼驪山宮の温泉をひかれし昔の品ものも。中々此君には及ぶまじ。ざりと此里の男共。ようは命があるぞ。是に限らず。朝暮大夫達の〇〇せらるゝ姿を見て居て。目をまはさぬは不思議ぞかし。此夕暮に九軒へ出入する。小料理のきいた六兵衛といふ男。近き比母親相果しが。死骨を高野へ納めよとの遺言にまかせ。浮世の事共忘れて。目には泪。手には珠數持ながら。二人ある子供が事はいひ残さず。火の用心と斗いひ捨。大方は出家心になつて。我家を立出。暇乞がたら。留守の事も頼まんと。吉田屋喜左衛門方へ立寄しが。萩野素肌の面影を。一目見て。菩提の道を取はずし。扱もと思ふより。〇〇〇〇〇〇〇〇様に成て。旅裝束の前の方をか

いたやうになつて雲紙を見るにひとしく。濱芝居の見世物に出しさうな男と。人皆磯螺大盡と申あへり。是をよい事と心得。伽羅之助といふ替名をやめて。いそらと申せば喜悅致しぬ。ある時酒染末社共。よい機嫌の餘りに屏風を圍ひて。其内へ旦那を押込め。いづれも屏風の口に立て。さあ／＼今度海中で仕過し致し。龍宮城を夜ぬけにして。始めて此里へ出現いたした。磯螺と申嶋もの。毎日かるもといへる女郎を三づ／＼くうて命をつなく稀もの、生捕。銭は戻りぢや。さあ大夫さま方。奥は廣いとわめけば。龜相いふな。女郎さま方に。奥の廣いは差合ぢやと。座中どつといふて大笑ひ。皆する程の事大盡をつかうて。大鞍共か。慰。是から磯螺に裸で餓鬼をどり所望と申出せば。酒が過たに許せといふを。不仕付なと叱。是非なく大盡裸になつて。餓鬼をどりを致せば。旦那踊の出来た祝に一角づ、致さうと申せば。踊は何遍でも致さうが。是は許せと手を合すを。大夫さまのごさる前で。ひけて見ゆるとばやけば。詮方なくて親の借銭なす様に。ふしやう／＼に一角づ、取しける。是程うらはらなる事はあらじ。たとへば妾に内儀の機嫌取て給仕して食はさるゝに似り。いづれ世界は廣し。随分取ぐるしい氣を取て。連添ふ女房の隠す事迄。人中ていはさせ。其上いやな酒のんで。殊更大盡に悪い癖ありて。酒過ると其儘理屈を申出られ。其擧句に双物さんま。命勝負をこらへて。五六度も御供申て。漸二朱一つ下さるゝ。是にも忝い百程いふて戴くに。さりとは磯螺について歩行く末社共。果報過て。追付太鞍冥加につきさうなもの。中間寄ての是沙汰。かく面長成大盡にあはるゝ女郎。無や心憂かるべし。然し今時女郎の氣に入大盡は。位斗とつて勝手にならぬ事いふに及ばず。迎も勤の身なれば。二つ取には紋日役日にへら遣はず。勤てくれる男が氣骨をわいてお爲によかるべし。随分しやれたる男。自慢の人。大坂堺にも數多あれど。あぢやりだてに皆になし。晝中には揚屋の門を通らぬ男多し。此比も難波一番の色男。始て女房を迎しに。是等は遊女とちがひ。一生の詠物なるに。難波一番の悪女。然も腕がくさく。ようもあのやうな物にそつてゐる事よと。近所の人我を折しに。五十貫目といふ數銀の光りて。揚貴妃に見ゆると。氣に入らうに寄から寝よろこばしける。町にてさへかくの如し。増てや金で賣身の。ぶ男なりとて磯螺に思ふ管はなしと。後家にかゝつて身體しなほしたる男の申侍る。爰に西の國にかくれなき男。松の位を根引にせし。十八公といふ大盡。暫く當地に逗留して。扇屋の萩野を面白がり。四五會して何の事なく引抜。都に住所をもとめ。月雪の朝。紅葉の暮にも萩野をながめ。萩の下露濡深く樂しみ此家にと。少し自慢して宵は色川原の名取。器量も諸藝も。打揃うたる具足屋といふ子を手池にして。面白く酒のんで夜深くなれば。萩野上風身にあてじと。釣夜着の下に抱いて寝て結構なる夢を見盡し。目がさめると夫婦起て。紙燭ともしつれ臺所に出て。棚にさしかり。卵子五つ。赤貝も煮る斗にして是幸と。爐の火を起して薄鍋をかけ。何もかも打入れて。此うまさ事どうもいはずと。舌打して。女房共はんはよいかと。差向ひに。さしつさ／＼れつ。さま／＼の戯れ。ひとしほ酔も面白かるべし。女郎請出しても。こんな事して暮してこそ。樂みも深かるべきに。根引にすると其儘。紺の布子させて。萬の鎧を腰にさげさせ一文がつまみ菜をねぎらせ。味噌煮迄の世話として。然も昔語りし人にも。遠慮せず出て挨拶するなど。何としても其心は殘ル物を。世間かまはずお内儀様にすること。無分別の至り也。されば此萩野。夕霧についての上作もの。美しいというて又比べものなし。ある時座敷踊の仕舞。亂姿の暮方に。召替の浴衣腰より下の一重も。今日の汗にとて。そこ／＼にとき捨て。行水の御裸身。白く妙にして。彼驪山宮の温泉をひかれし昔の品ものも。中々此君には及ぶまじ。ざりと此里の男共。ようは命があるぞ。是に限らず。朝暮大夫達の〇〇せらるゝ姿を見て居て。目をまはさぬは不思議ぞかし。此夕暮に九軒へ出入する。小料理のきいた六兵衛といふ男。近き比母親相果しが。死骨を高野へ納めよとの遺言にまかせ。浮世の事共忘れて。目には泪。手には珠數持ながら。二人ある子供が事はいひ残さず。火の用心と斗いひ捨。大方は出家心になつて。我家を立出。暇乞がたら。留守の事も頼まんと。吉田屋喜左衛門方へ立寄しが。萩野素肌の面影を。一目見て。菩提の道を取はずし。扱もと思ふより。〇〇〇〇〇〇〇〇様に成て。旅裝束の前の方をか

しくなつて。人の見るも恥て。帯にはさみ。漸として高野の麓につけば。此所の在名禿といふに付て。大夫の裸身忘れず。猶々〇〇〇出れば。母の死骨よりは一物に難義して御廟の橋渡れば地柳忽。萬の借銭乞と變じ手に書出し腰に帳。財布かたげて顯れ。大節季も今の事ぢやとわめく聲に。耳ない奴が聞こんて。ぐなりとなつて。それより心靜に奥の院に納て下向致しぬ。草木心なしとは申せ共。大晦日の苦き事をば能辨けると。殊勝に存る。

第三 梅の花山に登り詰る男

晝寝の料理ごのみ喰ぬ先にさめる夢

商人の高利を取ながら元直でござりますと。澤山さうに誓文をたつる。傾城の誠なき心から。起請書て客をたらすも。品こそかはれそれの身過。女郎に限りて偽りいふやうに。悪口いへるは無理さう也。已に我人老人は正直にして。假にも虚つかぬものと。律義に覺てゐれど。年寄ほど偽りいふものはなし。寺參しては。今でもほつくり往生と願ひ。此苦界にうか／＼との長生。一日も早く往生したしといはるゝ片手に。隱居の庭に柿の核を植て。八年したらば孫共に。木練の取飽さすべしと。七明年成事をたくみ。常着る小袖も。兼房は弱きとて。花色袖をこのみ。子供が元服したを見て死ぬれば。もはや此世に思殘す事なければ。それから人にあかれぬ先に。一時もはやう。尊い所へ參りたしとの願ひ。程なく月日立ち息子成人して。元服いたせば。あれに嫁を取てと。其願ひもずらりとすめば。孫を見てからの念願。孫が出れば彦が見たし。とかく死にとむないに極つたる事を。いはれぬ口先で。往生をいそがるゝ虚が憎し。なぜに天道次第にしてはおかれぬぞ。持佛堂の佛も。毎日の看經毎に。往生したきとの虚言には。無をかしよう思召さん。歴々の息子持し親仁。町へ譲り状を出さるゝに。我等儀。若萬一自然何方にて相果候共と。書るゝ心底をか。若萬一を百萬百かゝれても。死なずにいる身てはなし。心見えて御し。世間に此願多し。嗚呼の願

などするとして。予が事ではないが。爰をきられてといへるは愚にきこゆ。予が事といへば。そこに口があくべきか。しかも二本指た口から猶も見ぐるし。女郎のいひ方にしてはあどなくしてやさしう聞え侍る。此前八木屋の最中といふ女郎。京屋の座敷に。堺の古七といふ大盡と。五月雨の日。しつぱりとはなされしに。稻光しきりにして。九軒町も動くほどの大神鳴。是はならぬと戸障子をさませ。俄に蚊屋をつらせて。此内へ逃こみ。兩耳ふさいで大盡は汗を流し。引舟女郎に投節やめて。雲雷靴掣電の文に節をつけて論はせ。太夫にも伽羅をにおいて。護神香を裾にとめて。床にいられよと。以ての外おぢられしに。最中は更に恐れる體なく。さしかけし戸を明て。此鳴の面白さ。自由にならば毎日も聞たいと。栖輕が顔して。虚空をながめてみられしを。神鳴より心玉のおそろしき女郎と見かきり。それより終にあはざりしが。神鳴は虫の業にて。すぐれてこはがる人と。又さもなきとがある物ながら。先はすかぬ物なれば。女郎衆は恐しからず。共こはがるゝ體がよし。惣じて女の武邊だて見苦しき物なり。とかく女郎はやさしうして花車ながよし。すこし弱きやうにいはいはう共。詞數なく。高聲せず。身をはづるを以て色有花共いへり。いかになじみの大盡なればとて。敵と居ならび膳にむかひ。二の汗も替て。杉櫨の目の僉議して。鮎の焼物引ツかへて。美しい口をある程あいて。頭からかぶらるゝは。いかに打とけて遠慮なく。喰て下さるゝとは思ひながら。興さむべし。其上〇〇〇もばれて。かしらから〇〇〇〇になつて。〇〇〇〇〇〇〇。恥ぢらふ氣色なく手足をうごかせ。身の草臥を知らず。軒かしましく。肌着しどけなく。ぬげて。五月蠅き所の見ゆるも。其成けりに寢がへりなど。終には戀もさむべし。只いつ迄も。今の行義にして。たとへ納戸では何をまらうと。それは見ぬ事。客と一所に物まらぬこそ見よけれ。今の半太夫美しい上にひすい所なく。哥よまぬ小町の如し。打見にはおほこな仕出にして。取入て見る程きつとした。面白い所のある女郎と、伊丹の大盃といふ男。始て御見なりしより。どうも動きがとれず。毎日出かけて。引舟の小蝶の戯れ。莊子が心よりも廣くなつて。大鵬といふ大鳥。隨分高うとんで。此里を我物にして

人しれず一度々々に揚屋へ渡シけるが。誰にあふ共。又は女郎買共見えずして。世上へ隠すを大事々々と思ふうちに。遺果して今といふ今。喰ねばひだるいといふ事をして。松屋町の裏屋へ引込。一日に五分宛取て。素麩の白を挽事。是等はおなじ女郎買にも。たはけといふ者なり。物の自由な時。うなつた事をせいで。つかうた甲斐はなしと。暮方迄咄て。さりとては此身になつても。此咄の面白さ。清貧は常に樂むといふは。我々が事成べしと。たはけつくして皆にしける事ははずして。寒い時分に破帷子を着て。過し半太夫との口舌咄し。今は無用の至り也と。權五郎殿も片目ふさいで。笑うてござるべし。あの氣でなければ皆にはせぬ管と。若い息子を持し親父共が。異見の引事になつてはたしぬ。

第四 梅の花笠に降掛る村雨

子を捨て色にまよふ親仁の仕果

人の親の子故に迷ふは。常のならひなれば古めかして。色の道に迷ひ。心は闇にあらね共。不斷の大酒に足も定めず。晝中にもしるき所へ踏込。無性といふものに騒ぎくらし。あたらしやの金太夫に深くなづみ。行年六十九歳迄。分もなう通ひ死にして。大分の借銀を。一子に惜氣もなく譲られける。此息子迷惑なる親の跡を請取。家藏諸道具分散にして。住馴し我本町を立退。次第に下り坂となつて谷町に。僅の古道具見世を出し。不目利の新助とて。常住堀かづきばかりして。苦しき世渡りをせしが。さすが親の子程あつて。ない銀を遣ひたがり。透さへあれば新町に出かけ。阿波座の采女といへる。貳匁取の女郎にあひなれ。責て親仁が今鹿戀かふ程。つかひ残しておかるれば。又樂みも深かるべきにと。過ゆかれし親父の仕果を悔みぬ。かく子の事を思はずに遣ひ捨し親もあるに。又子を思ふ親ありて身に絹物をあてず。口には濃茶もしらす。鼻に各の木の香もきかず。色道にうとく。秤目に賢く。桶の輪かへ

るも。かづらゆひが傍を離れず。古輪の切を非人と争ひ。取集めて焼木となし。すたる塵埃造鏡さしに推。年來鏡をつなぎ溜て。數千兩の小判になし。取ぶき屋根も瓦にしかへ。赤銅樋をかけて。末々世性が世話のなきやうにと。身の娘みをこらへて。一子の爲に金銀を殖し。死去の節下寺町の旦那寺へ。五十貫目祠堂にあげて。外は。釜の下灰までも讓状ひとつに濟て。誰か七つの内藏に指のさしてもなく。不殘請取四十九日の朝。出家衆を申請。佛事仕廻うて夕食より。精進あげ箸を下に置と。宿をかけ出新町に行て。山口屋の亭主合點か。親父が所務分したぞと。小判を逆手に持てまきちらし。此家内繁昌と喜ばせける。是より心のまゝの奢。丹波やの村雨に濡掛り。雨の日も風の日も。精進日も構はず。毎日の里通ひ。萬花麗にやつて。名題の末社引揃て九人。前後を守護し。東の門よりさゝめていて鳴こめば。お先へお敵より。紋付の貳つ挑燈。揚屋から人橋かけて。盛砂せぬばかり。追付是へおなりと。九軒の山口屋には萬燈の如く。火をかゞやかし。臺所は組板の音高く。摺小鉢鳴やまず。井戸車も人も。隙なくまはつて外より見るさへ心氣味よし。不目利の新助は。阿波座の貳匁としげり。腰輕になつて歸るさの慰に。一べん廓をめぐりしが。此大盡の威勢を見て。さりとて人間なればあれなり。適色の盛なる世に出生して。銀でなる榮花の自由にならぬ身とむまれける事。無念の至り也。何ぞ二匁取の女に戯て。うかくとくらす事。人と生れし甲斐はなしと。油店の筆を貰て。我大丈夫な身體となつて。大夫を自由にまはし。大盡と稱美せられ。浮世小路の駕籠にのらずば。此橋を二度渡るまじと。四つ橋の橋柱に書付。直に宿へ歸り。何の目的もなきに。明の日早々より京へ心ざし。京橋より牧方迄かごをかり。滅法界にのぼりしが。佐田の天神前に。上から来る駕籠が。替てはないかと詞かくれば。駕籠のもの何處へぢやと問ふ。ハテ京橋へぢやといへば。そんな嶋な者は米の安い時もいやぢやと。かぶりふるを。雀げんこ打て替るに極め。旦那様おりて下されませい。爰迄とほりましたに。ちと御合力頼上ますと。歎きをいふを不便におもひ。つまみ錢をやつて。替駕籠早うもつて來といへば。小腰かゞめて。何も駕籠に御ざりませ

ぬと。少しの事にて悦び。先の人をのせ替へ。大坂の方へ行ば。上より來りし駕籠は。乗手の男。合力せぬと見え。駕籠から打明るごとくにして。扱きたない奴かな。すこしの増もくれずに。其身は何を喰ふやら。牛のやうに肥てをつて。肩も背もたまる事か。あんな奴が駕籠かきの油盗人といふものぢやと。物憎さうに。跡からならみ付。さあ旦那めしませと。駕籠をなほす。新助のりさまに駕籠の中を見れば。封じ文一つあり。是は最前上から乗て來し。旅人の取忘れし文成べし。呼返して是をやれといへば。中に銀さへござらずば。狀一つやなどは忘れをつたら大事か。其上もはや尻影も見えねば引さいて捨給へと。いひさまに。肩を揃へて昇だす。新助是非なく。此狀を開き見るに。十兵衛殿下られ候に付。一書申入候。彌御無事に御勤珍重に候。我等事昨晩上下共に息災にて致歸宅候。然ば茶入の繕。留守の中に出來候て。此方に請取置候。近日春日躰指下候時分。一所に遣し可申候。將又此度大和廻いたし候て。岡寺より。多武峯へ参り候道に。安部と申所の里はづれに。草堂有之連衆のどをかわかし立寄茶をもらひたべ申され候。其茶碗今上方に賞翫致候。三嶋茶碗の。しかもころよきにて候故。いかさま何ぞ掘出しもあるべき所と存。うそく見ありき候所に。佛壇の間の腰張。勝手口より三枚目の反古。髓に定家の三首物と見申候所。少しも違あるまじく存。早速住持にもらひかけ可申存候へ共。連の内に。まんがちな欲仁候故。態其分にて罷り歸候。此度引返し参可申存候へ共。下向仕間もなく。又罷立候事も近所の手前家來共のおもはくいかどに候故。我等は参り不申候。貴殿急に彼所へ参られ。住持の氣のつかぬ様に少銀にてもらひ被申候様に。才覺可被成候。尤欲の世の中。此十兵衛殿などにも。沙汰御無用に候。此方にて。何の義も不申候。急に御越可被成候。雷の岡などと申。古所の邊かと覺申候。道具屋太郎助殿ある。同太右衛門よりと。讀もはてず是天の興ゆる福と。心をしづめ四五遍繰返して。よんで見る程うまさ事也。先押戴き懐申し。扱駕籠の者共にいひけるは。我大坂に附ある事を先念して出たれば。是より立歸れば。故等には隙をやるぞと。駕籠をおろさず。

駕籠昇共は。はれそれは御太儀など。笑止な顔はすれど。から身で歸るを愧ぶ。新助はそれより。一さんに宿にかへり。妻子のなき身は心やすく。俄に市をたて。諸道具残らず賣拂。何か取あつめて。金十壹兩貳歩を腰にひつつけ。家主に暇乞ひて。すぐに件の草堂へ尋行。品よく住持にもらひかけて。金子拾兩相渡し。二色の道具を取て。又大坂に立歸り。伏見町の道具屋へ。三嶋茶碗を金五枚に賣離し。扱定家の三首物は。京へ持上り。表具をいたし。上京の有徳なる。茶人の本へ大分の銀に替て。一夜檢校のごとく。よい身となつて。しばらく西寺内に宿をかり。一兩年は色事やめて。掘出しを心かけしに。必よい時は。するほどの事心にならなひ。二年半と申秋の比。五千兩といふ小判の數になして。古郷なれば難波に歸り花。錦をかざりて親の住れし。本町の屋敷を二双倍て買戻し。今ははや浮世小路の遊び駕籠に乗ても。あまり人に笑はるゝ程の身でもあらずと。女郎狂ひの心ざし頻なりしが。よく思案をめぐらすに。五千兩の幅にては。太夫にかゝつて見事なさばきと。いはるゝ程にはならず。せめて一萬兩の身體にならては。太夫を買つてもをかしからずと思直して。それより北濱の若い者と組て。米事に掛りしが。仕合のよい時は吹付る風空に。思ひの外のがりを得。遂に願の如く。一萬兩の身體となつて。さあ今こそ大盡といはれて。四つ橋を幅ひろにありきても苦しからず。あゝうれしやと。四五年張弓のごとく。引張たる氣ゆるみしより。俄に煩出し。様々醫療をつくせ共。年々氣を煎へらし。心虚といふ病の由にて。幾藥與へても。いかなく露程もきかず。次第々々におもひければ。新助涙を流し。さりとは悔しや。是程短き命とらば。五千兩の時。くわつと遣うて仕舞べきに。無益の金をためて佛くさい申事に捨てのけんこそ。かへすくも悲しけれ。我生れてより以來。伽羅くさい〇〇もしらず。三つの蒲團の上に枕もならべずして結構なる夢を見ず。此儘死なば。閻魔の前にして。見る目嗅ぐ鼻といふ粹に出合。汝は前生にて。草津の姥が餅をくうたか。太夫と床入したかと。必とはれん。其時しもせぬ偽をつかば。鏡にかけてあらはれ。掛替もなき下帯をはづされ。後の世に恥かゝん事。なんぼう無念の至り也。せめて息の通ふ内

に。女郎買ほどの器量ある養子をせばやと。手代共に此趣を語れば。いづれも憤んで承り。御養子をなされなば。幸堺筋の甥子様か。平野の従弟子然べしと詞を揃へて申上る。いや、汝等が思入。我に違へり。甥も従弟も。太夫を自由にするほどの器量なし。然れば我存念を達すべき様なし。唐土の堯王は。九人の皇子をおきて。舜の太子に立給ふ。たゞ何者にもせよ。分知とそれしや共にいはるゝ程の。器量者を養子とし。親まさりといはせし。是我願ひの一つなりとて。廣き大坂中を尋しに。茶碗焼出す。高原といふ所に。風の神と相住して。新町の名ある。太夫天神の姿を紙のぼりに畫。其身は古き破編笠をきて。橋々をもつて廻り。さあ、丹波屋の小ざつま。明石やのもろこし。あづま。むらさき。かづらき。吉田。瀬川。奥州。小琴が。にがみのはしつたを。古釘にかへませうと。子共たらして其日おくりにする男。どうでも色知の果なればこそ。あの身になつても。女郎の事は忘れず。昔をとへと。呼入れて。始を聞に。難波津に我よしあしは御存知の事なれば。つゝむに及ばず。讓を請取てより。宿に一夜もねずして。新町に通ひ詰の男。太夫の金吾になづみて。算用なしにつかひすて。今此體と。はづかしげなく語れば。新助枕をもたげてさりととは奇特な男。是こそ色神の引合と喜び。則養子と定一萬兩の金を。残らず譲りて。終に其身は過行ぬ。紙子大盡思ひもよらぬ跡をしてやり。遺言にまかせ。再び新町に通ひて。時めく太夫に。父の蓋をさせるほどにしこなし。諸分知と末社あがめ奉り。女郎もかた様ならてはと。偽りさつて。眞なる心さし固り。御腹次第に嵩高になつて。道中するも見苦し。願はくば此里出て。お屋敷でお子さま産ましたいと訴訟。大盡聞とけられ。吉日を見て。根引にすべき企。諸事八百兩で埒のあく事。近ごろ心やすき儀と。お敵の悦び大方ならず。里の住居も今二三日。太夫に名残の盃事。揚屋一家罷出。さいつさゝれつ。妹女郎禿迄。あやかりませんと喜悅の酒盛賑なる最中に。此世をさりし新助が聲。天井に音して。あの女郎請出す事無用々々。腹なる子は。西横堀の。四の二といへる間夫の男が種にして。故が子にてはなきぞ。切々申して用事かなへに雪隠へゆかれしは。間屋を各代にして。衆部屋へはづし。此子種をつきいれられし。古い仕掛をくふのみならず。ね心のわるい女郎を請出し。身二つになると作り氣違になつて。汝にあかれ。間夫の四の二が方へ立ちのかんとたくみをしらす。鼻毛をよまれたはけもの。それ程のうつそりとは知いて。養子にせし事冥路の障。くやしと姿は見えず。聲ばかりしてうせにけり。一座の者共肝をつぶし。あきれて空を見れば。女郎は赤面しながら。ちか比惡功な幽霊ぢやと。天井を恨めしげに。見あげられしは斷く。

第五 梅に名の鳥が啼東路の別

男にも血の道の煩ひ戀に目まひ心

色里の商賣。年中抓取もあるやうに思へど。各別あはぬ客あり。たまさかに鹿戀ひとつ買男。二三人つれだち。まだ虎屋の梅花の油見世も。出さぬ時分出立くらひて揚屋に行。三つ取合のなんばん菓子。一人に壹斤あてにあらし。木枕敷に番うたひ。腹のへるをかまはず。中食に切麥。程なく夕食夜食。殊更云合したやうに。いづれも上戸なれば。中酒から汁椀で見しらし。納めまて是て廻し。鼻紙いれば。女郎の延用捨もなくつかひ捨。たばこ盆のたばこ迄。打あけて取て去ぬる客にも。宿の習ひにて。花車が二度程も出て。是は手織でござりますか。其まゝ絹のやうなる。若盤嶋をめましたと。輕薄いひける。諸事丸取にしてから。揚屋の取が七匁ぞかし。是ほどあはぬ者はあるまじといへば。是尤かなやの金五郎。息災で居し時。罷出て申は。是よりあはぬものあり。それは何ぢやときけば。野郎の病中と申す。それこそしれた事。商賣やめて居喰にする事。野郎にかぎらず。知行とらぬ程の者は皆あはぬ筈也。まそつとよい事を申せと打こめば。是はいづれもの聞やうが悪し。野郎の病中には。日比目をかけて。不便からるゝ大盡ほどあはぬ者也。そのゆゑは。常に子共心になつて。愛らしい事のみして。かはゆがられた若衆。病中には

白粉けたえて。赤みがちなる頬、髪生出其儘、嶋ものを見る如くなれば。姿を恥て誰人にもあはぬといふ。それは其管なり。色を賣身は其心掛、尤ぞかし。高嶋やのあづまぢ。十死一生の時。凡夫の昔より不便がられし。半風といふ大盡、病中五十日餘。雨の夜も風の夜もかゝらず。一日に三度づつの見舞。薬の様子、食事のすゝみ、様くはしく尋。今一度の本復を諸神へのり。庚申へ裸參の代參をたて。住吉へ命乞の庭神樂を參らせられ。身をなげうつて祈られければ。共。次第々々に頼み少き由。遣手が告げければ。一生の暇乞に對面すべき由。太夫方へいひ入給へ共。いかなく此世を思ひ切て居る上は。どなたにも御目にかゝる事致さず。かされて申届くるなど。さりとは心強き言分。妹女郎引舟遣手の久米迄。口をそろへ異見申けるは。お馴染多き中に。半風様ほど誠ある御方があるまじ。御氣色悪きとて。引こみ給ふ日より今日まで。五十日あまり一日もかゝし給はず。毎日三度の御見舞に。遂に一度もあはせ給はぬ御事。あまりと申せば御心強き仕方。夢ばかりあはせられ。亡き跡の事共。又は兼てお咄しなされおかれし。お袋さまの事迄も。ぢきにお頼みなされおかれなば。いよく御不便に思召し。何かにつきて宜しかるべし。ひらさら今日は御對面あれかしと。すゝめ申せば。さらさらそなたの思惑とは。大きな違あり。今半風様のその如く。我事を大切に思召し。御心をつくさるゝも。我身息災なりし時の姿を愛し給ひて。思召し忘れ給はぬ故也。然るに今かく。病つかれ衰へたるを見給はば。興さめて戀を醒し給ふべし。惣じて色を以て人にかはゆがらるゝ者は。色衰へては愛うすくなる事。常の人心也。あひまして戀を醒させんよりは。あはて死なば次第に思召し出て。一べんの回向にもあひぬべしと。つひに逢ず惜や勤さかりに。此世をさりて新町に花なき心地と。行人袖を濡しぬ。をしきかな情あつて。大氣に生れつき。風俗太夫職にそなはつて。衣裳よく着こなし。一座にぎやかにして。床しめやかに。取り入程よい事多く。名譽思ひを残させ。別るゝより早かされて逢ふ迄の日を。いづれのお敵にも待兼させ。末社共にも有難きお言。何かにつけて此君ならてはと。此里へ来るほどの者思ひをかねぬはなかりき。あの時九軒の住吉やにて。木五。

朝原。柏正といへる。今出の三大盡。東路。唐土。八重霧。三太夫に手をそろへて逢奉り。毎日のさわぎ。木五がつれし末社は作政とて。黒菊石のきんか頭。しかも脊短にして。片足少し長く。何にひとつ取得のない男なれ共。恰好の人に替りてをかしきと。頓瓢な上るり語るを興にして。いつもお供につれらるゝ。扱朝原に附従ふ太鞍持は。白髮町の留平とて。厚髪にして。色白く。聲よく端哥の名人。女のすく風にて。殊更鼻の高い所、偽りなく。口拍子のきゝし若者。其外の末社は。西の芝居の囃子方一兩人打まじつての酒事。樂みといふは大底の事。罪も報も。女房子の事も忘れはて。面白がる中に。留平は此内の君達に。戀すると見えて。馬刀の吸物喉を通らず。思ひに胸を苦しめる體。唐土さとい女郎にて早速氣をつけ。密にさゝやきしは。汝戀するを見うけたりといへば。留平横手を打て。扱はあらはれて恥し。此いつの比よりかかた様の御事を。思ひそめまして手をしめる。唐土大笑して。鼻も動かさず。ようもくゝない事をいへる男め。我に執心偽りなくば。後とはいはじ。只今御心に從ひ奉る。そんな事は今から五六年も。此里の門松を見らるゝ。素い女郎にいはんしたがよい。泣ずに男に嬉しがらす程の女に。いかないかなぞんじ共よらぬ事。其方の思ひ人は。鳥が啼方といへば。天晴見どほし。その東路さまになんとも成ませぬ。せめて此事通じてなり共あらば。又いつその時節もあるべき物をと歎く。それが定ならば。神ぞ此戀我等請取。明日の別に。腹痛むとて残り給へ。お敵へはよきにいひなし。あはすべきと請合給へば。うれしく。今の世の深き情知さま。此君七代まで太夫冥加あれと。心中に願ふもことわりぞかし。爰に作政は。晝から浮々共せず。日比嫌ひの念佛を口の中にて。ぼち／＼と申し。好物の酒も。のむ顔して打あけるを。大盡御覽じつけられ。作政が今日の風俗まだ間のある大晦日を案ずる體と見ゆる。近比小氣成男め。廿ばい迄は此はなが合力して得さすべし。心安く春のきた心になつて。さわぐべしとの御意。有がたく。旦那は晴明はだし。ざつと是で重荷がおりましたと。一花は騒ぐやうなれ共。又じみ／＼とめいりて野邊へ近づき罪人のやうに。投首して。片隅へよるを。八重霧立品に。肩を引

勝手口に招き。そなた東路さまに惚れたと見請し。我目は違ふまじ。さもあらば只一度の首尾は。命にかけて取持べしと。深きお心入。とかうの返答は申上ずして。すゝり上げて男泣にないて。茶小紋の袖をひたす。八重霧いよ／＼不便増て。しからば大盡御歸りの時分。心地あしきと跡にとどまり給へ。何とぞ思ひ人に頼みまして。心よくあはして參らせんと。残る方なき御心入。わたもちの愛染さま。まはり遠き勝曼のかねの緒にとりついて頼まうよりは。君が紅の内衣の紐に。頼みをかくればすむ事と。挑燈掛しを悔みぬ。かくて二人の惚手共。互にそれとはしらず。心々に明方を待て。此いつよりか戀つみし。胸の思ひを此曉に。はらす事よ。此ごとく病人に薬がまはれば。死人はなき世なるに。人皆戀に殺されけるよと。仰にまかせ二人は。俄に作病をおこしける。連られし大盡は。此内證夢にもしらず。何があたつたと。問せらるれば。留平は宵にたべました。蛸の手が胸に横つて。太鞍持ほどあつて。腹が張て痛と申。今日の料理に蛸はつかはぬかと。亭主不審さうな顔すれば。何ぢやしらぬが。やれ腹を引さくはとうめく。其爲にこそと。柏正が連れられし道鐵といふ飛上りの針立。懐中せし針を取出し。片手に槌をもつて。腹の虫を残らずたひらげ手並を見せんと。酒機嫌にわめいてかゝれば。留平は驚き。むまれついて針がきらひと。勝手へ逃入。作政は何とした。宵からうかなんだがと。木五。懇に尋らるれば。頭痛が致して。欠伸が出て目がまふやうで。どうやら死ぬるやうでござりますが。てつきり血の道でござりませう。あゝ目がまふ／＼と。にえかへる。内儀心得て。俄によい茶をいれるをもをかし。道鐵ぬからぬ顔して。血の道は若衆にこそあれといへば。それは痔の道の事ならんと。笑ひ立にして。太夫達にいとまごひ。兩人の病人を宿の男にあらまし頼むとあつて。捨ていづれも歸り給へば。八つの鐘より夜明迄の樂み。大分なりと悦事大方ならず。唐土八重霧は。面々に頼まれし。戀男共がおもはく。詞に品をつけ情をこめて東路に我事なげくやうに頼まれければ。東路は二人がわりなき心ざしを聞いて。昔生田川に身を捨て貳人も。一人の女をおもふからの戀死。思へばいづれをいづれといひ難し。しかし留平殿におひます事は。もしもれ聞えて。世の人の諷いやなり。是はふつ／＼思ひ切て貰ひましたし。作政殿事は。思ふ仔細あれば。竊に今宵斗はあうて進ずべし。八重霧さま案内にて。追付我床へ政殿忍ばせ給ふべしとあれば。唐土むつとした顔にて世の人の譏を思召さば。作政にあひ給ふも。留平にあひ給ふも。名の立は同じかるべし。とかく取持手による戀はいとくちをしと不興して立給ふ。袖を控へそれは太夫共いはれさんす。こなさまには似合ぬ不水なる御事。留平殿は器量よくして。女のすく風。我身とともいやならず。その方にあひましては。此首尾しらぬものは。此方から好てあひもせしやうに仇名たてられては。せつかく情知て。あうて進ぜた甲斐なく。いたづら者のやうに。取沙汰せられんも。言譯むつかし。又作政はぶ男にして。しかも女のいやがる片氣。それも大盡ならば。欲て逢た共いはるべけれど。太鞍の身なれば是以て其註なし。男ひでりはせまいし。あの男に限りて。女郎の方から。好てあふとはいはれまじ。たゞ戀のきかぬ男に。あうてやるが情なりと。唐土にもうなづかして。夢斗の契をこめて。此世の思ひ出をさせてやり給ふ。深き戀しりと。過行給ふ跡の跡迄。其名高くをしきは此君

第六 梅の匂ひ吹わたる大橋

戀は外になつて色宿はうそのつき所

平家の二番ばえ宗盛といへる本の大盡六條通ひの心ざしはあれ共。第一の太夫祇王祇女は。親父手池にしてかよはれぬれば。少しさしあひをくりて。是非なく儀せゝりにかゝつて。揚屋狂ひをせられしが。其比のしだして。千枚形の肌着黒羽二重にかくし裏。同黒羽織に。平といふ古文字の大紋。上繪なしにいたらせ。袴高く裾取て。大小よしやがゝりぼつこみ。臍富士といふ大編笠ゆたかに着て。懐紙も延は女めくとて。小菊の五折。爪楊枝をさしこみ。奉書の反古包に。名木厚割。鼻紙入はさもしきとて。つれたる散切の禿に入させ。あんでんの横ひだ。金岡時代の筆捨

松の高蔭繪の平印籠に。袋打の長緒。あまかは二つ玉。廿六夜の瓢箪根付も更にをかしく。踏捨の桑染足袋に細緒のわら草履。鶴野葎の細杖。けしやうについて。喜三太といふ小者に。紫しほりの風呂敷に。替着物楊弓の道具を包添。替雪踏逆手に持せ。踵にて尻をたたくほどに足をあげて。ひん／＼とありかせ。難波瀬尾といふ。至り末社をつれて六原の門口より。斗鶏仕掛の人形の歩くやうに。練りだし給ふを。其時の若男。六原流とて是を學びぬ。よく内證知りし者のいへるは。宗州も今大盡顔し給へ共。あれはもと清水坂の傘張の息子なり。いらざる盛をやつて無用の奢。追付内證は。ない大盡となつて。終には八嶋の破れ口にあはるべし。惣じての浮氣男。我より上手な人のする事を學びたがれ共。ある袖は振よく。ない袖は體の悪き。木綿羽織の胸紐しめたは窮屈さうに見えて見苦し。天窓の物ずきは錢のいらぬ事とて。一年に二度ほどづゝ。置て見たり剃さげたり。撥鬚厚鬚糸鬚とさま／＼にかはれ共。替らぬものは日野の一つ着物。心は至れ共姿を至らず。懼がまはらねば沖漕だ事もならず。冬氣は有にまかせて夏の中ほどより。身のまはりの物好。先はいやな所有。粹素男に限らず。帷子は紋付の薄淺黄に極まれり。いづれ淺黄に黒羽織ぎる人に。草履取のなきは。結構な振舞に。後段のなきやうな物にて。跡の淋しきものにて。やすう見えける。是でも其心には。大盡とおもひ。位をとつて。過ぬ酒に酔の醒る薬たべんと。紙入あけて。ねち襖紗取出し。一跡に八九匁ある小銀の中へ錢壹貳文入れて。人には壹歩の音ときかして。がらつかせ。今朝も浮世小路の五郎兵衛が鼻が。平産いたせしに。はや一角ねぢられたと。人聞いせんしやう。羽織のわく我家の門柱は取かへずして。まだ新らしき。柄頭を巻なほし。年忌前に。持佛堂の障子の破れしは張ずして。夜ありきの盛に。挑燈はさつばりと張かへ。しかも我あふ女郎の定紋を付て。よろこぶ心にあらでは。色狂ひおもしろからず。いかさませんしやうやめて。偽つかず。二日密合に町衆と物語する調子では。中々遊女狂ひをかしからず。せんしやうと。うそつくてもつた色遊なり。大盡は死れたる親父を世にあるやうにいひなし。是さへ仕舞てやつたらば。鐘響取て其時こそ。きつさり物の見事

な。さばきを致すてござる。それ迄は手の屈かぬ所を堪忍といへる。女郎は無事で確挽るゝ母親を殺し。隙があいたらば一日成共。世帯を見せて悦ばしませう物をと。不斷仕掛の泪ほしき時にこぼす。雨乞に此人頼まば。はした銀つかふ百姓も世の中にあふべし。耳訴訟に大盡聞かぬ。石佛代とて。金子五兩はとりもなほさず。七月前の小拂となしぬ。今時の慰み。座敷うつかりとは遊ばれず。遣手が近よれば。此程宿をもつたる移り聞て。無心をいはぬ先に此方から。追付家見に参るぞ。四つ橋に大分薪買置しに。木棚は拙者承ると。しかも東木三荷持賃共に。八匁五分五リンが物にて。嵩高に見せ。太職末社が近づけば。汗はかけ共羽織をぬぎおかず。不斷兵法の師をする人ほどに油断なく。心がけねば。女郎狂ひもならずと。悪賢き男の粹顔して。手下の若い者に語を聞て。近比の御たはけ也。銀つかうて氣苦勞せうよりは。銀つかはずに用心のよい。家内にました事なし。大盡と色里で稱美せらるゝほどの身ならば。少し鼻の下の長いこそ。壽命薬なれ。高が世間へ出ぬ遊び所なれば。利口ばつた方より。氣のつかぬといはるゝほど大様ながよかるべし。色遊びには銀を出し。談合事には智慧を出すべし。必ず内證の薄い大盡が。萬に賢だてをして。末社が言葉の先を折て。皆迄いふなど。早呑込んで先ぐりをいたし。骨牌の場て手目させぬやうに。八方へ目を配つて心を許さず。氣骨を折て何か慰に成べし。おのづから遊びもちひさうなつて。をかしからぬ事のみ多し。爰に家財かけて三拾壹貫五百目の大盡。北濱の根強い名題男と。同じやうに連立て。毎日新町へ通ふ千鳥と替名ついで。淡路町に隠れもなき。せんしやうものありて。名題の男共が上に立ん事を思ひ。萬事嵩高に出けれ共。高が三拾貫目内外の身代と。いづれも見透して。是にさからふ事なく。何につけても下手になつて。心の中てつもつて是遊びの外の慰と。影にてひそかに笑ひぬ。ある時千鳥が申は。何とやら羽織の長いも醫者めいて悪く存。頃日拙者物ずきにて。仙臺島の羽織を。成程短くいたし。此里へ着て参つたれば。はや大坂中の若男共が。残らず羽織短う致した。諸事に味な思ひ付をいたせば。どうしてしる事やら。早速世間へひろまり。にせらるゝに困りはてると。此

傾城色三味線 江戸之卷

吉原女郎惣名よせ

▲太夫の部

○京町 三浦四郎左衛門内

一太夫 たか尾 去秋身請

一太夫 うすくも 去冬身請

一太夫 こむらさき 以上三人

○しん町 巴屋三郎左衛門内

一太夫 かつやま 壹人

○角町 めうがや吉十郎内

一太夫 おぐら 壹人

▲太夫格子の部

▲京町 三浦四郎左衛門内

一むめがゑ 一かしう

一しらぎく 一こわた

一みよし 一ながと

一みやこ

一小よし

一すみの江

一やへぎり

一わこく 一しがさき

一ふじしろ 一ちとせ

一くはてう 一きてう

一ときは 一さかた

一さかくら 一花さき

一高くら 一せきしう

一わかまつ

▲同町 きつかうや三左衛門内

一玉かづら 一たまの

▲しん町 巴屋三郎左衛門内

一たんしう 一ちさと

一まつ山 一つしま

一玉むら 一みづゝ

一あきしの 一きよ川

一かくやま 一かほる

一おうしう 一玉ざわ

一琴うら

一にしを

一やへぎく

一やてう

一糸ざくら

一なると

一たかはし

一せいし

一いこく

一さもん

一なつ山

一しのはら

一かつら

一たつた

一大はし

一たま川 一やへざき

▲同町 長さきや平左衛門内

一高はし 一はつせ

一おのへ 一つまかた

一せんじゆ 一せいしゆ

一あげまき 一もとしば

▲角町 めうがや吉十郎内

大はし 一しらぎく

▲同町 ふじや三左衛門内

一くらの 一よしだ

一小もんど 一はつね

▲江戸町 山口七郎右衛門内

一左京 一しらたき

一初ぎく 一しらいと

一大すみ 一おとは

一小けんじ 一かすがの

一はしとめ 一のかぜ

一春ぎく

一はつざき

一ながと

一あかし

一からはし

一みちしば

一なには

一やつはし

一よしの

一さかた

一まさよ

一さごろも

一なかくら

一あふさか

一わかくら

一花ぎり

▲二丁目 車屋七兵衛内

一万太夫 一雪はし

一小よし

▲さん茶の部

▲角町 江戸屋市右衛門内

一そで嶋 一ふぢしろ

一まんよ 一わかまつ

一万太夫 一ときおか

一やへがき 一小ふぢ

一そておか 一わこく

▲同町 おはりや宇兵衛内

一めい月 一糸川

一かくやま 一山ざき

一そめ川 一ちとせ

一ときわ 一金太夫

一あづま 一うきはし

▲同町 山屋傳兵衛内

一かしはざき 一しきしま

一小太夫

一夕ぎり

一ときわ

一ひらお

一いこく

一とざわ

一おとは

一ていか

一かほる

一さんご

一花ざと

一そておか

一かしは木

一もりやま

一しがさき 一市川
 一花月 一小ざつま
 一いはさき 一わか竹
 一わかまつ 一いりゑ
 一ひらの
 ▲同町 かゞや助十郎内
 一こゝのへ 一ゆきへ
 一小さい 一せ川
 一花ゆき 一みなと
 一小わた 一かよひぢ
 一小柳 一花むら
 ▲同町 まんじや庄左衛門内
 一よし玉 一むらさめ
 一しのゝめ 一あかし
 一ていか 一よし川
 一玉ざわ 一山ぶき
 ▲同町 ひしや六兵衛内
 一うきふね 一おのへ

一かしを 一高さき
 一くわてう 一ゑもん
 一花月
 一くわせき
 一やまと
 一小にし
 一はつぎく
 一やへぎり
 一よしきよ
 一玉川
 一よしの
 一あふさか
 一しづか
 一かもん
 一きんさく

一まさつね 一山ざき
 一かせやま 一はつ雪
 一きさらぎ 一まつがゑ
 ▲同町 大まんじや庄三郎内
 一小太夫 一万太夫
 一みちのく 一たむら
 一いま川 一わかまつ
 一しづま 一小川
 一いこく 一花むら

▲同町 ふぢや万吉内
 一さんせき 一ふぢゑ
 一おのへ 一みゆき
 一せんじゆ 一ときわ
 一なには 一さころも
 ▲同町 つたや理兵衛内
 一つま川 一金太夫
 一小ざらし 一あふさか
 一みやこ 一玉川

一小ふぢ 一むめがゑ
 ▲同町 ひしや善兵衛内
 一せんじゆ 一さんせき
 一きせ川 一はつ
 一せきしゆ 一たかくら
 一きよ川 一はつ雪
 ▲江戸町 花屋入左衛門内
 一はつね 一たくみ
 一しのはら 一しづか
 一小源太 一よしをか
 ▲同町 二丁目きりや太郎兵衛内
 一さもん 一きんこ
 一小源太 一雪はし
 一とやま 一ひらの
 一いち野 一のゆき
 一しらいと 一小もんど
 一いこく 一おのへ

一せきの 一わか
 一こざらし
 一みよし
 一花さき
 一あやめ
 一きよはら
 一からさき
 一いはお
 一高まつ
 一はつせ
 一小ざつま
 一まつがゑ
 一初ぎく
 一くも井

一きり嶋 一せんじゆ
 一みよし 一かくやま
 一りしやう 一たむら
 一さつま 一いはさき
 一いづみ
 ▲同町 いせや伊左衛門内
 一みかさ 一高くら
 一山ざき 一みよし
 一みふね 一しらいと
 一ふぢゑ 一みちのく
 一小やま
 ▲同町 花屋半四郎内
 一花月 一さんご
 一玉かづら 一玉の井
 一さかた 一はつ花
 一ふなばし 一みちのく
 一つまぎ 一やへぎく
 一いづみ 一かほる

一はつね 一やへぎく
 一はつ山
 一庄太夫
 一みはる
 一小ざくら
 一かるも
 一まさき
 一小にし
 一かほひ
 一たかせ
 一つま川
 一そめやま
 一はなよ
 一小しきぶ
 一まさよ

▲同町 かりがねや六兵衛内

- 一みよし
- 一もなか
- 一みゆき
- 一つしま
- 一小よし
- 一かすがの
- 一はつしま
- 一ともゑ
- 一からすみ
- 一かよひぢ
- 一山しな

▲同町 四つめや權右衛門内

- 一山しろ
- 一はつね
- 一なるせ
- 一のさわ
- 一さくら木
- 一わか山
- 一わか松
- 一せんよ
- 一長くら
- 一さく花

▲同町 ふしみや勘兵衛内

- 一高はし
- 一百井
- 一井づゝ
- 一市川
- 一まつ山
- 一花づま
- 一とやま
- 一野川

一かもん

一はなよ

一かつら

一くも井

一かく

一右京

一ながと

一さかた

一はつしま

一よしおか

一かくやま

一いはお

一みはな

一いま川

一おのさき

一つねよ

一せんじゆ

一ひとゑ

一ゑもん

▲同町 きりや清左衛門内

一ゑもん

一なると

一いおり

一初ぎく

一おのへ

▲同町 ゑいらくや惣左衛門内

一ふぢゑ

一小しづか

一みよし

一さゝおか

一山ぶき

一しづま

▲同町 大こく勘十郎内

一せんじゆ

一みやぎの

一ゑにし

一みはな

一あさづま

一かたおか

一やつはし

一とやま

一山しな

一さくはな

一はなよ

一はつね

一わかさ

一かつら

一こざいしやう

一わかまつ

一松しま

一かしは木

一小ざくら

一玉かづら

一小もんど

一やちよ

一はつ花

一わかな

一しのぶ

一さゝき

一わかまつ

一うきしま

一小ふじ

一ふじの

一すま崎

一うつせみ

一みゆき

一松はな

一おのへ

▲同町 いせや茂兵衛内

一まさつね

一井づゝ

一さきやう

一はつ山

▲同町 かぎや市郎兵衛内

一むらじ

一山しな

一せ川

一さかた

一きよ川

▲同町 大多屋久兵衛内

一こざわ

一野川

一野かぜ

一きよはら

一せきしゆ

一たかを

一ちとせ

一しら玉

一小ざくら

一たかせ

一あかし

一山ぶき

一とやま

一小わかさ

一よし川

一かはち

一みかせ

一はつ花

一花ずみ

一ときわ

一たかを

一ちとせ

一みなと

一玉かづら

一ちさと

一たかせ

一小よし

一やな川

一いこく

一小いづみ

一やへざり

一小しきぶ

一にしを

▲同町 小松や吉兵衛内

- 一まさよ
- 一きんご
- 一みちのく
- 一小やま
- 一あをやぎ
- 一せんよ
- 一もなか
- 一みちのく

▲同町 大松や市郎兵衛内

- 一わかまつ
- 一あかし
- 一わかよ
- 一せんじゆ
- 一うきやう
- 一松しま
- 一かつ山
- 一いこく
- 一玉かづら
- 一しがの

▲同町 巴屋五左衛門内

- 一ともゑ
- 一金大夫
- 一よしだ
- 一ながと

一そでおか

一あかし

一まつの

一よし川

一うすぐも

一ゑもん

一くめ川

一しのはら

一松しま

一かつ山

一いこく

一玉かづら

一しがの

一よし松

一よしおか

一こはた

一つま川

一さころも

一きよすみ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一やちよ

一わかさ

一わかよ

一くも井

一かしはざき

一はつせ

一みはな

一いはさき

一よし松

一よしおか

一こはた

一つま川

一さころも

一きよすみ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一うねめ

一花ずみ

一ときわ

一たかを

一ちとせ

一しら玉

一小ざくら

一たかせ

一あかし

一山ぶき

一とやま

一小わかさ

一よし川

一かはち

一みかせ

一はつ花

一花ずみ

一ときわ

一たかを

一ちとせ

一みなと

一玉かづら

一ちさと

一たかせ

一小よし

一やな川

一いこく

一小いづみ

一花ずみ

一ときわ

一たかを

一ちとせ

一みなと

一玉かづら

一ちさと

一たかせ

一小よし

一やな川

一いこく

一小いづみ

一やへざり

一小しきぶ

一にしを

一わかさ 一みなと
一からさき 一たかくら

▲同町 中松や次兵衛内

一わこく 一かつま
一わかしま 一あづま
一玉川 一若紫
一松がゑ 一とやま

▲同町 一文字や宗十郎内

一もろこし 一かしはぎ
一いわき 一小わた
一わかくさ 一わこく
一きせ川 一むらさめ

▲同町 中村や十右衛門内

一市川 大くら
一ときわ 一角
一小よし 一玉の井
一やへぎり 一なかくら

▲同町 のしや忠右衛門内

一わか嶋 一しがの
一たか松 一よしおか
一小やま 一ゑもん

▲うめ茶の部

▲京町 いせや甚介内
一かはち 一わかよ
一ちよ川 一せんよ
一高しま 一わかやま
一むめがゑ 一川すみ

▲同町 ふじや又兵衛内

一ふぢゑ 一ふじの
一玉かづら 一こふじ
一はなの

▲同町 山田や上ほん内

一ときわ 一きくの
一さかた 一わかさ
▲同町 つちや孫九郎内
一松しま 一松かぜ

一かつ山

一あかし

一よしきよ

一いづみ

一出来嶋

一高まつ

一かつらき

一ちとせ

一わかさ

一からさき

一はなの

一やつはし

一なには

一竹川

一大はし

一小げんじ

一きく井

一金太夫
一高くら

一たか松

一松がゑ

一せ川

一やへわか

一よしだ

一みなと

一かつま

一わか

一いま川

一よしの

一はなの

一きりしま

一きてう

一いはを

一せ川

一市はし

一しが野

一た川

一小もんど

一せんよ

一せんじゆ

一はる野

一津やま

一さらしな

一やまと

一わかさ

一いりゑ

一市はし

一さかた

一つゝ井

一みよし

一小もんど

一よししたか

一わかくら

一わかの

一わかむら

一せきの

一たつた

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一わかの

一せんよ

一めうがや長右衛門内

一あさづま

一わかくら

一たじま

一いづみ

一小しづか

一うこん

一小太夫

一たもん

一小しきぶ

一ちさと

一たつた

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一わかの

一せんよ

一めうがや長右衛門内

一あさづま

一わかくら

一たじま

一いづみ

一小しづか

一うこん

一小太夫

一たもん

一小しきぶ

一ちさと

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一たつた

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一わかの

一せんよ

一めうがや長右衛門内

一あさづま

一わかくら

一たじま

一いづみ

一小しづか

一うこん

一小太夫

一たもん

一小しきぶ

一ちさと

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一たつた

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一わかの

一せんよ

一めうがや長右衛門内

一あさづま

一わかくら

一たじま

一いづみ

一小しづか

一うこん

一小太夫

一たもん

一小しきぶ

一ちさと

一せんよ

一かたばみや百之助内

一きよ川

一さゝき

一小太夫

一せいしゆ

一 はつね 一 からさき
 一 小源太 一 わかやま
 ▲同町 升や權右衛門内
 一 しら玉 一 松しま
 一 しがの 一 かしほ
 一 かせ山
 ▲同町 たてだし平右衛門内
 一 つ川 一 たかせ
 一 おのへ 一 玉かづら
 一 むめがゑ
 ▲同町 ひしや久右衛門内
 一 なると 一 小しづか
 一 かしは木 一 とやま
 一 はつ雪 一 玉かづら
 一 はつ花 一 とざわ
 一 はるの 一 こゝのへ
 一 市川 一 市はし
 一 いはさき 一 から松

一 からまつ
 一 おしほ
 一 万太夫
 一 大くら
 一 はつせ
 一 つしま
 一 ともゑ
 一 万太夫
 一 ともゑ
 一 ちよの
 一 小太夫
 一 はつせ
 一 かつら
 一 はつぎく
 一 つかまつ
 ▲同町 まんじや六右衛門
 一 せんじゆ 一 わかよ
 一 せんよ 一 わかな
 ▲同町 奥田九兵衛内
 一 ふぢしろ 一 せんよ
 一 はやぎき 一 かしは木
 一 すみの江 一 初しま
 ▲同町 きりや庄兵衛内
 一 いくよ 一 よしの
 一 玉の井 一 玉ざわ
 一 ながの
 ▲同町 三浦や清兵衛内
 一 やまき 一 きりしま
 一 しのはら 一 山しな
 一 小太夫 一 ときおか
 一 せんよ 一 せんじゆ
 ▲同町 山本介右衛門内
 一 きよはら 一 金太夫
 一 からさき
 一 さかた
 一 初はな
 一 みな川
 一 山おか
 一 さごろも
 一 おのへ

一 よしきよ 一 わかさ
 一 つしま 一 おのへ
 一 わこく
 ▲角町 橋本や五郎兵衛内
 一 玉ざわ 一 もり山
 一 うねめ 一 いくよ
 一 ちとせ 一 はつ山
 ▲同町 大和や傳右衛門内
 一 小ふぢ 一 大くら
 一 玉かづら 一 つねよ
 一 かほる 一 小ざつま
 ▲同町 まんじや勘兵衛内
 一 さく花 一 市むら
 一 系川 一 あはづ
 一 小ふぢ
 ▲同町 きつかうや八兵衛内
 一 あかし 一 つしま
 一 たかせ 一 やしを

一 わか松
 一 しがさき
 一 玉野
 一 とやま
 一 玉川
 一 さくら木
 一 おのへ
 一 市川
 一 いづみ
 一 かく山
 一 きやす
 一 高しま
 一 はせ川
 一 小にし
 一 やちよ 一 からさき
 ▲同町 さかいや市兵衛内
 一 小太夫 一 花まつ
 一 市川 一 小にし
 ▲同町 まんじや甚右衛門内
 一 きよすみ 一 しらぎく
 一 ふぢしろ 一 高まつ
 一 よしの 一 こよし
 ▲同町 若松や清左衛門内
 一 いはお 一 きよはし
 一 きよ川 一 よし玉
 一 野川 一 はなよ
 ▲同町 玉や四郎右衛門内
 一 たかまつ 一 玉さき
 一 かつら 一 きんご
 一 松しま 一 小もんど
 ▲同町 かぎや甚左衛門内
 一 わかさ 一 たつた
 一 からさき
 一 花ざわ
 一 一からさき
 一 玉川
 一 玉の井
 一 かほる
 一 いさわ
 一 よし玉
 一 まさよ
 一 小もんど

一 小川 一 小ながと
 一 とこよ 一 あさぢ
 一 かづま 一 わかの
 ▲ 江戸町 ゑびすや喜左衛門内
 一 ゑぐち 一 そめ川
 一 ときおか 一 からさき
 ▲ 同町 二丁目平野や仁兵衛内
 一 いはお 一 小太夫
 一 こきん 一 かしはざき
 ▲ 伏見町 かめや京白内
 一 よしの 一 みや川
 一 ちよの 一 いなば
 一 ながと 一 さくら木
 ▲ 同町 かたばみや庄右衛門内
 一 よしだ 一 からさき
 一 玉かづら 一 やばせ
 ▲ 同町 四つめや金兵衛内
 一 いづみ 一 くらりの介
 一 かたおか
 一 たみや
 一 花月
 一 大さか
 一 せんじゆ
 一 くめの介
 一 津川
 一 こわた
 一 小わかさ
 一 小源太
 一 ゑぐち
 一 小柳
 一 高くら
 一 あづま

一 いざわ 一 いはざき
 ▲ 五寸局つぼねの部
 ▲ 京町 天満や伊左衛門内
 一 さきやう 一 やへぎり
 一 さごろも 一 いま川
 ▲ 同町 ふじや六左衛門内
 一 やしほ 一 きよ花
 ▲ 同町 湊や彌左衛門内
 一 みなと 一 むめがゑ
 一 つねよ 一 松しま
 ▲ 同町 きつかうや三左衛門内
 一 うきふね 一 さかくら
 ▲ 同町 大ゑびや長右衛門内
 一 きよすみ 一 きよ玉
 一 きよしま 一 わかまつ
 ▲ 同町 三河や長兵衛内
 一 いくよ 一 小ざつま
 一 こやま 一 小きん
 一 小太夫
 一 いをり
 一 もり山
 一 きよの
 一 かりう
 一 かわち
 一 かよひぢ
 一 はつぎり
 一 櫻ざき
 一 つねよ
 一 こぎん
 一 ちよ花
 一 こざらし
 一 小ざつま

▲ 同町 ゑびや孫兵衛内
 一 やしほ 一 市野
 ▲ 同町 きくや長兵衛内
 一 はなの 一 さかくら
 一 くはせき 一 わかやま
 ▲ 同町 きりや吉兵衛内
 一 大くら 一 もなか
 一 きんご 一 やしほ
 一 せんよ 一 市川
 ▲ 同町 めうがや善兵衛内
 一 みかさ 一 うきはし
 ▲ 同町 きりや六兵衛内
 一 ちとせ 一 いくよ
 一 金太夫 一 ふぢ嶋
 ▲ 同町 泉や佐右衛門内
 一 はつ花 一 ふちなみ
 一 まさよ
 ▲ 同町 かゞや吉兵衛内
 一 あづま

一 うねめ 一 よしの
 ▲ 同町 いせや伊兵衛内
 一 いくしま 一 いま川
 ▲ 同町 まんじや市三郎内
 一 さゝの 一 花ざき
 一 りしやう
 ▲ 同町 つるがや仁兵衛内
 一 きよ川 一 かほる
 一 かつら 一 かくの
 ▲ 同町 山田や傳左衛門内
 一 さかくら 一 わか松
 一 つま川 一 せ川
 ▲ 同町 もつかうや孫右衛門内
 一 いはお 一 小しきぶ
 一 小しづか
 ▲ 同町 いせや治兵衛内
 一 小太夫 一 万太夫
 一 はつせ 一 よしをか
 一 小太夫
 一 いをり
 一 もり山
 一 きよの
 一 かりう
 一 かわち
 一 かよひぢ
 一 はつぎり
 一 櫻ざき
 一 つねよ
 一 こぎん
 一 ちよ花
 一 こざらし
 一 小ざつま

▲同町 ぜにや宗八郎内 一よしの
 一花月 一よしむら
 一さかた 一わか松
 ▲同町 たはらや四郎兵衛内 一みゆき
 一花月 一花雪 一よしの
 一かく山
 ▲同町 いづゝや太右衛門内 一はつね
 一初ぎく 一きり嶋 一わかさ
 一きくの
 ▲同町 上田や久兵衛内 一わこく
 一みよの 一よしをか 一小よし
 一よしざき 一いこく 一みちのく
 ▲同町 山口や嘉右衛門内 一さくらのふ
 一いくた 一いくよ 一さかくら
 一たかの 一しの崎 一たかよ
 一たか川
 ▲同町 一むらや長右衛門内 一やへぎり
 一かや野 一やへざき 一よしきよ

▲しん町 山城や九郎左衛門内 一かつ山
 一はつせ 一しげ山
 ▲同町 さゝや次郎左衛門内 一たむら
 一ゑぐち 一わか山 一たつた
 一松しま
 ▲同町 巴や三郎左衛門内 一せ川
 一あをやぎ 一もり川 一いなば
 一わかなみ 一かしを 一さくら木
 一みなと
 ▲同町 わかさや伊左衛門内 一わか竹
 一かつ山 一かせん 一よし山
 一小よし 一玉川 一やちよ
 一まつをか 一まづつま
 ▲同町 するがや忠兵衛内 一しら玉
 一からさき 一こよし
 ▲角町 いせや茂兵衛内
 一玉野
 ▲同町 おもだかや傳九郎内 一かしを

一から津 一かほる
 ▲同町 かんばやし介左衛門内 一川野
 一にしを 一わかの 一こわか
 一わこく 一にしき 一もなか
 一あづま 一しらぎく 一山かは
 ▲同町 ゑびや五兵衛内 一わかの
 一いな の 一ふじの
 ▲同町 つたや作兵衛内 一わか山
 一玉かづら 一わか山
 ▲同町 ひらのや權右衛門内 一たくら
 一さかくら 一ゑもん 一たつた
 一みはな 一ちとせ
 ▲同町 すゝぎや五郎兵衛内 一たむら
 一にしお 一あかし
 一ふぢなみ
 ▲同町 めうがや吉十郎内 一くらの
 一よしおか 一みなさ 一しづか
 一のむら 一わこく 一かすみ

▲江戸町 かづさや源左衛門内 一つねよ
 一まさよ 一いま川 一このへ
 ▲同町 松葉や庄左衛門内 一きんざく
 一まつよ 一松がゑ 一からさき
 一こにし 一あかし
 ▲同町 ふじや又右衛門内 一ふぢなみ
 一みよし 一まさつね 一みはな
 一とり山 一山野 一つしま
 ▲同町 ともゑや伊右衛門内 一よしだ
 一たかせ 一むめがゑ
 一きてう
 ▲同町 いせや長左衛門内 一いくた
 一ちとせ 一みよし 一ひとへ
 一はつせ 一いくよ 一市野
 ▲同町 あふみや仁兵衛内 一きよ川
 一の川 一かしは崎 一みちのく
 一そのべ 一やちよ 一あふよ
 一わか の 一よるせ 一小ながと

一かほり 一みゆき
 ▲同町 あづまや清藏内
 一 小太郎 一きぬ川
 一 きこく 一なると
 一 うこん
 ▲同町 ひやうごや源太郎内
 一 きよはし 一しら雪
 一 いこく 一玉かづら
 一 ゑもん
 ▲同町 丁字や宗左衛門内
 一 玉がき 一高しま
 一 百井 一花ざわ
 ▲同町 かたばみや三右衛門内
 一 あわぢ 一みなと
 ▲同町 大和や理兵衛内
 一 あふさか 一ときわ
 ▲同町 ともゑや玄彌内
 一 たか野 一玉がき

一吉十郎
 一左吉
 一 小三郎
 一 高はし
 一 玉の井
 一 わか竹
 一 玉ざわ
 一 玉の江
 一 たかせ
 一 かほる
 一 きよすみ
 一 はつしゑ
 一 たんご
 一 玉川

一 たもん
 ▲同町 まんじや小左衛門内
 一 はつね 一しのだ
 一 わかよ 一さかくら
 一 みはる
 ▲同町 山口や與兵衛内
 一 金太夫 一ちとせ
 ▲同町 たまや山三郎内
 一 あかし 一にしを
 一 せきや 一おうしう
 ▲同町 ゆふきや又四郎内
 一 ふぢなみ 一さかた
 一 小ざつま 一やどり木
 一 小げんじ
 ▲同町 ひしや七郎兵衛内
 一 いさわ 一やへぎく
 一 みかさ 一いくの
 一 やちよ 一みはな

一ちとせ
 一あかし
 一やちよ
 一すみの江
 一まさつね
 一さらしな
 一わかな
 一左源太
 一袖しま
 一いくた
 一なには
 一みやこ
 一こわた
 一やへざり
 一かうり

一 いわお 一 おりべ
 一 よしの 一 市おか
 ▲同町 きつかうや七左衛門内
 一 たつた 一 小ざつま
 一 ゆきへ
 ▲同町 長崎や八兵衛内
 一 小ざつま 一 ことわた
 ▲同町 ともゑや吉兵衛内
 一 わかよ 一 たんご
 一 わかやま 一 たかの
 一 玉川 一 きぬがへ
 一 いくしま
 ▲同町 いづゝや勘兵衛内
 一 こよし 一 かつ井
 一 つゝ井 一 ゐづゝ
 一 よし松 一 そつゐ
 ▲同町 かづさや七右衛門内
 一 せんじゆ 一 わこく

一いり江
 一松しま
 一いくよ
 一ながしま
 一しのはら
 一玉がき
 一高まつ
 一せきしう
 一たもん
 一はつね
 一はなよ
 一玉の江
 一こにし
 一かつら
 一八十郎

一 つねよ 一 かせ山
 一 ちとせ 一 小ざつま
 一 ことうら
 ▲同町 くるまや清右衛門内
 一 あをやぎ 一 ふぢおか
 一 ちさと 一 小いづみ
 ▲同町 いはきや又左衛門内
 一 花まつ 一 小太夫
 一 こゝのへ 一 まつかぜ
 ▲同町 いせや六兵衛内
 一 わか嶋 一 小もんど
 一 ながと 一 わかもり
 ▲同町 あふぎや久右衛門内
 一 いをり 一 さかた
 ▲同二丁目 かづさや後家内
 一 大いち 一 はつぎく
 一 山しな 一 かるも
 一 竹川

一やへがき
 一あふさか
 一ひらの
 一花月
 一はなよ
 一わか松
 一こにし
 一いづみ
 一いわお
 一はつ山
 一きよ花
 一初はな

- ▲同 くるまや七兵衛内 一 大くら
- 一 大さき 一 ひとへ
- 一 小ざつま 一 いさわ
- 一金太夫 一 一きよ川
- ▲同町 つたや清右衛門内 一 あかし
- 一 ともゑ 一 むづ
- ▲伏見町 大田や久右衛門内 一 いくよ
- 一 野かぜ 一 せんじゆ
- 一 まさつね
- ▲同町 いせや六左衛門内 一 わか山
- 一 わか松 一 くらの介
- ▲同町 いせや作右衛門内 一 しらぎく
- 一 あづま 一 初ぎく
- 一 玉かづら 一 いわお
- ▲同町 かりがねや五郎兵衛内 一 もなか
- 一 かもん 一 もんど
- ▲同町 きりや武兵衛内 一 はつ花
- 一 ながしま 一 よしだ
- 一 いこく 一 かわち

- 一 たもん 一 みかさ
- ▲三寸の局つぼねの部
- ▲しん町 むめばちや喜左衛門内 一 つねよ
- 一 山川 一 たき川
- ▲同町 長右衛門内 一 こざらし
- 一 わか松 一 はつね
- 一 たんば
- ▲江戸町 たはらや吉兵衛内 一 小しづか
- ▲同町 ひしや藤十郎内 一 かすがの
- 一 さらしな 一 高はし 一 はつ花
- 一 きんご
- ▲伏見町 つたや與兵衛内 一 はつ山
- 一 きてう 一 からさき 一 ちとせ
- ▲同町 丁字や八兵衛内 一 こもんど
- 一 さらしな 一 高はし 一 玉川
- ▲同町 丁字や八兵衛内 一 そめ川
- 一 よしの 一 もんど 一 はつね
- 一 あふさか 一 おりべ 一 とやま

- ▲同町 からかさや傳兵衛内 一 かつ山
- 一 あさづま 一 はるの
- ▲同町 丁字や八左衛門内 一 はつね
- 一 かつら 一 みなと
- ▲同町 四つめや市郎右衛門内 一 金太夫
- 一 のわき 一 からさき 一 市野
- 以上なみ局つぼねは書のせず
- ▲あげ屋あげの分
- 一 北がわ きりや市左衛門
- 一 きまやうや權兵衛
- 一 いづみや半四郎
- 一 井筒や彦兵衛
- 一 ふせたや太右衛門
- 一 まつばや六兵衛
- 一 南がわ ふしや太右衛門
- 一 ゑびや治右衛門
- 一 おわりや清六
- 一 橋屋五郎左衛門

- 一 同 一 はしもとや佐兵衛
- 一 同 一 かまくらや長兵衛
- 一 同 一 わかさや庄兵衛
- 一 同 一 いせや宗三郎
- 合 十四間也
- ▲太夫合 五人 晝夜七十四匁 晝二つに割わ
- ▲太夫かうし合 九十九人 晝夜五十貳匁 同斷
- ▲さん茶合 四百九十三人 夜斗金壹歩夜ルを專にする
- ▲うめ茶合 貳百八十人 同十匁と云テ壹歩也 同斷
- ▲五寸局合つぼね 四百廿六人 五匁づうづらがうしと云よこのぬき三通有
- ▲三寸局合 四十四人 三匁づつりがうしと云よこのぬき一通有
- ▲なみ局合 四百人餘有 錢百文づ名よせは略之ス
- 惣女郎數合 千七百五十人餘
- あらまし如此ニ候
- 以上

第一 月にも増る高雄の紅葉

智恵をやめて一時成共化れ徳

月花に心をよする哥人も梅が香を櫻の花にははせ。柳の枝に咲せて見たき願ひ。いづれよい事はそろはぬものなり。男はすぐれて然も分の道に賢く。心も賤しからずして。女郎にかけたらば。初會から打とげ。二度めには門迄おくりて。人にもひけらかすべき器量の男は。揚屋に近付さへなく。宵から寝て面白い酔を知らず。又ぶ男にして片言まじりに物いふ親仁。金の威光で。歴れきの太夫に足さすらせ。宿の嚙に酒つがせ。寝ながらのむもあるぞかし。爰を以て叶はぬ浮世と申すなり。されば昔より。風俗器量は嶋原の女郎にして。吉原のはりを持せ。難波の九軒で遊びなば。あつた物ではあるまじと。三ヶの津の色里をかけめぐり。色道一遍上人といふ樂坊主。藤澤を越て江戸に下りしに。吉原は淋しく見えて内證の繁昌。とかく金澤山な所故なり。さるによつて女郎の心ざし。おのづから強くなりぬ。すべて遊女は其時々の能男次第にて。一しほ色を増紅葉。高雄は生れついで太夫職風義いふ迄もなし。宿に歸りて衣装仕替る事なく常也。いかにしても上方の太夫のならぬ事なり。揚屋の晝をつとめ。身仕舞に歸るに。對の禿に三味線を。挾箱の如くにかたげさせて。二行に先へ歩ませ。其身は道中ゆたかに。しれる人にも詞かけず。帶胸高にして。身をするての足どり。眠れる程靜かに。位をとつて。からくり人形の歩行如し。あとぞなへは遺手のこはい奴が。いつとでも水へいらぬ布子着て。夕日にまがふ赤前垂かゝはゆきは。太夫とおなじ顔して。練てゆくもをか。扱宿近くなれば。つれたる六尺を先へ走らせ。門口より高尾さまおかへりと。はやり醫者の宿歸りの如く。ばつとしたる事。是こそ本の太夫なれ。爰に神風や伊勢町に數年僅かな錢見世出し。壹貫と買にくれば先三百渡して残り。は追付跡から進ませせうと。其銀とつて近所を飛巡りて。やうく七百の錢才覺する程なせはしき世渡にも。戀は分別

の外にして淺草の觀音參りの友に誘れ。三谷に行て前中着がありぎり局歩行して取留るを嫌にして。すこしの間に女郎五六人にあうて。随分強藏自慢を申。汝は鱈何盃もつたと所々のはやり誦にて。床に入事を鱈盛とは申ならはせしが。いづくの腎張が申出せしやらん都にても一比。うんそどろといひ廣めし事久しかりき。扱取集めて拾奴にたらぬ銀も皆になつて。腰まはり氣遣なく。うつかりと辻に立。れきくの太夫達の揚屋歸りを見渡せば。花も紅葉も一つに固めし。高尾が歸り姿に。彼小錢屋の助四郎見初まらせ。局の樂しみを忘れ。禿にすがりてお名を聞さだめ。手遠き戀の思ひ立。雲にかけはし霞にちどり足して。其日は宿に歸り。必竟銀次第で埒のあく戀とは知てありながら。商の元手さへ。かすかな身をして。いろく分別して見れ共。天から降ず。地からもわかず。とかく此身で此世の御げん叶ひがたしと。人のしらぬ涙を流し。所詮ながらへてある故にかゝる憂き事もありと。戸棚より脇指取出し。思ひ切てぬいて見たれ共。どうやら小氣味わるく。いやく死てから此戀の便りには。ならずと。まづ双物を鞆に納めたる智恵を出し。昔より叶はぬ事を神にいのるに。手前の信心次第にて。成就せぬといふ事なし。先銀さへあれば。自由に埒のあく戀なれば。戀の元は銀なれば。福の神を一一のりして祈て見んと。淺草の稻荷の社に日參。追付御影にて。何程遣うても尾の出ぬほどの身體になりて。背のはげたる女郎買。鳥井を越し粹こつひと。世の人の羨ましがる程になしてたび給へと。小さき鳥井をこしらへ。毎日は是を立置。肝膽くだき。半年ばかり祈しうちに。高尾は誰か根引にして。里は紅葉なき。三浦の秋の夕暮さびしかりしが。又めづらかなる花紫に。色ぶかい男共がさわぎて。以前かはらぬ繁昌と。御町知が話を聞てはつと。胸せまり。さりとは其君ゆゑにこそ。此社へも歩みをはこび。さまん心をつくせし事よ。今は浮世に片時もろつてゐる事。ふつつりといやと。世を見かざり。煮賣する家に入て。一盃のうでの上に。最期きはむべしと。片陰の旅籠屋に立寄。小半酒を冷にて見しらし。ほろく酔の來る時。むかうよりどういはれぬ美形。人に見られたき風情もなく。黒羽二重の紋なしに龍門の中幅帯。目立ぬやうに

つくすを。いかに風義があはぬとて。廿四五ふるといふ事。情をしらぬむごき仕方。懇する我迄も心よからず。其上長次は上方一番の分知。且は京大坂のきこえも悪。今日は拙者が仲立いたし。心よく長次にあはせん爲連立つて参つた。此心を無にして。我等手前を思ひやりて。あふまいなど未熟な義。仰らるゝと。たちまち今日切といふ男。さあ返答はと酒氣もなくて。誠を申せば。太夫感涙をながし。それ程迄に私事をおぼしめさるゝ御心。鎌倉にひとりある母を誓文に入れて。いかほどか。忝なし。長次様をふりましたは。我こと聞及ばれて。美君おほき京をすて、はるゝのお下りとの御事。今の世にはあんまりうそらしく。あたまから思はれたいと仕掛と。悪推まはり。誠かうそかの御心底を見極めんため。つれなくも多くの日をふり参らせし悔しさ。何がさてそなたさま御一座の上は。あひませいではおきませうかと。改めて長次と盃事して。はや〇〇〇らせて。三木様〇〇ぞやと。どこやりに詞残して。長次が手を取。是戀男おじや。と手をとれば。長次は晝からの酒に心みだれいふ。程の事前後して。ひとへに現の如し。太夫き三木も氣の毒の頭をかいて。二人が今日の心ざしの。無になる事を悲しみ。酔のさめる薬などをなめさせて。つんぼうに物いふ如く。兩方よりさまざまいひこめばぎよるとして。人心地なければ。さりとは是非に及ばぬ仕合。今宵は爰に留て。酔さめなば。あれが心に叶ふやうに。なぐさめてくれるべし。我等は是より歸ると立んとするを。太夫引とめ。今日は迄の御誘引にて。御連といふ名があれば。貴様御一所にあらずしては。金輪際あふ事せぬと申切。しからば今日がかりぢやが。中々たとへ此世は扱置。ながき來世まで。御見ならぬとて。御一座でなくしては。御合點の上なれ共。我身にしてはうしろぐらき事。ふつゝいやと心底極て申せば。三木も道理に責られて。重ていふ言の葉もなき時。長次むくゝとおきて。涙をながし。さりとは。お江戸の色遊びのいきかた。傾城買の聖人共申べし。我も實は過ぬ酒に酔べきはずはなけれ共。兩人の心入を感じ。態と正體なく見せて。思ひあひしおのゝを床に入べしと。しばらく狂言をいたした。向後此態やめ申上。一つの願あり。逆の事に三木きいてた

もるまいか。してやめての上の願は。さればその事。もろろん兩人の心底を感じ一旦思ひきるとはいへど。縁の道は根ぶかきものなれば。此里に太夫をおきては。根が賣物といふ心にて。又ふと心の迷ふまい物でなし。願とは爰の事。貴殿太夫を今日の内に請出し。ながれの道をたつて。お内儀様と人によぼしてくれなば。我思ひ速かにはれて。永く物おもふ事あるまじ。此願を聞入ず。臨終ぎたなく心の残るべきやと。一夜はあはして其上の事など。深切過たる心づかひあらば。只今爰にて自害いたすと。双物を取廻して。誠に思ひ切たるがん色。三木聞届。爰は下手くろしういふ所にあらず。先我等の爲には十分よい事。ともかくもと。則私宅へ。事の自由にはたらく。山吹色の物を馬二歌につけさせて。只今参れと申つかはし。早速の身請情知の寄合と。見し事を今申出し。女郎も。〇とりんぼうもあまねく色道の鏡といたしぬ。

第三 月より上に名は高松

散茶にふられて。のどのかわく男

世の中に無分別者と。銀の利ほどこはきものはなしと。朝比奈の三郎が悪所銀の利におはれて。物前にはてんゝと。舞鶴の直垂も汗にしほたれ。鐵の門は破れ共。銀なくては。力業にも預り手形の判は破られずと。自慢の髻もちぢみあがつて。當所のない銀を必ず遣ひ給ふなど。九十三騎の親類申へ。随分懲て語りしは。尤ぞかし。今時は身體がらよりは。遊び花麗になりて。思ひの外仕過し多し。其ために身體相應の遊びを。色里にも拵へおけば。細元手の人。太夫格子に及ばぬ戀をせうよりは。氣骨のをれぬ散茶にたはふれ。又は近き比の仕出し。うめ茶で咽のかわきをやめ。當座拂の氣散じ。それから五寸三寸新町がしのかきのうれんは。定て百宛ころりと寝て咄した所。さらに生男懷て寝るやうにはあらず。內衣も絹物して。はし切の鼻紙。口すぼめて物いふ風情。末々にても。御町のしだ

しは各別也。爰に本町傳馬町の棚に。旦那の爲に成手代共十人斗寄合。命の洗濯講といふをはじめ。先あたまた一人前より。金壹歩宛出し。是をもとだてとして。毎月壹人に三匁づつ出し。格子女郎をまはり番に。一人宛買て慰ける。是よりして。あたま掛を。世間に枕掛と申は。此因縁と承る。又無盡といへるも。無なりをして。盡たがるものを。おなじ心の友打寄て講をとりむすび。つくさるゝほどに。身上取立て。大盡にしてやるより發て。無盡共。又は戀頼母子共申ぞかし。其中に棚預りのすこし大氣なる男の申は。迎も此講思立からは。今少しの事なれば。太夫を買て慰むべしと。そろゝ奢を申出せば。成程それも取結ぶ前方に一相談いたせし事なり。上方とちがひ。爰の太夫職は。初會などには。身仕舞ふらゝとして。やうゝ八つ前に。揚屋に来て。そこゝに盃まはして。又も御見と床なしに立歸るのよし。然れば此講中どれとても。廻り番にして。毎月買手の人替れば。いづれがあふも初會なれば。銀出しながら。年中祓佛の光堂へ參つたごとく。有難いとおもふ斗で。尊い肌も拜まず歸りて。何か面白からんといへば。棚預り我を折り。さりとは太夫といふもの。はした銀にてかはれぬ物と。今迄のを掛捨にして。講をのさける。いかさまそれ一つの思ひ入てゆく客に。初會なればとて。寢道具さへ出さず。すもどりさするは。何程か心残りにして。銀拂の時。養子親の借錢なすやうに思ひ。出しかねけるも。理ぞかし。とかく女郎は賣身なれば。其日の男に嬉がる事あく程〇〇で。しかもなづみたる顔つきしかけ。役日の外迄勤させるが商ひ上手なり。客も是より思ひ付。あの美しい姿の。高家方の息女なら。金銀にてかなふべき物にはあらず。其道の者なればこそ。親にも見せぬ〇〇〇〇で。柔かなる〇を自由にものしける。是には何かをしからじと。ある程は參らせあげける。三浦の大助といへる。末社の老人申けるは。昔の女郎は。何心もなく形をうるはしく作るを専にして叶はぬ聲にても哥をうたひ。三筋の糸さへならせば。太夫とよばれて其日の男上戸なれば。酒面白く汲かはし。又は上るりすきなれば。いやながら。殿々聞なれし十二段の忍びの所。永開節のをかしげなるを。折々に三味線引かけ。是はこまかに御語りなされるゝ

などそやしける。思へば病人の伽するに。かはる事なくそれは。心の苦しみになるに。今の世は又すいた男ぶりを。氣にいらぬ顔をして。位を取様々に心をなやませ。勤なればこそ。こんな男に人中で。あはるゝものかと思ふ程のいやらしきにも。ひたゝともつて參り。身をそれが物になせるしかけ。たとへ天眼通を得られし羅漢も。一泳ぎはおよがさるゝ程のかしこさ。女郎の智慧の盛とは今此時かや。爰に三鳥三木とて二人の分知。色道の傳受事迄しりぬいて。およそ三ケの色里にかくれなし。抑三木の内。川な草と申は。ながれの女のさそふ水あらばと。客次第に成を。根のない草にたとへし事也。おかさまの木といふは。松も根引にせられて。お内儀さまに成事。また三鳥の中の。呼子鳥と申は。迎の男の聲などのやうに世間では申せど。それは傳受せぬ人のいふ事。利口な末社が上方より。糟漬の生鱈を。もらひましてござる。是一種にて御出とよぶ時。必ずゆかぬ物なり。霜先の無心いはるゝはせつなきものと。いまだ前方なる。素大盡衆へ大事を語りぬ。此三鳥といふ大盡。都の末社の名鳥。はじめ下り。此里にて十三替りを轉りしを聞いて。近比面白き色くどき。是珍鳥と悦いさみ。爰の諸分を見せばやと。先おつとつて京にない圖。二丁だちに打のせて。あれなる都鳥とは汝が事よといへば。あの如く終には水が川へはまる事。打見には豊なれ共。水の中にてあしどりのいそがしさ。我等の身上も。さりとあはの鳥にかはらず。内の苦しさと。はや耳訴訟。爰の大盡は。随分氣がながうて。急に物やる心つかず。何事もさう心得たがよしと。觀面にもつて參て。中々はげしき男氣。上方の大盡とは。各別のちがひと。口をあきけり。扱今日の趣向は都の名鳥といふ男を。上方の歴々の大盡に仕立て。三谷の水共に。手をとらして一興と。三鳥三木申合て。其旨名鳥に申渡せば。假初ながら色里にて。歴々の大盡になる事。萬事につけてむつかし。此成實に上方へのぼる路金御意にかけられたらばと。はや欲を申せば。それこそ安き事と、三鳥懐より金子五兩取出し。早速くるれば。忝なしと。紙入にをさめ兩人が挾箱より。用意せし替衣裝出して。船中にて俄に。本大盡に作立。舟つけばおのゝあがりて。いつもの揚やに行ば。皆待顔に。撥音をやめて

二階よりおりる者共は。兩人が常につれる若い者共。津輕才助。出額萬吉。平太蜘蛛の勘助。其外をかしき中間共。お先へ參つて御出はおそし。今迄騒いでをりましたと。いづれも下座にかたまる。時に兩人の大盡。名鳥を正座になほし。あれらは拙者共が常に遊山所へ召つれて參る末社共なり。我々兩人同前にお目かけられて下さるべしと。扱手をついて慇懃に申せば。才助をはじめ。いづれも旦那さへあの如く。結構なる御挨拶をなさるゝからは。たゞの御方にてはあるまじと。一度にかうべを疊にすりつけ。まき舌にて御返事申。かくて三木宿のかゝ近くまねき。小聲になつて。あれなるは我等兩人をお引廻しなされ下さる。上方のさる御方さま。此度ふと。御下りあつて。ひそかに忍びの御遊山常の客とは各別なり。何事も都はやはらかにして。花車を專にする所なれば。物事しめやかに。いづれ共さだめず。太夫格子を六七人つかめと小倉。勝山。初尾。大橋。きてう。八重霧。山の井。まじりに酒も大かた成時迄名鳥も上方にてよい事見つくせし。ものしなれば。成ほど大へいをさばきかねず。切々手水にたつて。ある水をくみ替させいさぎよくつかふ時。山の井といふ女郎。私かけてあげませうと。杉柄杓とりて。かけ參らすれば。ちか比氣のついたる女中。お名はといへば。山の井と申。ことわりかな。むすぶ手の。霰ににごる山の井の。あかても人にと貫之がよみし哥の心にもかなひ侍る。いづれ俊成卿の忠峯が有明の哥にも。おさゝくおとるまじと稱美し給ふ哥の程あつて。幾度吟じてもおもしろしと。打あがつたる哥ばなしなど申出し。随分あぢを。しこなす所へ。勝手から宿の男が。丸裸になつて。惣身を金箔でだみて。其まゝこがねの佛の奉加を々々とみざりて罷出る。是は一興なると皆々わらへば。今朝酒にたべよひ。表の二階からおちまして。惣身をしたゝかに打まして。難儀いたせしを。金は打身の薬として臺所て皆がよつて。かやうに此世から。佛にはいたしてくれましたれ共。奉公を引て養生いたす飯代の奉加奉加と。無遠慮に座敷をみざりまはる。これはふびん成義。今日の大盡へ取付てなげきを申せ。酒興の上なれば。御ゆるさるゝぞ。お。腹へ手を入。あつうかゝつて申請と。兩人ゆるせば勝にのり。是旦那おにげなされな。愛宕白山山手

がわるいと。みざりながら袂にしがみ付。懷に手を入船中にてもらひし。五兩の小判に手をかくれば。名鳥せつなくこりやならぬと。女郎の手前も恥す。大盡やめる是があつてこそと。置頭巾をとれば。扱は今日の大盡はつくろひ物かと。女郎末社腹のいたい程笑うて。又酒になして遊ぬ。裸佛は云じらけに成て。せめて白毫に成程。露がねにてもほしやと。みざつて勝手へはひるをよびかへし。兩人手前より一兩と投出せば。近比殊勝なお心ざし。永代裸佛の藥代の施主にお成なさるゝ事と。いたゞいて立て入ける。其後三木は中松やの高松に深くなれての上に。引かいて宿の花となして詠めくらしぬ。三鳥はかゝるよい事もせずして。むしやうと云物に成て。いつも有ものゝやうにつかひ捨。指引残らぬ揚屋へも。内證手うすくなれば。おのづから身にひげてきて。我方からゆかれぬ氣に成。止ば今なれ共。一日も色を見ずにはみられぬ性にて。やうゝ一角才覺して。しりはらやまずに散茶にかゝり。其まゝ昔の氣を出して。薄雲勝山など自由せし盛はなし。耳に立て散茶女郎むつとせしをおししづめて。床に入つて此返報を以て參るべしと。帯の結目かたくして。あちら枕にひんとした寢姿。近比あつた物でない。御身に近より耳のほとりへ口をよすれば。酒臭いと夜着の襟へ顔をさしこむ。さりとほ憎き仕方。昔はれきゝの太夫格子にも。こんな事はさせざりしに。無念千萬とは思ひながら。世につれて壹歩の金がをしく。ふられては先ざし當つての損と。随分律義に息づかひやめて。お手が外へ出ましたといはれば。それ程の事は覺がござるといふ。男今は勘忍袋の口をあけて。是はれきゝの太夫達のなさるゝ。ふるとやらいふ事てござるか。拙者初心者でござれば。さんちやとはふらぬといふ心なりと。いへる名によりて。ふられぬがてんで參つたが。散茶のふるるゝは。扱はいるまゝと御出なさるゝかといへば。私か名をうす雪と申せば振ますと云。近比つめたい心意氣。是は北國筋の大雪山よりは。強い振やう。ちと襦に乗つておして見ませうと。いひしなれつき難なく首尾して立かへり。さりとほ散茶にさへふるるゝ身に成くだりて。無用の色ぐるひと。我とよくゝ得道して。もはや今日切と心誓文立しが。明れば又身をつかみ立るやうに思はれて。人目も

恥ず通ひけるが。後には何に成て。いづくへ行しか果をしらず。されば昔の薄雲。花鳥など打よりて。かしこさすぐれたる。つとめ物語のついでに。心の眞の異見をきくに。それはさもこそ有べけれ。惣じて買手俄につかひさかる時はやがて燈火のきゆる戀の闇路とは。しれてかなしく。其人いとしく。御宿の不首尾を意見して。少しは遠ざかるやうにしかけぬるは。神ぞ一々微塵偽りのなき所なれ共。男はあしく聞なし。猶しきつて毎日出。事によつて外の女郎に替りて。こなたへ見せる全盛に。せいでもくるしからぬ大さわざに。程なく身體たゞみければ。是斗によい程といふ程はなし。とかくとらるゝ程は。ばた／＼と取て仕廻。まだしき時に分別さすれば。指替の一腰も。茶入の一つものころ物ぞかし。べん／＼とやりくりする内に。一色々々皆になし。手と身とに成てをさまりは。お札をさめの下組。願人の袋持坊主になれるより外はなし。よく心得て深入せぬが粹なりと。ずるぶん戀に取つめられし男のかたりし。

第四 月に彈る琴浦が三味

酒につよき事間鍋の綱

女郎は昔と替り一座かしこく酒事各別味やつて。うそも男のすけるやうに云て。慰に成事今ぞかし。され共勤日の外。物前の無心。我も人もいそがはしき中へ。迷惑ながら商賣のさし引は捨置。色町のつけとどけ。身の一大事とおぼえぬ。是一つにかぎらず。此道に足を踏込て深入をする人なみぞかし。爰に靴町に請酒商賣する者ありけり。其身戸なれば。餘所へ買にやらず。年中呑だけをのびにして。朝暮酒のかすかなる世渡。此酒家の主が。昔をしれる人のいへるは。あれは生國宇津の宮にて。彌三郎といへる大盡の果なり。今こそあれなれ。以前はるんつう過分に。もつてひらいて花をやつたる男。其時は三浦の琴浦に。うらなくちぎり。互に命切と申かはして。かよはぬ日はなし。一日あはねば。女郎も思ひにしづみ。晝夜に十二の一時文。もしや御心地にてもあしきやと。外の勤も中々心にそま

ず。名のたつほどに思ひあひしが。かゝるふかき中も。かはればかはる川の瀬と。浮氣男の心は一時のうちをしらず。比は七月始つた。そろ／＼秋風の吹て來る時。ある女郎にほれかゝつて。ひそかに宿をたのみ。文していろ／＼くどけ共。御心ざしはうれしけれ共。ことうらさまの思召も迷惑。此戀さらりと御やめ下さるべきとの返事。是は一通り女郎の作法なれば。かうあるはずとは元來合點してほれ出したものなれば。今更やめる男でない。此戀首尾能取持なば。どなたでも小判の山を築て。急度御禮申事ぢやと。宿の夫婦若いもの共末社迄申渡して深くたのめば。末社の中に。ちかのとといへる。三寸局の年の明しを女房に持て。女郎の心いきを知ら顔する。鹽釜の長兵衛といふ男。彌三大盡のほられし女郎に。きりや市左衛門方にて一谷のお客の御供せし時一座いたし。大酒の上にて。よき首尾を見合。ひそかに彌三郎がおもはくを語るに。私もあなたならばと。とびたつ計思ひますれど。いかにしても琴浦さまの手前あればと。大和心になつて。大きにやはらいだる口上。扱はなり寄たるあきなひと。上手をつくして申は。近比夫は初心の至り。町屋の實事にさへ。勝手づくとして。兄の死あとへ弟を入るゝもある習なり。ましてや。色里の情を商賣に。なさるゝ御身として。外のおもはく思召すは。前方なるせんさく。戀は仕勝と申せば。しやれてこなたから惚れてゐた男。今日は名譽の出合。今からかはゆがらざ。つめるぞと。しらけて御あひなされなば。さりとは名譽の女郎と。情知の名をとりたまひ。今の間に。すさまじき御全盛見るやうなり。ことに此事宿の夫婦をはじめ。我々共迄ふかく隠密にいたせば。中々うろたへた神も御ぞんじない事と。口のすうなるほど味をやつていひまはせば。然らば外へ沙汰さへなされぬ事ならば。ひそかに彌三さまにあうて進じません。此心底御つたへ頼むとあれば。長兵衛悦び其座を。そこ／＼につとめ。其日の御客においとま申。すぐに彌三郎方へ参りて。旦那小判の山をおつきなされ。仕おほふせて参りましたと。茨木が腕を取りしほどの勢も。酒機嫌にて。かん鍋の綱といふつはものと。氣おひかゝつて申せば。大盡をりふし末社をあつめて。御町ばなして。無色の酒ものめるものちやと。よつほどのきげんなりし

が。長兵衛が只今の口上。何共其意を得られず。いかにしても。思うたよりなびき様早速なれば。あはぬ内には小判の山も筑れず。そのよい返事のあたゝまりのさめぬうちに。違ひなくいつ比あうてくれらるべきとの。太夫自筆のたしかな手形とつて参れ。さうないうちは汝が詞たのまれずと。忠が不忠になつて。何とやら。つもるやうに思入れ。申出してもとねにしかね。爰は一生の大事の場と。心をしづめ成程太夫さまに。御好の通かゝせさせて参りません。其替りには。又旦那からも。お手形取て参たらば。小判何ほど下さるべきと御墨付を頂戴仕たいと申。是はよい念の入所。いかにも書てつかはすべし。十日より内にあはうとならば金子五十兩取すべし。廿日の内ならば卅兩。來月へかゝらば拾兩。それより延なば。此手形反古たるべしと。早速書てたびければ。長兵衛は手形給りて。御前を立て出けるが。立歸りかたぐは。我心を陸奥の會津の蠟にあらね共。ながれを立る女郎に。好の手形を書せずば。二度太靴持せぬ法もあれと。荒言はいて宿にかへり。先鼻に酒のかん申付。機嫌よくして。人の仕合は何時なほらうもしれぬものぢや。物前とさへいへば出違。そなたに斗苦勞さするに。今度はずちに居て。當前の事はおいて。古借錢まで拂て。久ぶりにて掛乞の笑顔を見すべし。まづおつとつて。旦那から五十兩の御合力違ひのない所は。如件と手形を出して戴かせ。夫婦盆仕舞。おちついたる心地にて。去年の鯖は小かつた。蓮の食の米は。白きにあきがない。今年餅米貳石斗買て。大屋殿の確かつて。前方から踏せおくべしと。萬大名氣になつて悦ぶ所へ。家主の若い者。案内なしに内入て。長兵衛殿ふしぎに内にござる。いつ参りてもお留守とあつて。大分宿賃のたゝまりの算用をなされぬ。それゆゑ旦那腹立いたし。今日は右宿代をのこらず皆済なざるゝか。さなくば今日の中に。家を明て何方へも御出なさるゝか。二つ一つの埒をつけに参つた。後程と申様な手のびなせんぎでござらぬ。お返事がわるうござれば。只今諸道具つまみ出し。請人方へはこぼせ申と。にがりきつて申せば。徳右衛門殿それほどきびしうおつしやれずば。今時の彌借りはさつぱりとはすましますまい。成程悪うは承はらぬ。久々延引いたした代に。滯たは申に及ばず。

先當年中の宿代は進でおきませう。拙者もちと此比はよい仕合をいたし。歩にもまはる屋敷もござらば。求めもいたさうかと。存程の身になつてござれば。今迄の如在屋の長兵衛ちやとは思召して下されな。後程それへかるめなしに。宿代持参いたすべしといへば。徳右衛門耳に入ず。こなたの後程と紺屋の明後日とは。かんざぶ彌平で。うけつけないと。かぶりふつて申。さりとほそれほど迄に御見たてにあづかる所。ちか比心外に存ずれ共負たが定てござれば是非におよばぬ。我等僞り申さぬしは。先銀子もつて参る迄。是を代りに進置と。一腰を渡せば。徳右衛門とくとあらため。しからば必違なう。追付銀子。御持参有べし。先それまでは此脇指我等預りおき申と。暇乞して歸りぬ。とかくさしたあつて忙しき方なれば。やつて仕舞て一腰を取戻し。其後三野へゆくべしと。思案極めて材木町の本曾屋の清平といふ。日比目をかけらるゝ大盡。度々御無心申掛て。あいそをつかして此比は。よびにも下されぬ共。分知にしてたのもしき御方と。かの大盡の許へゆき。大盡に御めにかゝり。件の手形を取出し彌三郎の戀の次第女郎の返事の様子具に語り。随分悪い仕合にして。來月迄の中には。廿兩もらひますには極つたるお手形。是を質に留おかれ。來月迄金五兩御貸となげきを申。清平手形をひらき見て。尤是に僞りはあるまじ。しかしその女郎。體に彌三にあはうといふに證據なければ。何共心もとなき證文なり。五兩取替てやつた上に。もし其女郎。彌三にあはずば。勿論此書物反古となつて。現金出して損するものは我等壹人なり。こんな事に金を借うよりは。請のない半季居の奉公人に。壹年分の先金借たが。まそつと慥さうな物ぢやと。いへば。成程女郎もあはるゝ筈に。今日かたう口をかため参りましたれ共。旦那念じやで。いよゝあはうとある。一札とつて参たらば。逢日の極り次第に。此通りの金子くれらるべき證文にて。只今是よりすぐに。此女郎に一札書せに参ります。此一札さへ旦那へとつて進ずれば。私は金を早速貰ひます契約。跡はあはれうともあはれまますまい共。それからは拙者かまひませぬと申。しからば此方より手代を壹人汝に付て。三谷につかはし。其女郎の口もきかし。一札も見せての上に。いかにも借てとらすべしと

あれば。是忝き御事やと悦びいさみ。木曾屋の手代と同道し吉原に行は。はや暮に及びて。桐屋のお客もお歸りなされ。太夫さまも身仕舞にお宿へござつたが。今晚は鎌倉やへ御出のよし。市左衛門方の男が申。扱はと鎌倉や方に。先お内儀に對面し。かの女郎の事を聞ば。今方御出にて座敷にござりますとの事。女郎のおためによい事申に。参つた。ちよと是迄よびまして下されといへば。心得たとして早速通ずれば。自由に立ふりして勝手に入て。是は鹽釜殿なんとしてござんしたと立ながらの挨拶。先下にござりませ。晝おほせられました。深切の段々彌三さまへ温りのさめぬ内に。すぐに持て参つてきかしましたれば。お悦び共満足共。神八幡餘念はござりませなんだ。しかし全盛の御身なれば。ふと其内に引かいてのける客が。あるまいものでなし。然らばこがれ死に死なうもれず。とかく情の上からなれば。とても事の急なる御げんを頼み奉るとの御返事がてら御使に参りましたと。少しでも早きがねうちのある約束なれば。太靴を早めて申かくる。女郎きよつとしたる顔つきにて。長兵衛殿はつがもない事いはんす。思ても見さんせ。彌三さまは琴浦さまとふかい事は。誰しらぬ者はなし。其お方にそもやそも。どうあはるゝ物でござる。こなたも太靴もつて。此里へ年中はいりこうで居るやうにないおろかな事に使用する人ぢや。それも琴浦さまと口舌でもなされて。手がきれての上に。こなたから琴浦さまへ。退しやりやうの段々聞に遣はし。付届すのでの上には。又あふもならひなれど。是共に取持て。お馴染と中なほし元へもどすが。女郎の作法でござる。そんな事も辨へずに。ようもく太靴はなざるゝ。厚皮など目をすゑて。腹を立らるゝ。是は以ての外の相違。今日晝こなたさまには。沙汰さへなされずばひそかにあうて進せうと。彌三さまへおことづけを。大誓文でおつしやつた。扱は我等をおなぶりなされたか。事によつては女を相手に。せまい物でもござらぬと。大きにせいて申せば。さりとて笑止や。先太靴持は何が役目ぞ。素お客。我儘大盡などの無理な事をいはんすか。又は色里の諸分をしらずに。なじみの女郎ありながら。此やうな仇ほれなど遊ばすを。ひそかにとめまし。其大盡の各の出ぬやうにさつしやるが。第一の役目で

ないか。既に大盡の仕方がわるければ。歴々の大靴衆がつきそひながら。不調法とこなた方外叱らぬぞや。其上今日のお客は此方もついでござつて。しつてみさしやるとほり。一谷の蛇之助さまというて。朝から翌夜明迄のみつづけに。さんしてもきよろりとしてござる大上戸。其お相手になつて大分酒にようて。うつて居た私をとらへて。ぎゝやかしやるとは思うたが。何いはんしたやら。何いうたやら。神ぞくおほえませぬ。かき暖簾かけてるさんす。米さままたちさへ。それくにさしやはいくり給ふ。まして私等が身の上の事。酸も甘もしつてゐるこなたの。たとへ酒興にいへばとて。誠にさんすが聞えませぬ。はて。かういふが無理ぢやと思つて。腹がたゞば公事に成共みやに成共。心次第になされ。エ、素人らしいといひ捨て。座敷へ立てゆかるれば。長兵衛あきれて今は悔ても埒のあかぬ手形を取出し。ひろげたりたゝんだりして。何共不首尾千萬。木曾屋の手代見かねて。こんな所に長居は無益とて。ぐんなりとなつてゐる長兵衛を引立。門口へ出れば。遣手のかめが来るに行あふ。是は長兵衛さま色がわるい。お内儀さまへ氣に入やうが過る物であらうと。わらへば。そんなよい機嫌でない。はら立さうな顔をかしゃ。けふ晝桐屋にまそつと。おつとめなさるゝと。見事な。目にあはしやる所を。とかく早きお歸りのこり多し。私共は蛇の助さまより。いびつなりな物貰ひましたとよい事申てはいる。さて。是程埒のあかぬ事に身をつかうて。現金にとれる鳥をにがしたと。中の町あたりでは腰がぬけたと。こけさうなるをかへ。大門過て籠を才覺し。夜来て。終に今時分かへつた例が。ないに扱と。涙を流して宿に歸り。いよく證文役にたゝぬにきはまり。脇指一腰家主へ渡しただけの損となつて。家を立退金杉邊に。何をしておくるやらかすかなくらし。その後琴浦も彌三が心を見かぎり。女郎の方から隙入申てあはざりしが。靈岸嶋の七二とやらに。請られ奥様となつて。三年つゞけて。年子に男子を三人迄まうけ。世に不足なき暮。とかく人の身の上はしれぬものなり。彌三郎はいよくむしやうといふ物になつて。はじめの勝山に戀を仕替て。跡先の思案なしに。いかなく金子壹兩も残ぬ程につかひ捨。古郷の宇津の宮も鼻持もならぬほど。

悪い首尾にて。よせつけず。せひに及ぬ仕合。昔の悪所友達富田の酒大盡の。御影を請ての酒商賣。是もまうけよりは。大分呑て果。ふだん狸々のごとく酔て暮し。夜晝なしに。ねて花をやる。糺町に。今あの姿。是もましなるべし。

第五 月に薄雲かゝる情

銀際になつて酔のさめる十人の殿原

世に心もとなき物は鰯の腸くふと風吹に籠の中で煙草のむと密男の手柄咄しとなるべし。いはねば腹ふくるよとはいへど。たゞ何事もいはぬにこした事はなし。爰に政都とて。唐人流の按摩とつたり。三味引たりして。大盡といふ大鳥の羽がいの下にて育つ座頭ありしが。旦那衆につれられて大方吉原に入りこうて。随分腹たてぬ坊ぢやと。女郎共にかはゆがられ。毎日食悦いたしぬ。ある女郎少し頼むとて。肩を脱かけて。美しき所を按らせけるに。政都は後より思はず心動きて。○○○○○○○○○○。是○○○の如し。女郎ふびんをかけられ。よく思へばこそと。人の氣のつかぬ時。ちつと○○○○○○○○。外へ語るなと口を堅めけるに。宿に歸りてはや此事をはなせば。男ひでりはあるまじ。おのれにそんなよい目をさする物か。偽り坊主がいひなしと。其後は大盡共いひ合て慰所へつれてゆかざりければ。無用の手柄咄しに。其身の遊山をかくのみならず。日待にさへ呼れぬほどになつて果けり。大盡の御機嫌とつて世を渡る者の心得わるき故ぞかし。太鞍の智恵だてすると。色宿の亭主が。客に大へいなとは。皆うつけの沙汰にして。是をよいとは申されず。とかく色の道にかゝつて。身をすぐるの人。利發を止て。たらぬ顔して大盡にまかれるが上手なり。都の色茶屋の亭主に。随分智恵自慢して。客御出といへば花車おしのけて罷出。是は旦那よい衣裳付てござります。然し素見る茶は。今時世間にはやり過て。我等がやうな粹中間の目にしみます。とかくいつ見ても。山の端染に。なゝこ織の羽織でなければ本大盡とはいはれませぬ。ちと物好を替てごらうじませと。客の

お蔭ですぐる奴が。来る程の大盡を。おしこなして。是は三四さまには此比御出を見かけませなんだ。盆前が近いと思召しての身用心と存る。そんなちひさい心では。磯せりも御無用／＼と。まだ座敷へもあがらぬ先に赤面させける。世間はひろし。こんな所に。何が見込あつて。結句外よりははやりぬと。此茶屋で打こまれしもの。江戸に来ての物語。聞ば爰元にもそれに毛頭違ぬ末社あり。あく迄粹だてをいたし。大盡高うのぼれば。旦那も餘程よい所あれど。折々あの潜上でくると。しかも大勢の付合の中で。たかくと申。女郎勝手ばいりをしげくして出れば。節々勝手への御見舞。酢かけの鮓に湯づけ食は。必あたる物でござりますと。よういふ顔にて太鞍の口から。ばちのあつたる事と。皆人にくみてつれざりしが。今見れば所々の開帳場へ出て。古編笠着て。大盡粹に成やうの相傳書とて。何やら封たる物を賣て口を過ける。何をか書て置けるやと。とゝのへみれば。粹には金ばかりつかうてなるものにあらず。はじめから事知の末社をつれて。諸事はが粹なるしこなしを見ならひ。それに氣をつくれれば。つひ粹に成事なり。騏の尾に取つく蠅は。一日に千里をゆくがごとし。むしろやうに金をまきちらし。影でわらはれ給ふな給ふなと。扱もおのれが太鞍持た時。智恵だてをいたして。夫ががいになつて。今あのさまになりても。まだかしこだての止めこそ笑止なれ。何ほど末社が粹なればとて。太鞍の座配を。大盡が見習うて何の役に立べき。太鞍の粹と申は。無欲な顔して大盡に思ひつかれ。あなたが心の付様に仕掛るが粹なり。こんな事大盡が知つて。其心になつてよいものか。まだ粹な女郎にあふたならば。馴てから酒事のおもしろい。はずみを。見おぼえ座配も能。氣もこなれて自然と粹に成事もあるべし。しかし必竟此道の。極意は只金銀なり。かならず粹になつて色道においては。よく鍛錬したる男。えては揚屋の門を。夜も編笠着て。通るやうなが多きなり。然ればいづれもあんまり。粹になる事をよい事ぢやと思召すな。粹に成と。金が皆になるとが一時ぢやと大笑ひいたせば。其中に大商人の心の廣き。武藏野の色里。たてよこ文字やり手のはつが。私金の取手おき所迄おぼえたる男のいへるは。粹にもせよ野暮にもせよ。とかく銀

存もよらず。いつぞやふせたやにて酔にうかれて。女郎のふところへ手を入。左の頬先へ脂をぬられし男なり。其時の御情を報じ奉らんと存て。涙をながして申上る。大盡此心をかんじ。手前よき首尾の時分。かの女郎を請て下さるべきとの御企。近比忝なき御事ながら。其女郎いかにしても。其夜のしなし情あるとは申されず。勿論はれてはをりませれど。下心いやと申す。それは粹なる汝には不了簡なるべし。我等ふびんがる内。又汝がいふに任て。うしろ暗い事有ば。今以ていやといふ管也。其時は我を大切ににおもふ心から。汝が心任にならぬ所。婦妻にしては。宿を出歩行太靴の女房に。打てつけた事。留主の中に手むさい事があるまじ。ひらに持てとあれば。庄助重ねて申は。其夜の事大盡手前を思召て。拙者心のごとくなり給はぬ所はよし。然しそれもいやならばいやにて。我心ひとつにてをさめおかるゝ管なるを。ほれたといふ男にしるしをつけて。旦那の耳に入らるゝ心根。いかにしてもむごし。情しらぬ大盡なれば。即座に隙下され。重ねてつれられぬには。究た事。思へばこそほれもいたせ。それをから目を見せんとは戀しらずなり。必竟拙者大盡よりまさつたる襟の厚き者にあらば。私銀の才覚男にと思召て。其夜も情あるべきが。いうても太靴の身なれば。打てもたゝいても。物にならぬといふ所を合點して。大盡への注進だて。先は欲のふかい心から也と。いやに極めて申せば。龜井も尤の事に思うて。夫よりして女郎替て。今の小倉にあひそめ。かゝる太夫に今迄あはずに過ゆきし。月日をしみしも。斷ぞかし。とかく千人の中にすぐれし所あればこそ。多くの數女の中より太夫職とは成給ふ也。色有て情あつて。面白い事有て。〇〇に誠有てよい事揃うて。いつ迄もかはらぬ御心は。松の位に有と。買おぼえし人の申ぬ。

傾城色三味線 江戸之巻終

傾城色三味線 鄙之巻

伏見鐘木町女郎の名よせ

- | | | | | | |
|---------|---------|-------|-----------|----------|-------|
| ▲一もんじ屋内 | 一花さき | 一しら藤 | 一高はし | 一ゑんしう | 一とみなが |
| 一夕ぎり | 一今さか | 一よしの | 一たかま | 一ありはら | |
| ▲八わたや内 | 一申川 | 一今川 | ▲扇屋内 | 一とさ | 一うきふね |
| 一うきはし | 一一大さき | 一かほる | 一みかさ | 一かつら | |
| ▲ます屋内 | 一うす雲 | 一わかな | ▲とんだや内 | 一せきのと | |
| 一やへぎり | 一つまぎ | 一たかを | ▲河内屋内 | 一あさき | 一かよひ路 |
| 一とやま | 一一大はし | 一まつゑ | 一だいそ | 一高さき | 一おほゑ |
| ▲かめ屋内 | 一花ぎく | 一しづか | 一さわなみ | 一惣合 四十九人 | |
| 一井づゝ | 一一大ぎし | 一おうしう | 一あげ屋 | あかしや伊右衛門 | |
| 一わしう | ▲たちばな屋内 | 一はつね | 一みすや藤兵衛 | みすや藤兵衛 | |
| 一かせん | 一ときわ | | 一やわた屋傳右衛門 | やわた屋傳右衛門 | |
| | | | 一江戸屋吉兵衛 | 江戸屋吉兵衛 | |
| | | | 一さゝ屋長八 | さゝ屋長八 | |

一右鹿戀女郎何れも十八奴 太夫天神はなし 半夜は九奴 はやり女郎の分は半夜に出ず 端女郎は壹奴

大津柴屋町女郎の名よせ

- ▲井筒屋きうい内 一かこい うきはし
- ▲一かこい やちよ 一同うぢはし 一同 ゑにし
- ▲一半夜 長はし 一半 こまの丞 一半 とよはし
- 一同いちはし 一同 うきふね 一同 とよ川 おうしう
- ▲井づゝ屋藤九郎内 一かこい 今りしやう
- ▲一かこい 玉の井 一同 あげまき 一同 もろこし
- 一同 大ぎし 一同 あげぼの 一同 半太夫
- 一同 ほのか 一同 りしやう 一同 大はし
- ▲一半夜 しらふぢ 一半 小ふぢ 一半 つまよ いちかわ
- ▲つぼ屋勘七内
- ▲一かこい ゑちご 一同 ちくご 一同 夕ぎり
- 一同 きよはし 一同 かほる 一同 あをやぎ
- 一同 とのも 一同 なには 一同 きりしま
- ▲一半夜 さくらぎ 一半 大いそ 一半 みちしば
- ▲一半夜 せんじゆ 一同 いまぎ 一同 はりま
- ▲かぎや又右衛門内 一半夜 くらすけ
- ▲竹屋善四良内 一半夜 みうう
- ▲ひしや藤兵衛内 一半夜 くめ川
- 鹿戀女郎合 廿八人 半夜女郎合 五十人
- 一あげや 井筒屋半右衛門
- 一同 わかさや源右衛門
- 一同 鳥屋四郎兵衛
- 一同 きゝやうや茂兵衛
- 一同 つぼや作兵衛
- 一同 ひしや孫兵衛
- 一同 かぎや利兵衛
- 一同 竹屋善四郎
- 一同 扇屋十郎兵衛
- 一同 まるや茂右衛門
- 一かこい女郎 拾八奴
- 一半夜女郎 拾八奴
- 右之外はし女郎あまた有 壹奴あり 五分のあり

- 一同 花さき 一同 わかまつ
- ▲さわや源六内
- ▲一かこい もなか 一同 しづか 一同 まつかぜ
- ▲一半夜 たか尾 一半 わしう 一半 あかし
- 一同 たむら 一同 ちとせ 一同 なには ともへ
- ▲井筒屋半左衛門内
- ▲一かこい やまと 一同 きんご
- ▲一半夜 かせん 一半 かづらき 一半 おぐら
- 一同 いくの 一同 三川 一同 もんご
- ▲つぼや作兵衛内 一半夜 高さき
- ▲一半夜 おとわ 一同 いよ 一同 わこく
- ▲かしわやゑいこ内
- ▲一半夜 さもん 一同 みなと 一同 やへがき
- ▲わかさや源右衛門内
- ▲一半夜 小太夫 一同 こゝのへ 一同 玉ざわ
- ▲とりや四郎兵衛内 一半夜 たまの助
- ▲一半夜 やつはし 一同 のせ 一同 高はし
- ▲さわや六右衛門内 一半夜 今川
- 南都きつぢ女郎の名よせ
- ▲中屋三郎兵衛内
- 一さごろも 一さほやま 一かせん
- 一いづみ 一もんど 一山さき
- 一わか山 一きぬがへ
- ▲たちばなや九兵衛内
- 一花山 一さんご 一れん山
- 一こゝのへ 一やへぎく
- ▲わたぼうしや吉兵衛内 一若むらさき
- 一きよはら 一玉ざり 一夕ぎり
- ▲越前屋權之丞 一さをしげ
- ▲大津屋清左衛門内
- 一もりおか
- ▲かんざきや長兵衛内 一みかさ
- 一の高矢 一のせ 一初ぐさ
- ▲山がたや六兵衛内

一かほる 一みぎわ
 一大夜 一玉ざわ
 一國山 一高田
 ▲紙屋久右衛門内 一かしわぎ
 一はな井
 ▲かぎや嘉兵衛内 一みよしの
 一さほ川 一ゑぐち
 ▲まるや平助内 一うてな 一うこん
 一しきぶ 一よしの 一つしま
 一たじま 一おか山
 ▲中山平兵衛内 一をのしま 一おの川
 一もろこし 一せやま
 一初むらさき 一すみのへ 一玉の井
 ▲池田屋忠兵衛内 一おぐら 一のしほ
 一さがみ 一玉の戸
 一おぐら 一玉の戸
 一太はし

一あさぎり
 ▲京屋庄左衛門内 一きり山 一よしう
 ▲平のや後家内 一たき川
 一とめ川
 惣合六十三人
 一あげや 山がたや太兵衛
 一 平のや四郎兵衛
 一 かわちや平七
 一 越前や市郎兵衛
 一 いづみや善兵衛
 一 たわらや五郎兵衛
 一 山城屋庄五郎
 一 山がたや新六
 一 天満屋次郎兵衛
 一 なにわや彦四郎
 一 さくらや五兵衛
 一 ふしみや勘兵衛
 一 大坂屋太郎兵衛

一同 かわち屋
 一同 井筒屋助右衛門
 一合十五間
 一女郎一夜 十貳匁 もん日は 十八匁なり
 一みせ女郎百人斗有 壹度 壹匁づゝ
 あげやへよべ九匁 もん日は是も十六匁也
 堺ちもり女郎の名よせ
 ▲くるわ木屋内
 一太夫くれない 壹人有
 ▲一大天神 八ゑざわ 一大天神 とう山
 ▲一小天神 れんざん 一小天神 むさしの 一小天神 のかぞ
 一同 さほ山 一同 唐はし 一同 澤むら
 一同 とのも 一同 いづゝ 一同 とみおか
 一同 小ぐるま ▲かこい こまの助
 ▲南帯屋内
 ▲一大天神 かづさ 一小天神 花むらさき
 ▲一小天神 ゑにし 一小天神 若むらさき

一かこい さど
 ▲大和屋内
 ▲一小天神 かうざん 一同 くめの助 一同 しなの
 ▲同 ゐんきよ内
 ▲一大天神 さゝ山 ▲一小天神 うち山
 一小天神 かうざん ▲かこい さくらみ
 ▲北帯屋内 一大天神 小太夫
 ▲小天神 ゑもん 一小天神 玉ぎし 一小天神 竹川
 一同 わかば 一同 花月 一同 こむらさき
 ▲近江屋内
 一小天神 ときは 一小天神 小ぎん
 ▲一小天神 かつやま 一同 さわの 一同 きくのい
 一同 やへぎく 一同 しばぎく 一同 山しろ
 一同 やまと 一同 わかさ 一同 わかの
 ▲河内屋内
 一小天神 しなの 一小天神 おぐるま
 ▲一小天神 とみ山 一同 もしほ 一同 きんご
 ▲一かこい いろは 一かこい さわの

の鐘打て。ふたゝび足を踏こまず。氣さんじに思ひ切り。是におとらぬ大盡風俗しこなし二三に似たとて。二代の二三と名に高く。手前ずるふん體なる身體。此里に太夫などあらば。松にもかゝる氣ざし。藤の森に住所をかまへ。表向は蘆葦にして。百姓の家らしく見せかけ。内の美なる事。つどいふにおよばず。銀にあかして。工手間のかかりし物すきの大座敷。外から見れば一日がりにして。爰てあそびなば。心ものびてよかるべしと。浦山敷おもへど。我物になつて不斷みれば。鼻につくがごとく。手前に少しも心とめず。間近なれば朝暮十町目に通ひて。のみかけひつかけ。樂しみ此里にありと。心のまゝの榮花。いづれあらばせいでは。さながら心も若やぎて。千歳といふ女郎に。そもく水上の日よりあひ初。今猶ふかくいひかはして。あさからぬ中となつて女郎も此人ならてはと。物になる客を外になして。文のやりくりさへせざれば。いつとなくあふ人たえて。物日のさびしきを。皆二三請取。いたり穿鑿になつて。一人にかたづき。千歳は少し浮名の立に。心のつよき女郎にて。世間なんとも思はず。薺紙髪切。爪指入ぼくろ。身を割とは是なるべし。此上は命を捨るの外はなし。段々にくからぬ心ざし。風俗しやれごしらへ。其年も勤さかり。女はさもなく。後つきにうまき所あつて。○に玉の助もおよばぬ。ひ曲自然とそなはり。逢人毎に戀をのこせり。有時二三絶て二月あまりもゆかさざりければ。千歳は心ならず。一日に千度文してとひ參らすれど。詞の返事さへなくて。あはぬ思ひにしづみ。大方は泪でくらし。勤も心にそまぬ所へ。二三が連の夜深法師といふ。深草邊の樂人。難波の人にさそはれ。大坂の色町見物にゆく門出に。此里へ立寄を。ちとせ早くも見つけ。格子より聲かけて呼入。二三が見えぬ様子をとへば。此法師もすれ者にて。少せかして慰まんと。けうとい顔して。扱は貴様は二三が此比の事御存ないか。近比それは遅まき也。今は嶋原がよひに隙なく。よしうを手に入。五條の古手大盡と張あふ最中。爰の事などいかなく。おもひ出す事にあらず。あんなぶ心中ものに心をつくさるゝは。大きな御損。さらりと氣を替て。當分物になる客の心に入たまへと。説らう薬を焼て。散も灰もつかぬやうに。にべなしにいひ

立にして大坂へ下りぬ。ちとせはきくと胸をいたため。今などかうした思ひをせうとは。ゆめく思はざりしに。さりとては聞えぬ御仕形。とかくこれまでと心中かためて。最期の一句と文したゝめに。御返事次第に後とはいはぬ心底。古郷の親達の方へも。此世の別れの筆を残し。萬死覺悟を極め。二三が返事を待時。まだ秋ながら素紙子を着て。深編笠に竹杖。たよりなき風情して門口に立しを。無用の非人の色好。往來の邪魔ちや。あちへゆきやと。遣手がはしたなく申せば。此男出て行を。千歳ちらと見て。今のは慥に二三さまなりと。人をしてよぶ迄もなく。徒跣にて表に走り出。紙子の袖にすがり顔を見て。何かなしに泣出し。爰は人目もあれば。中戸の腰かけ迄ともなひ。笠をとらし。先此姿はととへば。二三恥をすて顔あげ。今爰に来るは。死ぬるほど苦しけれど。今朝油屋より届し文を見るに。我等身の上あしざまに。何者かそなたの耳に入レ。事なき恨の。返事もあらずば。今宵もしれぬ剃刀わざとの覺悟。極たる文體に驚。そなたの命のほど心もとなく。あさましき姿をはぢず。斷に斗參つた。扱我事は假初にせまじき夜あそびに。身體のこらずうちこみ。手と身になつて。今日はくらせ共。明日過る便なき身となれば。俄に思ひ立て。越後の村上に母方の伯父あれば。是を頼みに罷下るなり。然ば日比互に申せし事も。勤のさほりにもなればなり。今よりは我事死うせしものと思ひて忘れ給へ。更に恨に思はずと。紙子の糊のとける程泪をながし語れば。さてくかゝる事とは知らずして恨み申せし段々御ゆるし給はるべし。さうした事にて中絶申は。世にあるならひ。日比の御心には似ずして。氣のよわき御事。縦身を捨命をかけて。あひませいではおかぬ女也。浮世のならひしづむ瀬あればうかむ瀬有。御身上のつぶれし事さのみ御なげき有まじ。只御身の恙なきこそうれしけれ。とかく命は物種とさまんいさめて。宿へかくとしらざるれば。もとより馴染の宿と申。殊更下々迄もお影を忘れず。是はと一家驚先二三さま四疊敷の靜なる方へ入レまし。様々のもてなし。さすが京近き所なれば。下々迄の心和らかに情有心づかひ。千歳身にしては數々嬉しく。先お盃と心よく吞かはし。紙子ぬがしまして。肌なれし下着をきせまし。

三味取寄て。いつよりは調子高く歌うて。昔になしていさめる心。魂にこたへて嬉しく。扱も／＼今日の首尾。以前に替らぬ志。身に餘りて満足致した。此上は妻女にしても偽りなき心底頼もし。誠は其心根を見て引ぬき。一生宿の詠め物にせんため。身をやつして来れりと。一年の所を數百兩に替て請出し。宿にも満足致す程悦ぶ物をとらし。萬事首尾よく仕舞て。随分世を樂自慢して。夫婦よつて毎日の酒事。命を延る千年も。過れば毒に極まつて。夜晝の○に却て命をぢぢめ二三は終に此世をさりて。千歳がなげき。即座に髮切。むかしの姿はなくて。今はすみ染におこなひすまして。今そかりけり。

第二 戀の焼付柴屋町の門立

見知り越のわる口。いひがち高名ざやとがめ

東山は青葉茂りて。梅も櫻もいつしか根にかへり。番の風も吹をさまりて。樗は今を盛に千團子にぎはひ。取分子持の鼻共がいのる神とて。三井寺に綿ぬきの袷見せかけ。都よりの詣車にせきあひ。是も替て面白しと。三條の西に伊三といへる男。お出入の米屋吉六とて。大津にしろるべ有者とつれて。大橋より駕籠にのり。札の辻にておろさし。是より三井寺へはあゆまずして。先柴屋町に立寄。南の門より入れば。京よりわづか三里のちがひで。端女郎の風俗各別替りて。きる物しだらくに帯ゆるくし。白粉へげるほど厚く塗て。よしあし共に三味線をにぎり。すこし顔をそむけて。何やら一ふし宛うなる。立寄人を見れば。いづれもいかつらしき男。大脇差さすも有。又ふところ鼻捻かくし。かりそめの事にも詞とがめして。情らしき事はなくて。喧嘩がまへもむつかし。戀も遠慮もむしやうやみに鐵炮はなつごとく。出るまゝの悪口。花鳥さまかき餅が好やら。お齒黒がはげて見ゆると。しかも近付さうなが。見知りごしにあだ口。さりとはやかましきも。うれしや比觀の私雨に四方へにけ散。いざ雨やどりがてらと。

揚屋に立寄。何かなしに座敷へとほり。哥仙小太夫など申君達をむかへて。都風の酒事の。あぢな所をのんで見せ。是から寝る段ぢや。兩人が○○○らせて。伊三は哥仙に哥枕してよい夢を見ての後。床の中へ盃銚子取寄。さしむかひに酒などのみかはし。随分女郎のうれしがる事いひつくして。又の御見と起別る。そも／＼此男美男にして。色にかしこく。一座面白くて。こゑ能哥うたうて。三味も小野川流をぬけて。其上に○○○○大分あつて。萬そろひ過てよいといふ上也。是にて女郎なづむまじき筈なし。先戀といひ欲と申。何ぞあらば女郎の方から。やつてなり共あふべき大盡。哥仙初會より深く此男に心をうつし。百石町の思はくを外になして。語りたるあけの日より。毎日から。返事だにせざうち過。今日こそ色に暇あり。いでや大津の遊女に逢て。此比つもし思ひの。算用濟してやるべしと。思ひ立。駕籠など申て男作る内に。昨日の酒氣に頭おもく。何とやら心すまます。それなりけりに枕引よせ。二日酔の息をぬくべしと。はりあげて時行哥をうたふに。天井に聲有て一能々と讚る。ふしぎさに林才といふ小坊主をめされ。己我歌ふ哥を。賤しき身として譽るは推參也と。焼煙管したかゝに頂き。罪なくてたゝかる。お煙管と眩くを。腰打と召るれば。是非なく畏てお腰をうつに。また何となくうたふに。先のごとく一能々と讚る。林才と驚き。まさしく今のは女の聲なりと申。次の間に女はぬかか吟味あれど。林才より又人といふものは。屏風の押繪より外になし。誠に雲の上人は。大和哥にて鬼婆々も哀と思はせ給ふ。我はまた一節の小哥にて。目に見ぬ女の聲を聞とちち笑ひ。其後すこしまどろみしに。いつぞや柴屋町にて假枕せし哥仙が。其時よりは少し面やせて。しをしをと泪ぐみ。我流を立初八年の日數経うち。揚錢に任す身なれば。貴賤のかぎりもなく逢見し中に。馴染を戀の種かたまりて懷妊せし程の男も。かいま見し君にくらべては。比觀の雪と龍宮の井戸ほどの遊ちがひ。いかなる御縁

にや。是ほどにも思ふものか。かく白地に申さば。只悪口の世の中。所がら柴屋町の焼手にて。と思召の程もはづかしながら。われ偽らぬ心底は。是にしたため置侍り。浮世のふしやうに今一度。誠の御見なりたし。さもなれば追付死にますといふ。それは短し命ありてこそその戀なれ。かならず短氣な心をもたれな。成程末かけてねんごろに語るべしといへば。近比うれしいお詞と。悦ぶ色見えて四足五足音して。姿は消えて。さらばといふ聲に夢さめ。あたりを見れば逢初し日より。今朝までの偽りならぬ思入を。一つ書にして。奥に諸神を誓うて。恐しき程誠をつくし。名書の下を血にそめて。哀成筆の跡をのこしぬ。かゝる思ひ入深女郎もあるものかと。其後は折ふしあうて。心を慰めける。世に女の執心と借錢乞ほどおそろしき物はなしと。因果經にもとかれたる由。物知れる出家の申されしも思ひあたれり。

第三 木辻鳴川に深入する色男

二千兩皆になして今口過に一文の傾城買

奈良の京春日の里に。諸分知るよしにて。かりそめながら心やすい色狂ひとでも。奢ばはかのゆく物ぞかし。京大坂のお上家な遊びもしらず。いきはりといふ事もなくて。面白からぬ酒に長じ。我儘いうて。ともかくにもねち上戸。百方が厨子といふ町に。若草屋の呑助とて。木辻鳴川に大事にかける箱入の大盡。此里の名取。秋篠といふ女郎と深くなつて。三年半に貳千兩の身體もみつぶし。住宅を賣て退時も。いかなく氣をしなさず。其儘昔里通ひせし衣裳にて。靜に町をねつて立退。あの氣でなければ。あのさまにもならぬ筈と。近所の親仁共指さしをして笑へば呑助見かへり。己が銀はつかふまいし。身が物ずきでする事を。無用の指さし。色遊びのおもしろいといふ事を。知す。一生黒米の打込茶を呑。所から奈良漬の香の物も。煩はねば喰ぬなりをして。鱧のざしみに。生諸白を呑うて来た男をそしるは推參なりと。少しも慥せず。手前よいつ時に引かきし。秋篠を供につれて。三條通に色里で付あひ。心やす

くなつての上。兄弟の約束せし。三笠屋の常といふ大盡。まさかの時は見捨しとの詞を頼みに落着きと安堵して。この方へ尋ゆけば。此男も算用なしの色狂ひに。身體くづれて分散となり。門口に負ふせ方より。厳しく番を付置折節なれば。あるじにあふ事もならぬ首尾にて。頼む木のもとに。雨もたまらぬ三笠屋の當手も違うて。ひとへに目くらの杖を失ふ如く。心は闇となりて。くらがり峠の麓に。我少の時。少の間里にゆきし。五郎作といふ百姓の方を思ひ付て。爰になげきをいうて。半年餘りすみしが。いかにしても居喰にはしがたく。一稼かせて見る氣ではあれど。何をせうにも元手なくて。いろく思案して見れ共。俄に鋤の荒働もならず。夫婦談合して。近郷の麥秋を心當に。柏の破れ三味線才覺しだして。秋篠にひかせ。其身はあそこ爰きりぬいて覺えし。文彌節の上りを語り。口過のために大和めぐりを致し。百姓の家々にて半分は偽を語れど。聞手が律義なれば。あらいたはしや。すてんどうじはても合點して。一つかみの麥になる事。天道人をころし給はぬとは。こんな事をいふべし。往來の人の其事となく笑へば。扱はきやつめは一節なる奴かと。随分覺えし所を語りなほせど。誰足とめて聞者もなく。耳梨山をすぎてかつらこの池といふ有り。故ある事にやと里人にとへば。むかし三人の男ありて。一人の女を思へり。其女の名を纏兒といひしが。三人のおもひづれも切なりければ。従ふべき方を思ひ煩ひ。此池に身をなげしより名とせりと語る。扱も其女素人かな。三人の男共に。随分物つかはして。どうやらなる様で。ならぬ仕掛してもがかし。かたひしに。身體かたづけてやれば。手薄奴から。そろくあいそつかして思ひきるものなり。戀も情もいにしへは律義にして。ようも只は叶へてやつた事ぢや。但シなりひら時代には。男が大せつて。女の方から物やつてあひし事か。あつばれそんな世にあうて死たしと。今日の身の上を案じはせて。何の役に立ぬ事を思へば。むかし全盛の春も過て。夏來にけれど多装束。汗にぬれて。日當りに背中ほすてふ。あまのかく山といふ邊に。れきくの隠家。おもてむきは萱軒にして。中戸より中のきれいさけつかうさ。めつたに奥ゆかしく。内をはるかにのぞけば。食燒女も里びずし

て。あまたそれくめしつかひ女紫のうしろ帯目にたち。是は天の岩戸のいか成大盡のかくれ給ふ屋敷ぞ。手力雄の神力あらば。あの奥の杉戸引ひらいて。取て置の女體の姿をがみたし。さぞ面白かるべし。爰はいけもせぬ上るり所にあらざと。秋篠に随分間の手あぢをひかせて。頭をふつて投節をうたへば。こしもとらしき女。何やら承りて表へ出。奥さまの仰らるゝは。何やら夫婦の人にとはせられたい事のあるよし。くるしからぬに奥へ通り給へと。兩人をともし。打はれし大屋敷へつれて行。こゝに暫く待たるべしと。二人を置て勝手へ入ぬ。是は何共合點のゆかぬ事。もしは夫婦の生肝でもとつて。妙薬に入る合點で。こんな奥の間へ引入し事か。同じくばうまい物喰しておいて。ともかくもしてくれよ。まづ食悦だけの徳也と。世につれてさもしき心になつて夫婦息もせず畏る。所へ又最前のこしもと出。こなた方は何ゆゑかやうの淺ましき姿には成給ふ。先より奥さま物の透より。御覽なされ。いやしからぬ男女。若は色事にてかくはなりはつるや。様子を尋見よとの御事にて。是までまねき申せしなり。自然戀より品くんだり給は。くはしく昔を語り給へ。男つき女の風俗。兩人共に一風あれば。定て外の事ではあるまじ。戀であらうとおどしつけて申せば。近比奥さま又はおのゝ目高なり。成程此さまになりしも。つれたる女ゆゑと申。嗚やさうこそあるべし。奥方のお慰みに。有様に咄さるべし。あれなる御簾の中にてお聞なされるれば。ちと調子高く語るべしといへば。呑助畏て。そゝけし髪などなてつけ。今更申もお恥い事ながら。私事幼少より有たいまゝに暮。十七の春より木辻にかよひ初て。さまざまの奢つりて。此秋篠を請出し。我宿て遊は地女と語るにおなじと。身請せし女を。其まゝかの里につれゆき。毎日のさわぎ。其時分は親仁堅固にて。さまざま異見をいたし。追付物もらひになるを見るやうなといはれしが。其詞にたがはず。今袖乞いたすも。親へ孝の爲と語れば。御簾もくくばかりに數多の女中の聲して。どつと笑うて後。御簾をあげて。乳母めいたる年がまへの女。十二三成美き男の子の手ひいて出。我をゆびざして。あの人をようごろじやりませ。大旦那様は深でかくれもなき分限者でござりまし

たが。新町の初の夕霧にかゝつて。御身體をつぶし給ひ。お前さまのお四つの年。おふくろ様と置給にして。西國へ共申。又は江戸へござつたとも聞きましたが。今におゆくゑがしれませぬ。しかれ共手代衆此家督つぶす事をしく思はれ。おまへを取立御家相續せんとして。堺の屋敷は祖父さまの御支配なされ。とかく瓜のつるに茄子はならぬといば。此子が成人の末も心もとなし。只色事の自由なる大坂近くにおく事。千里が野邊に虎の子を養ふがごとし。先此子廿歳になる迄は。傾城町の。人家まねなる里住居さすべしと。御袋様と御一所に。此里にながれ者の様にしておかせらるゝも。傾城狂ひの疾をこはがりたまひての事なり。これ長松さま御成長あそばし。堺の屋敷へお歸りなされたとして。必々傾城狂ひを遊ばすな。けいせい狂ひいたしますと。あれあの男がやうに。夏も綿入着て。米もらひに成ます。よう見ておいて。こんど迄わすれさせ給ふなど。穴のあくほど指さして。とくと和子に見せまして。夫婦共に太儀ぢや。もはやよいに。いんてたもと。御簾の中へはいりぬ。呑助夫婦あきれて。是は各別なるおもはく違ひと。少しは腹がたてど。ねだるべき手掛りもなく。すごゝと爰を立出。其後女は呑助に暇もらひて尼となり。昔の名によりて。秋篠寺のほとりに。草を結びて庵とし。二六時中のつとめおこたらず。後世をいのるの外餘念なし。かかる佛縁あつて。よい出家になり場を。何の末に頼みもなき身の。坊主をきらうて。十錢たまれば。すぐに酒にして。呑助が今の姿の見にくさ。何をかして今日を暮すぞとみれば。おなじ様なる。ならず者共を語らひ。大佛殿の新始の群集の場に筵を敷て。辻打太職はじまりノと聲をたて。見物あつまれば。扱お断りを申します。只今仕りますは。木辻鳴川はやり女郎全盛のなりふり。買手の大盡一座のしこなし。同く酒ぶり口舌のつめひらき。並に太職持のそそりやう。壹角もらうて悦ぶ身ぶり。其外色町に有程の事は。細かに氣をつけていたします。今程は京都に坂田藤十郎。大坂に嵐三右衛門と申まして。傾城買の藝の名人がござりますれど。それは狂言體で。私共がやうに。手銀を皆女郎に遣ひあげて。大分元手を入置ました。正身の我身の上にあつた事をいたして御目にかけますと。世盛の

時分に木辻狂ひをして。さま／＼の遊びせし事を。今仕て見せて口過と呑助は大盡になれば。おやまの九平次は。鳴川の女郎になる。ひの木玉の權平は末社の左吉になり。物にかゝりの虎右衛門は。やりての久米になつて。間夫狂ひを改め。とれぬ客を鼻であしらふ所。女郎は物前に無心の長文章案するてい。又は退さうな客を取とめる時。恨みいふ内に。芥子かいて俄に泪のこぼしやう。爪をはなつに。細小刀にて二枚にへいで。痛まぬやうにはなつ仕様。大盡は参りもせぬ。お伊勢様を。嘘の相手に頼み。堅固なる長池の姨を殺し。又は雪隠の屋根ふく程の事を。大普請するなどと。いろ／＼に身ぬけして。盆正月を請とらぬ前置の偽りだくみ。粹になつて。遊びのおもしろなる最中に。手前うすくなつてはのきかぬ所。親の異見聞ずに迫出さるゝ身ぶり。又は身體皆にしてすみなれし家を立退思入。見る人爰がよう似たと。大笑ひするも。斷。家賣てのきし事は次第にくやく。身にしみ／＼と。今も忘れねばうつる筈也。扱編笠をぬぎて。いづれも歴々さま方持合がござりませうば。少しの露をうたしやりませう。昔は是が面白うて。此體になりましたが。今のうたてさ。慰に汗水たらしていただきますはござりませぬ。せめては時て置た種が百ふ一もはえまして。我々四人が口をぬらしたう存まして仕ります。かりそめながら。壹人前に二千兩宛入ておきました藝でござりませぬ。扱此次に御目にかけますが。かの里の以前の女郎共が方からくれました状文。其外さまさま替りしもの共を。今日の惣切狂言に仕りますと。古つゝらより取出し。先是が前の若紫が。外の男はつとめばかりと。諸神を書込し起請文。偽りのない所は。今の高橋が添状有。扱是が只今迄不便がりました秋篠が。みぎの季指。當麻が血文。香久山が水上の時ときそめし。緋縮緬の内衣。中屋の狭衣が手なれし盃。三笠が壹人呑の燗鍋。右の吉野が三味線の撥。葛城が根より切し黒髪。古小野島が晝夜に十二の。一時ぶみ。相模がさし櫛。きさがさらし布の夏帯。野瀬が手あはせの〇〇丹。此外は皆偽りの筆の跡。ひつさらへて反古の目三貫目が。百貳拾貫目餘の物。いづれも近うよつて。嘘のかたまりに御縁のむすばしやりませう。とかく御立あひの人々。我々を見ならひ給ひて。

親より譲りの家業をはげみ。其家業に繁昌させて。世間を御子息方におわたしなされ。浮世ひまになつて。六十過て年月の氣晴しに。女郎狂ひはする物と御合點なさるべし。若い時參れば。血氣にはやつて。萬かさ高になり。漸々につのりは致せど。止るといふ事金のある内にはいたしにくい物で御座ります。爰を以て傾城狂ひに。能程といふ程がないと申は。此事でござりますと。其身の恥を一文宛には安物とみる。人笑うてなげてゆきけり

第四 高洲ちもりに茂る戀草

口三味線にのせて五十はいの無心語り出す上りり太夫

今時の若人。何ぞ替た事にあらでは面白からず。かぶき狂言にも。昔よりありふれたる。まゝ母事も。手をうつ程にかはらねばよいとはいはず。増て鰐屋衆道女鬘髪などいふ。古めかし事。辻打の放下師がはなしにもせざりき。上るりも又それにつれて。扱も其後それつら／＼おもんみればと。堅い仕出しにてはゆかず。下り破にての。天王立も取てのけて。あたまから頼義公をぼしもなく。着ながしにてぬれの所。力自慢の公平に。嶋原狂ひをさするやうに。序破急なしに。初段からやつさねば。合點せぬ世界の人間。節事も。名所づくし四季の段。しるし揃馬揃は。文句あらたにつくり替ても。古代めくとて。もらひ札にて見物に行子共さへ。聞て頭痛がするといへり。さもこそあらめ頃日は。奉公人の請狀に。節をつけて橋々浦々迄も語りなぐさむ。當世の人心。此氣を知て。何ぞかはつた思ひ付もせば。向棧敷の下迄。入りを取るはしれた事と。見て來たやうに芝居事には。じんへんふしぎの清明もはだし。道満市郎兵衛といふ名だいに。堺で一芝居して見とき相談しかへれ共。じせつあしきとて取のらねば。長町の團屋のうらに。山本好太夫というて。本文彌風に。にがみのある上りり太夫有しを。少銀にてかゝへ。何かなしに堺の浦に。櫓幕をあげて近日よりと看板出し。旅しぼるの人形役者をまねき。只替つた思ひ付の。趣向をのみ相談すれど。

道具すくなく役者たらず。先人數不足にて。今日いうて今日なるあやつり。法藏比丘が増といふ。それはよい太夫共いぜんより度々してとり。今は阿彌陀でも錢のひかりが。なしの木の花。素見物も其やうにはくふまじ。とかく世間傾城ごとをすく時節なれば。なにとぞ是にたよりて。思案して見るべしと。いろくくと工夫して。先大かんばんに墨ぐろに書せしを見れば。牛若床の達者。傾城千人切。并に辨慶七ツ道具の賣喰といふ惣外題。是はならぬと一座の役者。腹のいたい程笑ひ入れば。勸進本の粹じまんの男腹を立て。内輪から其ごとく打込といふ事。給銀とりながら太夫本を。はじめぬ先から倒す分別かとしかれば。口軽な役者が申は。まだ手摺さへ掛けぬうち。七ツ道具の賣ぐひとは。きつさきのわるい看板といふ。是は尤と又思案を仕なほし。然ば辨慶七ツ道具の置所と替んといふ。是も聞くるし。第一七ツ道具といふが。質物のやうて氣にかゝる。それに置所はなほく禁忌なりと。座中にがい顔をいたす。惣じての事氣にかけ出しては。とめどのないもの也。太夫本惣げだいに精をつかし。とかくこんな時は氣を替て。心のわつさりとした時しあんするがよかるべしと。好太夫ともなひ。津守の神社に詣て。それより高洲の色町。ちもりを眺めありき。あれは鼻筋通り過て思はしからず。是は物いひが氣にいらす。そこなは敷にらみの。白目がちなるがいやなり。三味彈ば頼さき赤し。髪のぢぢみに思ひつけば。手足が太し。小哥よくうたへば色くろし。出尻は嫌なり。口の廣きはよろしからず。瘦はだきおけがないと。廿三十へんも。ぐるくありきて見合。後には目まぎれして勸進本も好太夫も。心々につい上りて。○○○○時は。いづれにても可愛さかはる事なし。爰に攝泉の堺大筋に。西太といふ大盡。新町へゆかぬ日は此里に來ての遊び。是又替つて面白しと。難波の末社一兩人めしつれ。けふも晝よりぞめきて。北の端から打こめば。此所のあらゆる天神小天神局女郎迄。大盡御出といろめき。面々によそほひ。無理に見られ度ふせい。目にもかけず。いつもの方へつんざしてゆく時。山本太夫が局より出るに行あひ。是は太夫あぢておしやると詞かけられ。赤面仕ながら。あまり徒然にござりましたゆゑ。晝食たべに立ちましたと

笑ふ。近比よい所で見かけられた仕合男。座付すんだらば。夕飯拙者が申つくる。用さへなくば參れの。御意忝なし。しかし今日は太夫本を同道いたしたれば。私賣口がござりますとて。是から一人つきはなしても歸されませぬ。さりとは残念至極と申す。それさいはひ太夫本ぐるにみに。けふ一日我らあげるでござると。すぐに二階座敷に上らせらるれば。山本太夫勸進本がはひりし。局の戸をたゞいて。よい事有りと表よりどよめば。太夫本も。もはや帶する段にて。心の残る事もなくて。外に出て何事ぢやといへば。おつとつて仕合は。堺の大盡に二人共にあげられ。晩迄はよい目にあふ事。いやではあるまい。何事も我らかけぢやと思召て。今少し給銀あげて給はれと。はやもたれ口を申せば。人に折角満足がらせておいて。跡で割付下さすやうな事ではないかと根をおす。とかくすかさぬ男共と。互にわらうて内に入り。二かいへもあがらず。梯子の下にて山本太夫がさやくは。よい仕合といふは。女郎を買つてもらうて。我物いらすに遊ぶ事をいふにあらず。上にござる今日の大盡は。堺にかくれもない借銀屋。何とぞけふ取入つて。此度のしほろに五十はい程出さす。思案し給へといへば。太夫本をふくみ近比よい氣の付所。天晴の働きてと存る。人をふすくる事我らが得物。随分兩人心を合せ。おもしろをかしう酒をしひて。酔せられた所を見合。右のねがひを申かけるがつてんといへば。是然るべしと内談きはむるを。臺所に。たねというて新町の遺手の開山。此所の内義とねんごろにて。咄してゐたりしが。二人が談合を聞て笑ひ出し。酒しひて酔す方便は昔の事。近きほどは京も大坂も。酒を薄う作るかして。きよめが見えず。それをなせといふに。前々は大盡に面白くのませて。此上には御無心を申せば。夢中になつて拙者正月請取たと。跡先なしにいはるゝを。町よりのおつれを證人に。つい物になしけるが。此ほどは御客の酔助を見まじしいひかゝれば。帷子時の事は耳に入れて。小袖じぶんの事はきかぬ顔して。いつもさだまつて壹歩やらるゝ人に。二朱つき付て。いかう予は酔たさうなとはいはるれど。酔れぬ證據には。蚤取眼をして。太夫殿はどこへかしたぞ。も二時程になるが。一向もらひ手があつて貰うてくるれば。今迄の遊びがたゞ

になる事ぢやが。遅いは合點がゆかぬ。太夫歸られたらば行水して。內衣も仕替て座敷へ出やれと申せ。是は爰においた扇が見えぬ。我等が持しは十一本骨の。いうせんが繪に。ゆく水に茶笥を書いて。流れをたるといふ古事ぢや。こんな寺扇ではなかつた。尋ておこせと。細かな覺えは。酒が薄い故に。本酔の出ぬからなり。皆様も大盡へ無心おつしやる合點ならば。並酒盛た分ては。我を忘るゝ程な。根へ入し酔は出ぬものでござんすと。さすがは大所にすむほどあつて。酒がうすいと賢い氣のつけ所と。兩人我ををり。あるじ夫婦を頼み。大和屋のつて置酒の中にて。成程濃のをとゝのへて給はれと。一角出せば。亭主もをかしい男にて。大盡様の酔のつりし時分。御案内頼みます。拙者も御無心の尻馬に。のつて見たうござると大笑ひして。取につかはせば。二人は二階に上がり。太夫本を大盡へ引合せ。萬事頼奉ると。そろゝ付入して。どうやらかうやら酒にして。大方熱もまはる時。太夫本こらへ精なく。芝居の事申出し。五十兩の金が調ひませいで。日和のよいに看板は出しながら。今日迄得はじめませす。大勢遊んでをります段。無念千萬。何事も旦那お影で。惣座申うるほひます事。何と太夫さうでないか。成程勸進本申されます通と。詞を合して申出せば。大盡胸につかへながら。女郎共にかねて盛を申て。高うのぼつてゐる最中なれば。むげに返事もせず。五つ五つに見えし時。何とぞ隨に請合せ度思ふ所へ。くだんの大和屋が三年酒を。はつたりと燗をいたして。勝手から持て參れば。時分はよきぞはや盛と。大盃は脇になつて。中腕平皿後は錫鉢にて。あひの。又あひ。大あひと申出して。むすびのしに小板の焼味噌。漬鰯に。はたではありやと。さいつさゝれつするほどに。先一番に無心の頭取いたせし。肝腎の太夫本。大盡より先に片づけられ。もんたいがなし。され共山本太夫跡にひかへて。旦那みだれ姿を見合せ。最前太夫本が申かけて置ました。五十兩の金子の事。芝居つとめます内。お取替なされ下されなば。惣座申は申に及ばず。木戸半疊。權太靴を打ます。小坊主までが。うかむ儀。憚りながら女郎さま方。お取なしを頼上ると。長口上申出せば。成程々々其方勝手次第に。手形したゝめ證人故。印判もつて取に參

れ。是添なしと悦び。餘り氣さくなる塚のあきやう。こんなきお口には。何でも云たらなりさうな物と。又手をついて。迎の事に。私樂屋入の衣裳二かさね。見事な事にあづかりたいと申す。それ程の事今まで申さぬは。近比小氣な男め。金子請取に參る時分。染色定紋書付て參るべしとの御意。有がたく畏まる。時に亭主も罷出て。太夫殿もはやおねがひはないかと。口をとぢめ旦那へ申す。やねが殊外損じまして。雨ふりの時分お客が致しにくうござります。お影でもりをとめます訴訟と。女房共が私に心えて。何ぞ手輕い無心申て見てくれと。隨に言傳仕りました。お前へ出ませぬは。當月産月にて。二階のあがりおりあぶないと申によつて。私とかゝと二軒役の御訴訟と申す。やねの葺替に甘雨。みだいに袖二疋に。眞綿そへてはいやかとあれば。是は結構過ますと悦ぶ。然らば明日々々といひながら寢入給ふを。高間といふ女郎。物などきせまして。此酔のさめぬやうにと。いづれも産所人の夜伽するやうに。しづかにゝと物音せずにもりある。暫く有て水乞せられ。もはや歸りてよい時分と。すぐに起ておかへりごしらへ。こんな大盡様よその風にもあてますなと。おかごにのせましお供の外に。男二人お宿ぢかくまで送らせ。山本太夫を始おのゝ落着き。勸進本をゆすりおこし。願ひ事の首尾せし様子を語れば。寢耳へ小判の入し心地して悦び。とかく果報はねて待てぢやと。ぬからぬ口を申せば。いづれもどつと笑て。こんな事は急に手取したがいと。二人は旅宿にかへり。夜が明ると其まゝ大道筋の。西太方へ參り。昨日御意なざるゝ通。預り手形したため。印判持參するよし。年若な手代ヲ頼みて申入れば。大盡二日酔のさむる程驚き。頭をかゝへながら表に出て。そんな事いつ申せしぞ。近比それは云かけと。大きにけてんの顔付。兩人案に相違し。昨日の段々申せば。いかないかな一つも覺ぬ。公事にしたかおしやれと奥に入るゝ。是を思へばあまり濃酒をもちり過して。大盡かつて覺ぬも尤ぞかし。此後は女郎狂ひ。其外浮氣事には。かりそめの約束も。當座手形といふ事になるべし。仍而如件。

傾城色三味線湊之卷

播摩室津女郎の名よせ

▲一天神 くない 一天神 おだまき
 一同 井づゝ 一同 いろは
 ▲一かこい みふね 一かこい たかね
 一同 わこく 一同 きんご
 一同 みをの 一同 めいざん
 一同 いさご 一同 夕ざり
 一同 いくよ 一同 あげまき
 一同 くめの助 一同 あさざり
 一同 くもの井 ▲一はし ことがわ
 ▲にしや清助内 一女郎
 ▲一天神 くわぜん
 ▲一かこい 若むらさき 一かこい うこん
 一同 つま川 一同 小むらさき

一同 もしほ
 ▲一はし 山ざき 一はし あさづま
 一同 はなの 一同 かづらき
 一同 梅がえ
 ▲ひめぢや次郎兵衛内
 ▲一かこい わかさ 一同 みのり
 一同 はや川 一同 やしほ
 一同 小ざつま
 ▲一はし 上川 一女郎 ふじ川
 一天神五人有 貳十八匁づゝ
 一かこい廿三人有 十七匁づゝ
 一はし八人有 拾匁づゝ也
 右女郎惣數合 卅六人 以上

同國うづら野女郎の名よせ

▲くつわ又四郎内

下の關いなり町女郎の名よせ

二ときわ 一ざくら木 一しのぶ
 一くめの助 一わかか 一すかの
 ▲くつわ又左衛門内
 一高はし 一かずま 合八人
 一皆かこい 十七匁づゝ
 あげやはなし國々の市へ
 出見世にゆく也 以上

▲さかい屋内
 ▲一天神 あげまき 一天神 小源太
 一同 初太夫 一同 千太夫
 一同 わこく
 ▲一かこい 小むらさき 一かこい わかさき
 一同 おぎの 一同 こざつま
 一同 しら藤 一同 たむら
 一同 大はら 一同 いこく
 一同 わか松 一同 若むらさき

▲ともや内

一同 くわさん 一同 りんこく
 ▲いわみや内
 ▲一天神 もんの助 一天神 万太夫
 ▲一かこい あふさか 一かこい いせき
 一同 玉ちよ 一同 しら玉
 一同 さかた 一同 もん太夫
 一同 きゞ野 一同 かの
 一同 万しう 一同 かしはぎ
 一同 まん山
 ▲ともや内
 ▲一天神 からはし 一天神 むらのへ
 ▲一かこい しな川 一かこい 花むらさき
 一同 おうしう 一同 やしほ
 一同 きんせき 一同 はつはな
 一同 大はし 一同 きみ川
 一同 みちのく 一同 金太夫
 一同 れいざん 一同 わしう
 一同 いく世

▲まるや内
 ▲一天神 かつやま 一天神 小太夫
 一同 からまつ 一同 むらまつ
 一同 なじを 一同 ときわ
 ▲みや屋内
 ▲一天神 吉女 一天神 のしほ
 一同 うてな 一同 今むらさき
 一同 金山 一同 よしずみ
 一同 梅がえ 一同 山ざき
 ▲大坂屋内
 ▲一天神 くも井 一かこい 藤なみ
 一かこい ふちがへ 一同 ふぢおか
 一同 からいと 一同 花さき
 一天神 廿四人有 廿七又づゝ
 一かこい四十一人有 十七又づゝ
 惣合六十五人

長崎丸山女郎の名よせ

▲丸山町新屋内

一太夫 梅むら 一太夫 くれなひ
 一太夫 しうざん 一太夫 村竹

▲寄合町伊勢屋内

一太夫 みちのく 一太夫 萩野
 一太夫 薄野 一同 みやぎの
 一同 きよ竹 一天神 あふさか
 一天神 ていか 一天神 夕ぎり

▲同町はとや内

一太夫 ませがき 一太夫 清たき
 一太夫 小ぐら 一太夫 もり山

▲同町引田屋内

一太夫 れん山 一太夫 うす雲
 一太夫 むら山 一太夫 高尾
 一同 わこく 一同 うきぐも
 一同 いこく 一天神 はごろも
 一天神 もしほ 一天神 あふさか

▲同町肥後屋内

一太夫 くらはし 一太夫 さぬき

一太夫 澤むら 一太夫 せきふね
 一太夫 みさほ
 ▲同町小柳内
 一太夫 うきはし 一太夫 村はし
 一太夫 ながの 一太夫 長しま
 ▲同町たはらや内
 一太夫 きゞ野 一太夫 きりなみ
 一太夫 やつはし 一太夫 いおり
 一天神 あふさか 一天神 かおり
 ▲同町さど屋内
 一太夫 とやま 一太夫 おかさき
 一太夫 金山 一太夫 あふ山
 一太夫 せき山 此二人夏請出され
 ▲同町あぶらや内
 一太夫 山しろ 一太夫 きよ川
 一天神 逢山 一天神 さこん
 一天神 何川 一天神 きぬがへ

▲同町添嶋屋内

一太夫 山ざき
 ▲同町さつまや内
 一太夫 あふはし 一太夫 やつはし
 一太夫 かほる 一同 大ぜん

一天神 きゞやう
 ▲同町大坂屋内
 一太夫 山しな 一太夫 しやうさん
 一太夫 ちやうざん 一太夫 あふせき

▲同町ぶんごや内

一太夫 りやうざん 一太夫 うたか
 一同 りんざん 一同 きんざん
 一同 ばいざん 一同 しら玉
 一同 千太夫

▲同町ちくごや内

一太夫 するが 一太夫 大はし
 一同 はごろも 一同 ふぢしろ
 一同 野風 一同 出羽
 一天神 みなと 一天神 こゝのへ

- 一天神 小太夫 一天神 一ツかく
- ▲あげやの分 一はおりや安右衛門
- 一加賀屋市右衛門 一きねや勘五郎
- 一大こくや久左衛門 一ちかねや喜兵衛
- 一木屋半七いすい 一万屋町後家大い通り物
- 一太夫 六十三人有 卅ふ又つづ
- 一天神 十六人有 廿ふ又つづ
- 惣合七十九人 此外女郎あまた有あらし此通り也

- 此外湊みなとせに
- 一備後のともに ありそ町
- 一安藝の宮嶋に 大坂町
- 右貳ヶ所女郎位付
- 下の關と同前なり
- 一筑前の博多に 柳町
- 此所の女郎 拾と又つづ也
- あらし如此に候
- 其外は猶重て好色本のため略之

第一 室の遊女に氣をはりま瀧

花前に蝶まふ執心の紋所

抑是は播州室の明神につかへ申。神職の者のおとし子なり。扱も都の嶋原と當所室の遊女町とは。同商賣にて御座候へ共。いまだ一見申さず候程に。此度思ひ立當地の色里へと急候。播磨瀧室の色湊は。西國第一の分里。遊女も昔にまさりて。風義もさのみひなびず。多くは大坂の女郎共の風をまなび。酒ぶりもよく一座もしめやかに。意氣はりも覺えて。折節は口舌の浪も立つく。たち花風呂丁字風呂廣嶋風呂。是皆爰の揚屋なり。かの神主のおとし子。蘇砂屋の松右衛門といへる。あてしまひな名を付し所知の未社をとまひ。情に籠る。柳風呂に入て。さつとのみか

け。扱亭主にあないさせ。にしやひめぢや但馬や是三軒に。九十餘人の姿を見つくし。其中に風俗よく。あぢな所のある女郎。お名はと亭主にたづねれば。花前さまと申て全盛の米さま。端哥名人にして。又なき座持と申に。はや語らぬ先にいとうなつて。早速抓めと申てやり。松右衛門にもしなだる。小藤といふ。端女郎を一疋はずみ。先酒になして遊ぶ所へ。太夫さまお出といふ。是忝しと床脇になほし奉り。盃事すんでの上に。き及びし哥を望めば京大坂で鳶四遠柳がうたうて仕舞。小哥比丘尼の手にわたり。末のすゑになつた哥も。此里で面白く。あつばれ名譽のお上手。梁のほこりも落ぬる斗。盧公もはだしにて。きく人心浮たつ所に。秋の末にはめづらしき蝶飛來りて。小哥につれて舞有様。人間物をしらぬ也。誠や花前に蝶舞紛々たる雪のはだへにちかづく事。柳上に。鶯聲を出し。妙なる哥をうたはせらる。故なるべし。此蝶も片々たる金氣があらば。花前をあげてまはすべきに。自身舞あるくは大盡蝶ではあるまいといへば。松右衛門が申は。惣じて蝶は太鞍のはてなり。既に露をなめて命を繋ぐからはと笑へば。亭主をかしい男にて。あれ小藤さま。蝶が我ととびあがるさまは。さながら身あがり虫とも申べき。あはれ茶挽草にとまらして見たしと。女郎のいやがる。事申つくして。一座是を興にして。心よき酒をのめど。花前は更にをかしからぬ風情にて。かの蝶を扇に取うつし。今日も又ござつたかと。人に物いふごとく。しかも涙ぐみて是はけうとし。酒に酔れてあれか。たゞしはあんな事が此里のならひかと。大盡不審し給へば。松右衛門も合點のゆかぬ顔して。花前さま胸に手はござりませぬかと申せば。成程脇から見さんしたら。氣もちがひしかと思召さん。始てのお客に。あさましき我おもはくの人の姿を見する事と。遊女にはめづらしき本の涙を流さる。是はきたいのためし。扱は此蝶はお敵様の執心か。どうやら小氣味の悪い事と。臆病なる大盡。少しふるひ聲にて様子を尋ねらるれば。はづかしながら此虫は。當國あぼしに隠れなき。有徳の人の三男。三四様と申せし人の執心なり。此大盡十七の年手代衆御供にて此里へ御出。風俗當世流にして。然も角前髪の器量よし。戀のきくさかりに。生れついて大氣に。お心も廣嶋風呂に

入給ひ。我身をとの御指圖にて。始て御見なりしより。眞實にいとしいなりて。初會から互の心底をあらはし。起請迄取かはせし事。凡江口の君此かた。つひにはじめたお客方に。誓紙書しは我斗。それよりふかき中となり。あはぬ日は文してかはらぬ心をしらせ。あへばは別れの且を思ひやりて。酒事やめて語る夜も。いつよりはつい明やすく思はれ。かうした事もいはう物と。詞残りてとがなき鳥をうらみ。おかへりの跡はいつとも涙の淵に。しづみ入程のおもはくなりしに。世には子にむぎ親御も有て。惣領次男は所にて。家業の榮花に仕付給ひ。おいとしや御器量お智恵は。兄さま達にもまさりし物を。跡から生れ給ふとて。父母の仰にて。一子出家すれば。九族天に生ずといへば。三四郎には出家をとげ。我々が亡き跡をとぶらふべしと。をしや過つる春の比。十九歳にて押して出家になし給ひ。書寫山の何坊とかやを師と頼み。かの寺へのぼし給ふより。此里への縁切れて。あはぬ思ひに胸をこがし。戀しゆかしの數かぎりなく。文して寺へおとづれしに。あなたもかはらぬ思ひにて。たとへ此身は出家となり。あはて此まゝ此山に住はつる共。我一念は以前にかはらず。折ふしごとにまみゆべしと。御返事有しより。形見にぬぎ置給はりし。お小袖の定紋の。あげはの蝶におぬしの一念入けるにや。小哥にひかれていつとも御紋の蝶ぬけ出。かやうにたはぶれ給ふ。浅からぬ御思はくを。思へばく流れをたつるといふ身程。世にかなしき事はなし。我つとめの身ならずば。末々あひます思案もあれど。哥のふしにて籠の鳥かや恨めしき浮世と。わけもなう取亂されければ。大盡慰は脇に成て。きく程哀れなる物語。しらぬ事ながらもらひ涙をながし。遊女町は氣を晴す所かと存じて。大切な銀を持つて來て。是はわざく啼に參つたやうなものでござる。何と太夫さま。おなげきの上で申かねてござるが。床入はなりますまいかと。律氣なる大盡にて。さし足してうかがはる。いかにもく寝ませいで。しかし私が好有と。宿の下男をまねかれ盆のをどりのたしなみに。前髪鬢があらば借りたいとの仰。幸當年拵へましたがござりますと。早速取つて參つて奉れば。太夫ことない悦びにて。三四形見の小袖を取よせ。大盡に斷り申小袖をませせかへ。かづら

をかけて。お名をも三四さまと申さば。御いらへあるべし。さもあらば床の中にて。お心まかせに成べきとのぞみ。銀出しながら。しつかいそれは人の形になつて。貴様の持あそびものに成やうな物なり。是は太夫殿に我が買はるといふものなれば。今日の造用其元からなさるでござらう。とはいひながら〇〇〇にならうとの事。まづは耳よりなり。とかく振られうより是もましと。御好の如くかづらもかけ。小袖も着かへて三四さまといへば。心得ましたと床に入てお氣に相ける。其後此君の事承れば。三四還俗してひきかき共申。又はさぬきの天狗がつかんで。御内儀さまにした共申。菟にも角にも此女の身の上。福德の百年目よき仕合なり。相かはらず呼つて今の花前も。小哥の上手といへり。始の花前は情あるやうに見えて。男いく人か思ひつき。請出す沙汰せし人数多有中に。鹽の出る所に正といふ男。あぼしの三四とはりあひし最中に。何ぞ三四より増つて上かさ成事をして。女郎に思ひつかせんと八月の末つかた。末社共引つれ。椀久磯に金銀つかんで。ばつとしたるつけとゞけ。忝き數々の酒事。随分と騒げど。さめぎは早く調子めいりて。聞なれし三味もをかしからず。何ぞ替りし事はないかと申せば。内儀がさし出で。色遊びは春夏。扱は盆の大をどり也。此所は七月十三日切に萬の取やりを互にすまして。十四日より盆の有様。又興有て面白きをどりぶり。見せませいで残りおほいと。くどく申せば。何が奢合點てわせた大盡。甚氣を持。それはなんと銀づくでは今見られぬ事かといふ。成程女郎さま方さへ大勢まねけば。只今もなる事と申。是はいと心やすき事と。跡先しらすの大氣な末社共にいひつけ。室津の惣質と觸て。女郎あるほどしきりて。座敷踊を催し。風身にしむ時分に。皆々風もよき踊帷子を着て。思ひくの仕出し。一人も憎いはなかりき。大盡は床の上の草香爐を取し。くれなるの敷物しかせ。さも大やうに座し給へば。左は追蹤笈安と云。浮氣醫者療治を捨て。今旦那膝下さらすの末社となり。物下さるゝ脉あちをぞ窺ひける。其外御きげん取の可笑中間六七人なみみて。踊おそしと待かけたり。先但馬やのくれなる。ばつとしたる出立。裾は立浪に入日の模様。一しほ色ぶかい井筒がしやれたとりなり。いかにして

もすいた風。命取とは此君くと。見る人鼻毛のある程のぼして。繰返し返しても面白や小田巻が踊り。其次は
 ぶり袖をひるがへして目にたつ風ながら。どこやら足どりに初心な所有て。是ぞ踊の手ならひいろは。たゞ美く。
 つま川が。苦味のあるも一子細有てよし。姫路やの若狭がすらりとしたも見よく。若紫小紫。みのり。はや川。いさ
 ご。みちん程もにくげのない君達。揃うたり手拍子。腰付いづれもうまさうにて。蹴返し撥棊引足のうるはしく。大
 盡をはじめおの／＼魂をとばし見る所に。一際すぐれて五人一様に。住吉踊の立出。笠につけたる紅の絹にかくれ
 て。誰共お顔のしれぬが氣の毒なり。箔安あれは誰々ちや指て見よとの御意。かしこまつて足どり身のひねりに氣を
 つけ。四人はしれて中一人がしれぬといふ。まづ四人は誰さまぞ。夕霧朝霧。雲井あげまきなり。しからば中なは幾
 世か久米の介なるべし。いかな／＼そんな君にてなし。凡この里に女郎衆百人あらうが。我等のしらぬは。一人もな
 し。暗て足音斗きいてさへ。何と云よねちやとがてんいたす法師め。見ちがへる事でない。どうでも是は紛れものぢ
 やと申。ちか比粹自慢なる入道に。さらば笠をとつて。あの口とめよとの仰。承はつておそばの末社罷立。かのし
 れぬ踊子の菅笠とつて見れば。丁子の又助めなり。扱もにくしやれ。胴うたせと。おの／＼立かゝれば。こりやなら
 ぬとにげて歸り。踊も是をかきりにくづれて。跡は大勢の女郎。大盡を取廻し御機嫌とつての大酒盛。あつぱれ寛活
 なる遊び最中に。大盡申出さるゝは。さいぜん箔安が此里の女郎何百人あつても。足音で誰ちやといふ事を知ると。
 所自慢いたせし間。此坊主が目をふさいで。足音で誰ちやと名を當るか。いそいで目無どちして名を指すべし。いひ
 あてたらば其君すぐに。此月中だかす事ちやぞとあれば。箔安悦び。六脉は取ぞこなふ共。是斗はちがへじと。人も
 なげなる知自慢。いづれもにくみて。紅打の手細にて目をふさぎ。さあ是からが始りと。下張の平助といふ末社。
 尻をまくりあげて。箔安が鼻元近くよせ。音なしに二つ迄すかしければ。是は鼻がもげるわ。さりととはぶたしなみ成
 女郎。口中の掃除めされ。但し息のくさは肺の臓に病あるか。腸胃に積熱あるかの故也。當歸連翹飲などを。二三

貼進じましたいと。ぬからぬ顔して配劑を申。一座をかしさを胸にをさめて見物する。女郎はいづれも聞しられぬや
 うに足音をやつして。さまざまの身振りをかし。箔安は五音の占の如く。小首をかたづけ氣を付て。今の太股にあ
 るかれしは。髓に金吾どのはしれて有ながら。端女郎に望なれば。態と名をさゝぬ也。まそつとよい衆御出なさ
 れと申。いかさまよく聞しる事よと。いづれも我を折り。みふねに付ご多さして。淀川と云悪よねを。靜に足音させ
 て。さあどなたぢや。さして見よといへば。足音と聲とが替りて聞得がたし。今少しちかくにてお聲聞たしと申せば。
 みふねそば近くよりの付ご多。きくふりして足音はかまはぬ。御聲はかくれのなみふねさまにのる氣ぢやと。や
 がて取付目がくしを取て悦び。にが／＼しくも離さぬ時。みふね賢くも。それ／＼懐から。壹歩がおちるといはれ
 ければ。どれ／＼どこにとわき見するうちに。袖ふり切てにげ給ふ。いそがしき中にさりとは智慧かなと。人皆ほめ
 ける。箔安は腹をたて。うそついで成共。われを嫌うてにげたがる君を。とらへてから面白からずと。不興してや
 めける。それは汝が戀より欲の方がふかきが故也。懐に入たおぼえのない壹歩が落るといはれて。大事の君を取にか
 す。さもししい心入の法師に。何とて女郎思ひつくべきや。是ぞ浮世のはやり詞に。かなはぬ事をいしやぼんといふ
 は。汝が事よとわらはれし。大盡も跡先の算用なしに。めつた奢におごり。遂には身體棒にふつて。うどんやして浦
 人にすゝらせ。五十過て始て金銀は大切なものと知て。せめて今迄遣ひすてし三分一程儲けたしと。ずあふんかせげ
 ど。のぼしたき銀はのびずして。願ひもせぬうどんと鼻毛は今にのびけり

第二 焼取にする鶉野の仕掛

ほり出しは床に入ての誠

同國加西郡。鶉野といふ所に。遊女町あるよし。都へかへりて話の種にと。上方の小間物や。國廻りの御師の手代

御目にかけてあれば。是は上方のお客様へは何よりの御馳走。都にては壹萬兩でもならぬ事を。銀壹枚でお氣のほらぬおなぐさみ。おつけ狂言はじまりと。先番付を御目にかける

女歌舞妓女郎役人替名付

當流義經北國落

付リ

色狂ひは身の爲にあたかの湊

井二

富樫が關をとりものゝ寄合

一源のよしつね からはし

一むさし坊辨慶 花まき

一かめみの六郎 あふさか

其外女郎衆あまた出さんす

- 一かた岡の八郎 もんの助
- 一いせの三郎 まんざん
- 一するかの次良 木々の
- 一くまる太郎 もん大夫
- 一源八びやうゑ さかた
- 一わしの尾の三郎 しら玉
- 一かねふさ からはし
- 一とがしの左衛門 かしの

是が此比の仕出し狂言。男の所作を女郎のいたさるゝ故に。色顔むすんで取合のせりふにも。につくい奴でござんすなどと。やさしき所あつて。又外になき替り遊び。六軒の女郎のこらず爰に集り。それぐの役々きはめて。罷出たる者は。富樫やの左衛門といふ揚屋にて候。扱も源九郎經さまは。都にてさまぐの色狂ひばつと世上に名の立て。ことうことうまつなる頼朝様のお耳に立。遂に御勘當あそばし都の戀草に御身のかくし所もなく。舊離切られて行末は。東の惡所友達に身體よしのあるをたのみに。日比の末社。貧乏神のつきもの迄。今にはなれず。以上十二人のこもう僧とならんして。揚屋の分もたてずして。ぬけてお下り遊ばす由。近比とゞかぬ仕方なれば。此所に催促の關をする。家質のやぐらをあげ。借錢の淵に高利の石がけ積あげて。もがりの逆茂木まびしく打。書出しひつしと立なら

べ。銀取錢取財布かたげ。斷も佯言も聞入れぬ顔つきにて。くすみかへつてゐる體は。さながら大晦日にことならず。いかに誰ぞあるかえ。こも僧達のお通りならば。局女郎の如く。むりに袖を引とめましや屋。へ旅の姿は淺黄むく伽羅燒袖やにほらん。いたはしや義經は。算用なしの仕過しに。都の諸分尋にて。遊び所の味わろく。大盡ぶれど請つけず。氣丈を出せど金銀の。光もすすき星月夜。鎌倉殿の勘氣を得。京の住居も成難く。思ひもよらぬ旅はじめ。行ききんゝに負ふせ方。待ちかけ居ると聞し召。末社諸共こも僧の。姿に替る浮世かな。かの燒印の編笠も。熊谷笠に着替りて。過し奢の戀風に皆吹上し尺八の。ねてもさめてもわすれぬは。都の遊びなりけらし。扱御供の末社には。龜井片岡伊勢するが。わし尾の三郎熊井太郎。辨慶は先に立。十一人の太鞍持。いまだならぬこもすがた。墨のくわら袈裟かけまくも。我旦那は頼朝殿の御舎弟にて。殿ぶりようて吝からず。天晴よねのすく風にて。色里色町のつめひらきに。一度もふかくを取給はず。色道無類の大盡を。おもへば口惜き勘當やと。年比もらうたる物の數々。思ひ出してぞなげきける。扱あてのない旅なれば。路銀はあるかと面々が。巾着紙入さがしつゝ。拾一人が其中に。取あつめて金子壹兩壹歩二朱。銀が五匁錢貳百。むかし旦那の世ざかりには。編笠茶屋にも是程は。露にもうたせ給ひしが。今大切な銀なれば。随分始末の夜をこめて。日數かさなる山を越あたかの浦に着給ふ。辨慶いかに申上候。しばらく此所に御休みあらうするにて候。判官いかに辨慶。辨慶なんてござんす。判官只今掛こひの申て通りつる事を聞て有か。あたかの戀の湊には。富樫屋の左衛門が残り銀をせがまんとて。催促人をかたらひ。揚錢の關をする。似せこも僧を堅く吟味し。是非に皆濟さすところ申つれ。辨慶言語道斷の御事にて候ものかな。扱は御下向を存て是非乞詰んと存立。先へまはりて待懸たると存候。物前の如く。出ちがう事もなりがたう候。先此かたはらにて暫く銀の御談合あらうするにて候。皆々近うよりもがり分別を出され。此借銀を手をよくねる思案あらうするにて候。龜井六郎私が残すは。家質義理あひの手形銀にもあらず。何ぞや證文もなき揚錢の引残り。何ほどの事候へき。

只書出しを引破て御通りあれかしと存候。辨慶しばらく。近比それははりの強き言分にて御ざんす。此揚銭の書出し一卷。引破つてお通りあらうずるは易き事にて候へ共。さやうに横と出候はゞ。山こかしのやうに申たて。死に一倍はいふに及ばず。恐しき手形銀迄襲ひ來らば。わづか貳兩に足ぬ路金にて。いかでかふせぎ申さるべき。たゞ何共して無異の義が然るべからうずると存候。判官ともかくも其方はからはれ候へ。辨慶畏て候。然らば随分口先をもつて。ちよろまかし見申べく候。旦那には御笠をふか／＼とめされ。いかにも貧なるも僧の様に。我等より引さがつて御通り候はゞ。よも大盡とは見申まじく存候。さあ／＼皆々御通り候へ。とがしや左衛門なにとこも僧達の御通りあると申か。心得である。なう／＼こも僧達。是は揚銭をおひ給ふ似せこも僧衆を吟味仕り。もし引残りあるにきはまつたる虚無僧衆は。身の皮をはいて成共。急度算用相立させ候。さもなきに於いては。色里の大法にまかせ。桶ぶせに仕る事にて候。辨慶委細承り候。それは揚銭をおひちらけたる虚無僧をこそ。吟味し給ふべけれ。色町の出入はいふに及ばず。家質米屋の銀迄も終に壹錢もおうたる事なき誠のこも僧を。いかで桶ぶせにし給ふべき。いづれも早く通られ候へ。左衛門いや／＼其手はくはぬにて候。御身達が口軽な物いひ。味な手付などのをり／＼見え候は。何とつゝみ給ふとも。末社達と見申てこそ候へ。四も五もくはぬ揚屋の亭主を。偽り給ふは不覺なり。もとより虚は我等が家。詞のあまきうち。おの／＼取もち給ひ。大盡のお名の出ぬ様に致され候はゞ。然るべう候。辨慶それはすゐばまりと存候。尤も我々腹からのこも僧にてもなく候。頼みし旦那三ヶ津の色里を見めぐり給へ共。御心にならぬ美女なし。さるによつて筋目にも構ひたまはず。美なる娘あらば。それを乞請。一生の妻とさだめん。望は此通りと。姿のしな／＼一つ書になされ。此註文にすこしもたがはぬ娘を。尋出せし者には。その褒美として。金子千兩取すべし。汝等廣い世界なれば。さがし出せと仰をうけて此かた。諸國を尋めぐるに。家々へよい娘はあるか／＼と問はれもせず。かくこも僧の姿となり。尺八の音にひかれて聞に出る女を。註文にあはせて見てまはり候へ共。千人の女千

人の男の目にいれればこそ。壹人もあまらず。それ／＼のかたらひをなせば。萬人の目によきとさだむる女。いまだ見あたらず。かく尋かね候。貴殿も揚屋と有ば。色のかず見る商賣なれば。もし思ひあたりも候はゞ。御しらせ下さるべし。さもあらば褒美の千兩をすそわけにいたさうずるにて候。左衛門近比それは御苦勞なる御事にて候。さりながら。もし尋あたり給はゞ。一夜けんぎやうに成事。路銀も旦那からのあてがひにて候はゞ。どの道にも損のゆかね事にて候間。ずるぶん目の悪うなる迄見あるかれ候へ。只今は大盡も末になりて。我等ごときの揚屋商賣もあはぬ世と成て。たま／＼よき客と思へば。人の嫌ひ手をおかづき。物にならぬ人あまたにて。揚銭夜食御所柿迄。喰そんになるがかなしく。かやうに先々へ出向ひ。催促いたす事にて候。まだもして見ようならば。おの／＼のやうな千里一はねなる事にて候。擬女見に御廻り候はゞ。定て美女のすがた註文御座なき事は。候まじ。姿の註文をよんでお聞せ候へ。辨慶何と註文をよめと候や。心得申て候。もとより註文あらばこそ。懷中より書出し壹通取出し姿の註文と名付つ。たからかにこそ讀あげけれ。それつら／＼おもんみれば。大盡功者の目利の色は。値打の高下にかぎらず。丁子油の長き髪に。匂ひをかづく人てなし。爰に中比うつけおはします。御名を無生とんてきと名付奉る。幸の美人もなく。艶女ありがたく。灸穴背中にあらず。艶顔玉をあさむく。姿は雪のふり袖をひるがへして。花車なそだちを懇望す。かほどよいの女郎の。あらなん事をかなしみて。可笑中間の末社ども。諸國を女見さす。壹年半年の。奉公人の。輩にても。此圖にあひなば。奥様にして樂にほらせ。汝等には數千兩の褒美をとらせん。奇妙希有の註文と。天もひゞけとよみ上たり。催促の人々帳をけし。恐れをなして通しけり／＼。時に見物の小倉大盡。目はやき男にて。跡なる笠を傾けしこも僧こそ。不思議の者なれとまれとこそ。辨慶あうししばらく何とてあの人斗とがめさんす。さればさいぜんより十壹人の女郎衆を見るに。風俗足取いづれも。此里の風にして替らず。此壹人何共のみこまぬ所あれば。笠を取て何屋の女郎ぞ。對面せんためとめましたとある。さすがは此里へ數年お通ひなさるゝ程あつて。目ず

るしやうかな。此とめたまふ女は。私の親方のもとにつかはれます。すぎと申ます下女でござんすが。今日あたかの狂言に。面を役わりをいたせし中に。常陸坊になる事はいやと。どの女郎衆も役目をきらひ給ふ故に。せう事なさに。此下女を常陸坊にして。あまた敷に入て出ましたとある。是はいよ／＼合點參らず。何のむつかしい役もない。常陸坊きはるゝは。様子のある事かと大盡ねをおして尋られければ。されば遊女はいづくも人さまの評判で。おもひ付のないお客も。お心のむいて来る物でござんす。然ればあれは見たよりは買徳な女郎といはれてこそ。うれしう御ざんしよけれ。女郎の身で。買損といはるゝ役目はいやと。常陸坊になり手がなさに杉を役人に加へましたとのことわり。ざりとはいひまはしの上手な女郎。そんな事はまそつと前方なる男におつしやれと。むたいに笠をとれば。此邊へ商に參る小間物賣の。丁子の小平次なり。是はといづれも肝をつぶせば。辨慶になりし花巻といふ女郎泪をこぼし。今はつゝむべきやうなし。はづかしながら此三年が間。小平次殿とは人しれずあひませしに。此比親方の耳にたちて。堅くせかるれば。あひ見る事はおもひよらず。文の取やりさへたえて。なつかしさもゆかしさも。大方ならぬ思ひなりしが。けふ此家にて狂言あるをさいはひに。傍輩の女郎三人を頼。役人の中へ入れて。樂屋の首尾を見合。ちよつと成共あひまして。思ふ心から跡先のわきまへなく。かゝる手管。さぞにくう思召さん。そも／＼いひかはせし始より。二人共に長う生る所存にあらず。いかやうにも御心次第になされませと。兩人共に思ひ切たる氣色。大盡感じて。是社本戀成べし。男は家業をわきになし。戀にやつるゝ身のしをらしさ。又女郎の心入。身の爲になる事かへりみずに。情は誠ある仕方。彼是やさしう思ふから。此事沙汰なしに。すゑん／＼も逢する才覺して。大盡名代にして。内證は小平次を〇〇入。此首尾揚やも知らぬ事ぞかし。大様なるなくさみ。ちひさい氣からはならぬ事と。知れる人のいへり。

第四 詞角のたゝぬ丸山の口舌

付りのりあひ舟は諸國の噂箱

美君多き都に住ながら。あけ暮渡世のいとなみにくゝられて。花に見飽東山の女狩にも行ず。一生そろばん就にし。寝ても起ても始末の二字を忘れず。よい事しらずにかせぎ通して。次第に貧になる事。是ばかりは不審はれず。花の都も金銀なくてはをかしからず。よしや難波に足をとめて。死ぬる迄縁ぎ見るべしと。三十三の年散々の仕合にて。京を立出伏見へ朝飯時に着て。京橋にてしたゝめし。是より三十石に乗つて行に。さま／＼の旅人。あたご参り。下向揃のゆかたに花に粽をかたしき。今日一日の道のつかひを算用するに。散錢かりておぼえぬといふもをかし。或は江戸飛脚。大坂の米屋らしき男。奈良の具足屋。高山の茶笥師。近江の蚊屋賣。京の小道具賣。山伏。藪醫者。鼠衣着たる出家のそばに。茶屋の二せめく女。鹿島の事ふれ。旅芝居の役者。丹波の百姓。拾人よれば。十國の者孰れも咄しかはりて。當年は世の中てござる。うらが國には大分精出しをいたしましたといへば。大和には猫又が赤子に化て。油をねぶつたとの。いかにも／＼坂田藤十郎は傾城買の名人でござる。とかく念佛さへ申せば極樂へ往に疑ひはない。近比有難い事。今年ほど鯛の高事もござらぬ。此比の咳氣は敗毒散では參らぬ。夕べの蟬蛾の大黒屋の品が肌はむつくりとしたぞや。西瓜と神鳴は差あひぢやとの。大坂の間男は本でござつたかと。思ひ／＼に出るまかせに咄し。聞く程をかく乗相の氣さんじは。おれそれなしに横に寝て。空いびきして隣を聞ば。血氣な男三人旅辨當を開いて酒の最中にて。ひとりがいへるは。雞喰うて酒をのめば雨降に合羽着てさるゝやうなと。いへる詞體に長崎者とおぼえたり。何とぞ是は仕掛次第で。一盃は吞さうなものと。盃をやめて火繩取出し。おむつかしなから火を一つと差出せば。火も進上いたさうず。まづ此間をして下されと。中腕をあてがへば。望む所とむくおきにして。

何方のお盃でござります。お手元見まして。お聞いたさうと罷出ば。三人の男共一度に手を打。其方は茂太夫ではな
 いか扱も久しや。先其姿はどうした事ぞ。國元にては兩親の歎き。御内儀の愁歎大方ならず。あまねく日本の地をた
 づねられぬ所なし。いかなる所存ありて。何方にかくれ居られしぞと。懇にたづぬるほど合點ゆかず。私は左様の者
 てはござりませぬ。生國は都にて。身體しもじれ。大坂へかせぎのため罷下ると。誠を申せど。いかなく三人實に
 うけず。さりとは茂太夫きよくもなし。親達内儀に不足あつて。家出をいたされうとま。竹馬の友だちに。何の恨
 みありて。是ほど迄にはつゝまるゝぞ。其方は長崎の戸村屋徳甫の一子。茂太夫にまがひなし。三年前に菩薩祭見
 物に出られ夫よりかいくれ見えず。陰陽師に考へさせれば。天狗にさそはれ。讃岐の金比羅あたりに。迷ひらるゝよ
 し。人をして尋ねれ共知れず。お袋は其方の事を戀かなしみ。兩眼を啼つぶされ。徳甫はこがれ死に。去秋相果られ
 たり。誠に金銀藏に満て。世に不足なき身をして。何を目當にいづくへにげてはゆかれしぞ。たとへ天狗がさそへば
 とて本心さへ極まれば。魔道へ引入らるゝ物でなし。さりとは愚な男。氣を慥に持替。早く古郷の長崎へかへらるべ
 し。内儀は貞女の道を守り。後夫を求めず。後家をたて。手代共を引まはし。家相續いたされ。昔に増る繁昌。隣
 町に肩をならぶる者なし。ひらさら歸りて後家の心も慰め。親の菩提もとはれかすと。三人詞を揃へて申。扱は人違
 へにまがふ所なしと。して我等を茂太夫とは。いづくに見知有てのたまふといへば。愚な事をいはるゝ。幼少より同
 町にてそだち。片時もあはぬ日なく。兄弟よりは心やすくせし其方を。見忘るべきか。面體物ごし。なり恰好。目の
 上の。痣まで見覚え居る男共に。まだそのつれな事をいふと。少し腹立めれば。成程尤もなり。いかにも我事茂太夫
 にまぎれはなけれど。久しく天狗の給仕をして。朝暮鼻の高い家中に出あひ。人間に交りうとくなつて。いにしへの
 事會て覚え。おのくの名さへ忘るゝほどの仕合。何ぞ天狗道をのがれて古郷へ歸るやうに致すべし。其方立先
 へ着船あらば。母や女共に。爰であうたる咄しをして。よろこばして給るべし。此度一所に歸國したきものなれ共。

天狗に暇も乞はて参らば。又つかまれんもしれず。先は互に息災なる對面うれしと。それより酒をくみかはして。
 つもる物語よい加減に返答うつて。日も西山に傾けば。船は八軒やに着。三人は伏見町に用ありとて。暇乞して。歸
 宅の事を念入て申て別れぬ。かの男寢耳へ茂太夫がはひりし心地して。鷹は八百てんほ長崎へ行て。茂太夫になつて
 様子を見るべしと。幸長崎へ下る船に便船して。こはき風にもあはず。浪しづかにして。心ざす大湊につきて。何か
 なしに。まづ上つて此地の景色を見るに。寶の島とは爰の事なるべし。錦の山白糸の瀧。流れ木の伽羅を筏に組。じ
 やかう犬は和朝の猫より見えわたり。丁字は葉茶の煮がらの如く捨ありきて。金銀取の所。一夜に長者共成べきは
 爰なり。しかも好物の酒事はやりて。たのしみ深き榮花の湊と見めぐり。扱戸村屋の所を聞て。其町を髪おしみなき。
 少し揃はぬ事を申て。大道一ばいになつてありけば。近所より男女出て是を見。やれ戸村屋の茂太夫殿。氣違ひにな
 つてもどられた。天狗がつかみしといひしは。げに誠なるべしと。人あつまりて此沙汰を致しければ。戸村や一家は
 しり出て。よく見る程茂太夫様にまぎれなしと。内儀の満足。手代の喜び。目の見えぬ母迄をどり出られ。無理
 に内へ引こみ。もとより人參澤山成所なれば。正氣にならるゝ様にと。かたはしには獨參湯を煎じかゝる。祈禱坊を
 呼に駈出す。上を下へとかへし。先行水にて身を清めさせ。古茂太夫の衣裳を出し。いやが上にきせて。王質仙より
 歸りて。七世の孫にあふ心地して。大方ならずよろこぶ。表へは知音近づきの衆中。茂太夫歸宅の嘉儀を申に参らる
 る。千秋萬歳。悦の酒事すんで。二三日も態と正氣でない風して。四日めより祈禱の力にて狗獺の見入退しとよい
 加減な事申て。先其夜から。美なる後家を我物にして〇み。昔の事をとへば。天狗にかこつけて氣ねけがして覺えぬ
 と。しらの事は是てすまし。まんまと茂太夫になりきり。次第に奢つきて。丸山の色狂ひ心ざし。出入の素人末社引つ
 れ。あたまから油屋の太夫。山城にかゝつて。とめどもなく通ひ。ある時はせき舟みさを。うきはし木々野。戸山く
 れなる。ばつとした太夫共を一所にまねき能をさせて悦び。さまぐの奢つので。壹年もたぬうちに。金藏壹つ

からにして。今一つの唐物の藏に。手をかける段になつて。誠の茂太夫金比良の杉の茂みよりかへりて。菩薩祭りよ
 り抓まれし段々を申せば。内儀をはじめ手代共肝をつぶし。兩人の茂太夫を兩方へわけて。二人が顔を見るに。さり
 とは。微塵違はず。是影の煩ひ成べし。いづれにても。影の方を見出し。それを失へば此煩ひ治するといへりと。家
 内不殘目金をあてゝ見れど。いづれを影と申がたし。時に誠の茂太夫いへるは。汝我に化て家財よりは。大事の女房
 共をおしはれて自由に致す事間男冥加につくべき奴なり。おのれ茂太夫に究つたらば。親仁より家財請取。去々年天
 狗につかまれし前迄の。年々の勘定をいたして見よ。我等は帳をひかゆる迄もなく。中だめに年々の勘定高をいうて
 見すべし。此高知たものは。おも手代の徳右衛門ならてなし。是を證據に茂太夫を極むべしといへば。手代徳右衛門
 至極いたし。成程此儀然るべしと。似せ茂太夫に算盤をわたせば。終に秤と算盤。手にとつた事がない。傾城狂ひす
 る者は。算用知ては遊びに始末出てをかしからず。誠は我人間の種にあらずして。又人間に遠からぬ物。傾城買とい
 ふ。やくたいたなしのかたまりなり。富貴な家の二代目の若代に。算盤秤むつかしがり。親の異見を。早合點する心に
 入替りて。金銀家藏諸道具迄。物の見事に皆にさする。我通力を見よやとて。忽薬人形となつて。焼印の笠をかたふ
 け。日本の地をはなれて。あつちものとぞなりけり。抑此傾城買は。胎卵濕化の四生の外に。色塊といふ一生よりわ
 き出ると。取揚婆々の申侍りき。此生に取つかれぬ様の大事は。第一家業に精を出し。算盤にうとからず。秤目せゝ
 りて。始末をわきまへ。衣裳好をやめて。大酒をせねば。永代傾城買に取つかるゝ事なく。子々孫々迄繁昌し。永く
 家傳り。大福長者となる事。うたがひあるべからず。目出度く。

傾城色三味線 漢之巻 大尾

寛 濶 役 者 片 氣

寛潤役者片氣 總目錄 色三味線作者

上之卷

第一 牡丹島砂越の酒

のんだり見たりしたい事して七十餘年魂は先金とつて霜月朔日極樂の顔見世に爰を去
事藤十郎

第二 形見の一挺 鼓

手を打て肝をつぶす坂田が病死萬年も置たい壽命長遠若子の髪置乳母が鼻は高か二賃

第三 二挺揃の御駕籠

のせられて太夫が紋日うけあふ男金のひかりで女郎のしなだれかゝる藤屋伊左衛門が身
ぶり

第四 絹幕は冬の野遊

見ぬ男にこがれてのぼる江戸の女郎名残の人形は物いわぬ鴛鴦の池ふかき思ひをはらし
に北山

下之卷

第一 六道の辻茶湯

薄茶は別儀ぞりの浮氣役者樂寢の枕心やすひねさめの提重戀のくちきり

第二 敵討は娘の計案

- 第二 名のりかけて一太刀に打こんでゐるき、役者心底を引わつて見る木挽町のぬれもの
- 第三 一座手を取腰元の綱
- 第四 戀のしるしにたまはる下紐といて見れば女道衆道の堺町おもはくはちがひくきぬき

仕組の外の眞のなみだながる、川はおなじ粹仲間道頓堀に野郎のかくし隠

寛潤役者片氣總目錄終

寛潤役者片氣上之巻

第一 霜月朔日冥途の顔見世一番のりの花芝居

吉田の兼好法師が夜の明るまで。女房どもに。斷いはせてと書しは。むかしも借錢はおそろしき物ぞかし。されども近年の二季の際。京も大坂も。掛乞の宵にしまふて。町々のいさかひもなかりしは。世間くつろぐかといふ。いかなく。そふした事にはあらず。諸商人よく合點して。商をうちばにしかけぬ。又買懸りするも。胸算用すれば。ゆきあたつてさのみはちがひなし。後前かまはず。なるにまかせけるは。芝居の役者心ぞかし。手にさへあれば。一日に千兩も皆にしそふ成物なり。あればをします。なければ人の物をも負て何とも思はず。氣散じに月日をおくりぬ。されば役者の惣本寺。濡事の。開山と稱美せられし。坂田藤十郎六十年以前まだ未熟なる。立役の時分。一年の給金わづか三十五兩取しに。其時は節季仕舞も心やすく。師走の月もはや春の來たる心地にて。臺所には二文四文のよみがらた。座敷にはゆたかに。なげぶしの聲して。かりにもさいふかたげて出入ものなく。五七兩も金をのぼして。心よき春をむかへしに。一とせ大坂荒木與次兵衛座にて。夕霧名残の正月といふ。狂言大當りして。是より世上に。名高く。給金。一年まさりに。八百兩まで取あげしが。高給になるにしたがひ。次第に内證不勝手になること。不斷の榮耀過分なるゆゑと。せちべんなる臺所人お爲をぞんじて。むかし三十五兩取の時。ゆたかなるくらしを。おほしめし出られ。萬事ひかへめになされかしと。役者の内には稀なる男。心一ぱい實を申せば。藤十郎打笑ひ。我今千兩に近き給金をとる事は。此不始末なる心からなり。世に名をしられ。三ヶ津の芝居にて。名人ともいはるゝ者は。大氣にしてこまかなる事を。聞も見もせぬものぞかし。是大丈夫の役者氣といふものと。いよく朝夕むりせんさく。身に

洗濯の小袖を着ず。夜蠟燭のひかりより外。油火といふ物けがにも居間にともさず。不斷の料理に魚鳥なくては飯を喰す。食後に濃茶一ぶくづきだまつて飲み。伽羅をもやして。酒のかんをするなど。向上なるせんさくなり。しかるにちかき比より病つきて。諸藝心のまゝならず。太夫元に断申して役目もしげくつとめず。たゞ月花に氣をやしな。常住座敷に取こもり。しづかに心を。須磨寺の開帳。東山長樂寺にてあるよし。きゝ傳へし敦盛の笛ゆかしくて。つれをもさそはず。たゞひとり。參詣て何心なく歸りさまに。いまだ晝にはまぎれなきに。俄に暮景色になつて。建仁寺町の末。鶴の林といひつたへたる松かげより。黑白の雲村だち來て。我身をとりまき。是はと現の様になりぬ。此雲のうちに唐冠着たる。髭の長き東帯の異人。藤十郎をよびかけ。我は是閻魔王の重手代なるが。近來娑婆に後世願ひおほく。六道の辻かごにつて。極樂へ〜と。六字の名號の關札をもつて。毎日引もきらず死人どもが行によつて。地獄殊の外淋しく。罪人なければ我々が役目も隙にして。錢もうけのあらざるゆゑ。益正月の十六日あそび。又は二季の彼岸を心がけ。さいの川原で芝居をはじめ。黄金の肌付がね。佛の箔をこそげおとして。極樂を夜ぬけにさすべしと。三ヶ津の立役若女形をまねき。櫓を上げてはじめて見しが。おもひの外繁昌して。すこし金もまうけしに。此度地藏菩薩三途川の姥のわたくしがねをかりて。一芝居くはだてられ。中村七三郎。市川團十郎。荻野澤之丞などを。金にあかしてかゝへられ。江戸にて大きにあたりたる。名古屋山三をせられしが。何をかせらるゝ。前方なる佛たちをたらし。方便事して。かる時の地藏がほ。大分の金をかりこみ。つるには損をして。土佛の水あそび。今見るやうなど。心をかしく思ひしに。山三に。七三。伴左衛門に。團十郎。かつらぎに。荻野。名人どもの寄合。わけて不破伴左衛門は。團十郎がお家の道成寺。かねのつかみどりにて。見物は地獄うつしに。めつたな大入。殊に内證では。地藏ぼさつ子供やをせられ。さんづ川のおうばが浮氣な罪人どもを。いきはぎにはいてとらるゝゆゑ。我等手芝居是におされ。修羅の太鼓をたゝきたてゝも。いかな〜一人も入がなく。當年の不仕合。ゑんき玉も

赤い顔して目をむき出して。我をおりたまひ。ぐれん大ぐれんの氷の上をふむやうなあぶなき芝居。借りた物すまざねば。人には畜生道のやうにいはいはれ。内證は劍の山をこゆるごとく。足も地につかずして。もはや氣もぬけ。あほうらせつの木戸のものまで。心ぼそさは燈心で。竹の根をほるおもひ。是ては逆もつゞくまい。名古屋の狂言へさふものは。けいせいかひの元祖坂田藤十郎をかゝへて。夕霧名残の正月をせいで。難煮もくはれぬしばゐじやと。見る目かぐ鼻といふ。粹どもが評議によつて。貴殿をむかひにまゐつた。いふてもはりやいの事なれば。顔見世も此方一番がけに。霜月朔日からはじめ申せば。かならず其節待入。娑婆にて約束御無用々々と。詞をかへしてうせにける。藤十郎夢のさめたる心地にて。あたりを見まはせば。いまだ日影は晝さがり。扱は我壽命も此月かぎり。來月朔日は此世の餞別振舞。死手の門出と觀念し。立歸りて身を行水に清め。それより魚類をたちて。ひたすら後世の。いとなみより他事なし。おしむべし都の名物。名題役者三ヶ津の隨一。霜月朔日の曙の露。きえて名のみは苔の下。十譽一空信士南無阿彌陀佛々々々々々。

第二 若子の髪置乳母が鼻は高いかご賃

傾城の眞と。たまごの四角なるは。なきものと坂田が名言。今は遺物の夕霧名残の霜月朔日。正月増りに祇園の參詣。蟻の如く引もきらず。女乗物ゆきちがひ。若子様の髪置。一代一世のうばが鼻。天狗の媒鳥ともいふべく。高々とのり物かきあげさせ。兩はたにおさし抱守。こしもと小坊主。跡にさがりて二番ばへの手代が。供につきて祇園の町幅。せまきほど一ぱいになりてねりありく。犬子の朱を額におす。美の宮の前なる祖母も。せんだく布子をけふのはれに。着かざり。うなぎ綿もあたらしく見えて。末廣もちし幼稚を見ては笑ひかけて。十二燈をとる事髪かたく。壽命長遠の印といへるを聞て。成人の後いかなる事をか仕出すべき。末もしれぬ子どもより。世にをしがる藤十郎

が。今三年生のびる事ならば。一步一つやなどはをしまぬ事じやと。無理なるねがひをするもをか。親々の家々には。惣領の太郎松が髪置とて。一家一門出入の者どもまねきよせ。祝儀の振舞内儀の悦。不斷のわるひすらこぎには似もせず。下々まで心にをつけて。くへの飴のと世話やかるゝは。是みな子のかはゆさのあまりぞかし。けふばかりは云ひたい事いひて。りよくわいも構はず。お子様のひかりで。乳母はのりながら乗物お居間へかきあげさせ。扱太郎松様のお祝儀申納めて。私にはおいとまを下されませと。涙目にもちてけうとく申出せば。内儀大かたならず肝をつぶされ。外のものか云わふとも。そなたがなだめておかるゝ筈なるに。何が目に見え暇のもらい時こそあるべきに。此祝儀を見かけて。近頃不出來ないひぶん。供にいたものども。何ぞうばの虫に。さはる事などいひはせぬか。ひごろ口のわるい十兵衛を。つけてやらしやるなと云ふに。てつきり乳母が鼻がたかうなつたなどと。そしりがなしたであらふ。あれ等が何を云はふとまゝ。此子が爲をおもやるなら。いかほど腹のたつ事があらうと。けふ計は機嫌をわるふしやらぬ筈。はおれが手を合すと。内儀のわび事さりとほもつたいなし。さら／＼述懐不足ありておいとま申うくるにあらず。私は是からすぐに尼になります。をしい事致しましたと。すゝりあげて泣出せば。皆々ふしんをなして様子を聞けば。たゞいま祇園町で云ふて通りしを。乗物のうちから聞きませしが。坂田藤十郎殿今朝かた死なれました。もはや浮世に女をたてゝ居て。おもしろふござんせぬと泣けるにぞ。内儀をはじめお物師。こしもと茶の間めしたき迄も。女の形あるほどのものは。是を聞いてそれは誠か。こりやおうば殿のが道理じやと。はゞからずして親の死目よりは。涙ををしまざりき。旦那は是をしらず。一門を祝儀にまねく心づかい。手水鉢に水を入させ。蔭石のうへに散敷。木の葉をひろはせ。たばこ盆のさうぢ。きせるをさらへさせ。掛物はせがれが壽命萬年をいはひ。探幽の松に鶴の繪。はおやかくべしと。内儀にとはるれば。俄に頭痛がするよしにて引こみ。太郎松が事より。藤十郎はいとしやとのしのび泣。いづれ格氣ぶかき男の。惣じて狂言づくしの芝居見せぬは。ことわりぞかし。まかなひ

するりに。吸物椀の置所とへば。風呂屋町じやと云ふ。下女のすぎに。飯釜の下がくすぶると。料理人がしかれば。くすぶるはずでござる。七條でけふりにするとや。あたり男を灰になす事と。火ばしもちながら火せゝりして居る。お物師に奥様のあがる汗のかけんは。此くらゐがよいか吸て見さしやれと。すへのかさにもつてさし出せば。五日があひだは精進でござる。魚類のこしらへはなされな。迎も奥様のまゐらぬぞと。見るほどの女共目のうへをはらして。物いひつれば。ふしやう／＼にして。立居に念佛申す。是はたゞ事にあらずと。此お家で頭のはげたる手代が氣をつけ。下々の男どもがひそ／＼咄すを聞けば。藤十郎が病死の沙汰。扱は是ゆゑ女ども。物が手につかぬ事よとがてんし。どうぞ残らず機嫌ようさせて。太郎松様御祝儀。めでたう祝ひおさめたしと。しあんしだして。傍輩の手代。一兩人にさゝやきしめしあはせて。おなごどものきくやうに。なんと五兵衛。坂田藤十郎が來春手しはめてする。あたりをとらふとて。今朝しんだとの沙汰さすは。もはや古手じや。去年山下がいひふらして。二の替りに當てしまふた跡へん。おなじもやうで。どうぞかはつた手もあらうに。至らぬ我等が智慧にさへ。いかう前方な思案のやうにおもふといへば。それでよめたはけふ晝前に。藤十郎笠かたぶけて。祇園町はとほらずして。繩手から裏ごしに山伏の宮のまへへ出て。ちおんるんの山越に小宮の方へ廻りて祇園へ参りしが。ぎをん町にわけのたゝぬ事かなしとおき。裏町をとほるか。よもや坂田がそんな事はあるまいとおもひしが。こなたの咄でなぞがといた。迎も死んだと世間へ沙汰をさせるからは。祇園へも夜参りそんなものをと。語あふをおなごども聞耳たてゝ。かほの色をなほし。五兵衛殿たしかにけふ藤十郎を見さしやつたかと。根をおしてとへば。見ぬものを見たといふものか。舞臺で見るとりそばでは。よほど顔に皺も見ゆる。いかさまあれは八十でもあらふか。年のよらぬ男じや。來年の春は額に紙をはつて。幽霊で傾城かひをせふといふ。めづらしきおもひつきであらうが。正月そう／＼からわるいおもひつきじやと云へば。お物師こしもと下女までも。はじめて笑をつくり。五兵衛どのとくいふては下されいで。いくせのおもひを

しました。おうばどの二階に寝てじや。いふてよろこばさつしやれ。わしは奥様にさう申あげふと。おくへ参りてかくと申せば。やあそれは誠か。五兵衛が目ちがひてはないか。念入てきやつたか。山下が去年のやうな事があれば。うそであるまいものでなし。まづうれしいと枕をあげ。太郎松には。松竹の着物をきかへさせたらよからうと。藤十郎が死なぬと聞きて。我子にはじめて氣のつくは。よくの思入と。ていしゆもにが笑して。祝儀をしまひぬ。

第三 女郎のしなだれかゝる藤屋伊左衛門が身振

鯉に胡椒夕霧にだい／＼。若いむす子に堅い親仁といへども。若い時から色狂にうとく。世渡にかしこき。時代ちがひの親仁は。かたき事はくだるごとくなれど。今時の若いものが。當座まかないな。うそつく智恵には。およばず。透間を見て小勝が最よし。たゞだましにくきは粹なるおやぢ。四も五もくはぬにはこまりはて。是には此方からかさをかけてもつてまるれば。却て毒藥變じて。よい藥まはり氣をやむるものぞかし。たとへば夜半に歸つた時。親仁待かけ叱らうとおもふ口あけに。先何時じやとひかけられ。物なれぬむす子は。すこしも罪をかるめたりて。四つ時分でござりませうと。一とき前を申せば。今夜が四つかもはや夜半じや。何事も其心から長あそびをいたす事と。是より叱出してとめどはなかりき。又物なれしむす子めは。親父が何時じやとひかければ。扱こそと夜半時分でも。もはや八つでもござりませふか。殊の外夜がふけましたに。まだお休みなされませぬかと。かさをかけて申せば。おやぢ叱らうとおもふ初口のくめんがちがへば。いやまだ入つまでにはなるまい。明日は用がある隣分とほから起よと。つゝみそれなりけりに奥へはいらる。是を近年夜歩行のむす子が。仕出し返答と云へり。爰に姿も心もおなじ町に。大文字屋源吉。生野屋甚六とて。遣ひざかりのむすこ。互にきびしき親の目をしのびて。毎日の島原

ぐるひ。今日も花菱屋の大座敷に。なじみの大夫をまねき。兩大座敷をしめて。末社まじりのみだれ酒。ひいてうたふて此面白さ。罪もむくいもこはい親仁が事も。わすれはて。むしやうにさわぐ中に。生野屋の甚六まだ酒がたらぬかして。末社の伊左衛門が。女房の尻について。さゝやくに目をつけたして。これ大夫。梅鉢はそなたの紋ではないが。何もの紋ぞととへば。されば今までの紋をかへて。かはゆらしいに是にせふとおもふて。けふはじめて着初の小袖。なんと似合ましたかと云へば。いや／＼をふくろめたがうれても。豫々承つてゐる事あり。是は芝居の坂田藤十郎が定紋。役者におもわくなされふより。地紙の中に桐のとうをつけて。一步や小判におもはるゝやうになされど。かはつた口説を仕かくれば。あかごろおまへには似合ぬ。初心な事を仰られます。梅鉢坂田にかぎつて付る紋で。外のものはつけませぬが。鶴の丸をつけたら朝比奈に。おもはくてかなあらふと仰らるべし。ほんにをかしい自由に紋もつけかへられぬ。人のつけぬ雪踏の紋を付たらば。江戸の段左衛門に。ほれているかとうたがはるべし。まつと女郎のめいわくがる事を。おぼしめしつけられて。くぜつをしたまへと云へば。さりとは鼻もうごかさずに。あのうそのにくさ。我等もいくの屋甚六とて。いふてはないが此里で名をしられ。十四五年もさきを。見ぬいてゐる男を。おくちさきでつかはふとなされたら。あてのつちがちがふべし。伊左衛門是へ罷出て。さいぜん囁きししなを。まつすぐに申せとわけもなふ腹立出せば。是は旦那いきすぢはつて。何事を仰らるゝ。お世話やかるゝまでもなく様子にはひとり知れます事。まづこなたへと甚六を勝手へともなひ。伊左衛門申すは。なる程御するりやうの通り。大夫様は藤十郎殿に日頃打こみ。誠の事はなく互に文の取かはし。心計のねんごろ。坂田死去の節錢のいらぬもので今までの情を返辨。数々のよい衣裳は。親類下々弟子かゝへの子にとらして外へちらさず。一重紙子の役にたゝぬを。大夫様へ形見とておくられる。亡日拙者持来りて。さいぜんその事を通じましたが。此古紙子をめしてやぶれ編笠をかたづけ。藤屋伊左衛門がおちぶれたてい。そうして只今座敷へお出なされてごらうじませ。たゞ今眞顔であらうそ

はれしとはちがひ。たちまち泣出してひとりと性體をあらはさるゝ事。是一慰と申せば。できたゞにくさもにくし。藤十郎が身ぶりうつつして。ときめんに恥あたへん。その古紙子出せとあれば。それは旦那のわるい了管。女郎様にはちあたへて何の取得がござりますぞ。そのまゝ藤十郎にならせられての床入。女郎のもてなしかくべつ。世界は第一のお徳といふもの。惣じて女郎は氣に入らぬ男には。たとへ首尾してもそんな事はけもない事。たゞ底真からおもわくの男には。おもひの外の床のしゆび。たちまち野干の姿をあらはし。枕をはずして狂はるゝ所。金づくてもおよばぬ事といへば。是は汝がいふごとく内證に徳ゆくせんさく。なるほど坂田になつて氣に入るがよいはづじやと。着物ぬぎすて素肌。くだんの一重紙子を着し。古編笠にひつかぶりて座敷へによつと出るを。太夫ひと目見て。此世にありし舞臺の俳なつかしやと泣出して。湯茶ものまであれほどに涙の種もあるものかとおもふほどのなげき。一座の人々けうとがりて。源吉は太夫と共に床にいれば。伊左衛門さし出。太夫様藤屋の伊左衛門さまお出。久しぶりじやおあひなされませ。我等は吉田屋喜左衛門となつて。お床入をとりもつ所と。一間をしつらひおふたりを入申せば。太夫の悦び紙子ながらに抱てねて。我心には藤十郎にあふむかしをおもひ出してたのしみける。是をおもへば坂田が身がはりになつて。けいせい買に似たり。甚六あいはじめて太夫が今夜のもてなし。前後におぼえぬ最中に四つ門うつと觸れば。名残をしきは親にかゝり。母ばかりにしてと思ふも叶はぬうき世なり。晝より若やきて別に年をよらしぬ。源吉甚六たち酒に正體もなふ酔ふて。未社おろせにかごの中へいだき入れ。三枚肩をならべていつものごとく。端の茶やをたゞきて。旦那只今おかへりと云へば。ていしゆ霜夜に裸とび出。おさだまりの素湯奉れど。兩大盡ながら夢中のごとく酔て何の詞もなければ。とかくは内かたのおしゆび大事。一刻もはやくおかへりが肝要。わか衆精出してお供さつしやれ。次々にむつかしい親仁様をふみころして。あすから自由にお出なさるゝやうにと。大笑して一さんに駕籠をはやめて御が方へつきけれど。前後も知らず二人の大盡酔たまひて人心地もなければ。此まゝ御

宿の御門前までおくり奉れと。かごに乗て家々の門口におろし。表の戸ひそかにたゞきて家來にかくと云へば。心得て音せぬやうにしづかに大戸をひらき。態とくらがりにしてかごをかき入らせ。かごの者をかへしひそかに跡を留めて。是内かたでござるぞ。こわい親父様が生きてござるぞと云ふ聲。沈酔のうちにも耳にこたへておそろしく。母の心得にて寢所をさせておき。めし合の戸をあけかけておかるゝを。酒の酔本性わすれず。息づかひ迄静にさし足の時身をふるはせ。おやぢが躰のせぬ時胸をいため。いつものまるゝ寢酒の酔が醒なと。松尾の神に心願をかけ。明日は遠から愛宕へ参られがなと。我心から物おもふ身やさぞ養子親にかゝる人はと。餘所の無常まで観じて。のどがかわけど堪忍して夜着を着るよりはやく。心ゆるみて一寢入に朝飯時分までは。かいてゆくも知らぬぞかし。おやぢはとくより起て氷を砕きて手水をつかい。萬事の世話をやいて。もはや源吉を起せといはるゝ聲をきいて。母のおやはやしからせまじきと丁稚をまねき。はやくおこせ旦那殿のきげんがわるうなれば。やかましいと寢所へやらるれば。小者ゆきて申々源吉様旦那様のおしかりなされます。おひなりませと顔を見てきもをつぶし。臺所へかけいでおふくろに向ひて。申源吉様の寢所には。此町の生野屋甚六様が寝てござりますと申せば。是はがてんのゆかぬ事と。おやぢもろともに母もゆきて見らるゝに。小者がいふごとく源吉はあずして。甚六一重紙子のやぶれたるを着ながら。よねんもなく寝てゐれば。二親肝をつぶし是は甚六。金がなつかひて親甚入に勘當せられ。紙子一重になりてゆき所のないを。悴源吉がねんごろのたのもしづくにて。かくまへおきしにうたがひなし。甚入こらしめの爲に追出されしを断もせず。此方にかくしおくは。性のわるい者の肩をもつやうなものなれば。甚入かたへ我等おちきにゆきて。此段をことわるべし。元來子供の悪性は。親々の不断あまきゆゑなれば。其子ががにはあらず。皆おやのそだてからなり。身どもが悴源吉などは平生きびしく。行儀に仕立てるゆゑを以て。けがにも悪所へゆかふかともせぬと。自慢いはるる舌もひきいられぬ所へ。酒氣てたはいもなふ寝て居る源吉をかごにのせ。生野屋甚入ついて来り。是々むすこが

替りましたと。紙子着てゐる甚六と替に來て。互に子供を取かへてかへりぬ。

第四 名残の人形は物いはぬ鴛鴦の池

柳櫻も。年よりたる人の姿を見るごとく。冬山のさびしさ。東山をすぢかいにして。北山の在郷道を行に。松の嵐の音のみ。春は爰らも人の山なるべきに。おりふしは京のあそびずきも。よもや出まじとおもひしに。麓に遠き森の陰に幕打まはして。今は何か見る事もなきに。酒に亂れての小歌。きけば女の聲もして。すこし浦山敷心になりぬ。猶もおくの松の木の中に。淺黄に紅葉染こみたる絹幕の見えて。琴の音かすかに耳おどろかし。扱も都なればこそ。霜月の末つかたに。野遊山の幕を所々に見る事。他所の國にはない事ぞと。冬枯の心もおのづからはんなりとして。岡の細道をはるかに。龍安寺の池の端につきて。又おもしろし。岸の枯芝の上に甃しきならべ。此池の鴛鴦の妻あらそひを見る事。近年はやりて毎日の人絶る事なし。是も京の冬のひとつの詠とかたりけるうちに。汀なる草庵より法師立出て。手ぢかく餌をまきてまねかれければ。かぎりもなくおし鳥爰にあつまりて。おのがさまのたはふれ。水は紅にいろどり浪に白玉をちらし。夕日の移り。稻妻を久しく見るがごとく。晝とも夜とも。わきまへのなき遊興。おなじ遊山とはいひながら。若後家の鴛鴦のたはふれを見に來らるゝは。男伊達の喧嘩見にゆくやうなもので。事を好むに似たり。惣じて尼にもならず髪をのこして。淺黄ちりめんの帽子の下に。切た髪先を見せかけるはくせ者なり。されば亭主にはなれてより。世の色咄に心うつし。おのづから夫の事は外になし。義理一べんの念佛香。花も人の見るため。三十五日のたつをとけしなく。忍しのびの薄白粉。髪は品よく油にしたしながら茶筌にそへ。下着はいろをふくませ。上には無紋の小袖。目にたゞずして。猶心にくきものぞかし。されば世の中に化ものと。後家斷すます女はないもの。爰に上京の歴々人の若後家。都の中は物やかましく。浮世の事の耳にあれば。後の

世をいのる障とて。此邊にきれいな草庵をむすび。表むきはかやが軒端にして。奥には八疊敷二間の座敷。わかふにはなれて。六疊敷を厚壁にこしらへられしは。何せらるゝ所かも知らずおくゆかし。しづかに心をすまして。朝暮佛壇にむかはるゝは。きどくの事とおもへば佛はなくて。坂田藤十郎がけいせい買の。身振をうつせし人形なり。いかなる上手の作りけるぞ。さながら生の移し。うわがれたる聲にて。かはいやゝと。其まゝ詞を出すかとおもはる程うつれり。是にむかふてさまのたはふれ。夜は床の中にて○○○○に。此人形汗をかきていたることくに。しばらくうごく事のふしぎ。知れる人に様子をとへば。此後家御は立賣にかくれなき。ひとつまへのお花さまとて。十九から旦那殿にわかれたまひ。男子一人を手代にわたし。萬事をさばかせ。おぬしは芝居へばかりござつて。あけくれ藤十郎に心をつくし。いろ／＼文してくゞき給ひ。やう／＼木屋町の裏座敷にて。夢ばかりの對面。後は役目のさはりとあはざりしを。なほ／＼こがれさせ給ひ。此人形をつくらせ愛したまふ事。今年で八年になれり。久しく寵愛せらるゝその執念や通じけん。ちかき頃より身動きせり。されば此頃坂田氏死去ありてより。なほなほ手足をはたらかせ生たる人のごとく。たゞ物いはず笑はずと是のみなげかるゝ。今日は鴛鴦の妻ごいを見せんとて。此池邊にかの人形をともし給ふと語りぬ。其隣に紫毛氈しかせて寛潤なる女。髪は兵庫わげにして。雪より白き素顔。すこきほどうつくしきが。下に緋緋子上着は白ちりめん。祇園會のやまほこを墨繪にかゝせ。所々を泥にてくまどり。うはがへの妻に長刀鉾。うしろの尻もとに船鉾をかきしは。心ありといへば若衆ならばきこえたが。女の尻に船鉾は。のり所がちがふたと笑ひながら見るに。男はたしかに江戸の町人と見えて。いかつがましく武士めいたる風情。様子をきくに女は吉原の太夫職。花紫といへる女郎。男は材木町の森といふ大盡。ちかき頃廓を出し。我宿の詠物とせしが。上がたに坂田藤十郎といふ。三ヶ津にならびなきけいせいかひの名人といふ事。關東までもかくれなく。又外にまねする役者もあらざるよし。いかなる男ぞ一目見たきと。花むらさきが久しきねがひ。さほどにお

もひたまはゞ。來春伊勢へかけて京内まゐりの次でと云ひしを。人の命は明日をもしらず。來年の事をいへば鬼が笑ふとやら。たゞ一日も堅固なる中に。はやく見せてたまへとの望。もだしがたくて女切手を申請。十月廿日に江戸をたちて。霜月朔日の晝前に。智恩院の古門前町につきて。其日は休息して明日先東山をと。見物所の相談。暮過から櫓太鼓たゞきたてるは。都には夜も芝居があるかと。出入の肴屋に尋ねば。あれは都万大夫明日より顔見世を仕る仕組の太鼓。お慰に御見物にお出なさるべし。立役は久々にて京都へ上し。小佐川十右衛門。はお江戸にて御覽なされぬ名人。女形は各々様の近い頃迄。御らうじました嵐喜世三郎。其外歌流。四郎十郎。道外の名物。金子吉左。上手どもの寄合芝居。顔見世の座つき。是又一興と勸申せば。何と坂田藤十郎が出る芝居は。未だ顔見せずやと問へば。さてこそ大事の事をお尋ねあれ。その藤十郎は三國隨一の名人。古今未曾有の傾城買。くぜつ事の開山。今朝はかなくなられて明日七條へ葬禮と申す。そんなてんがう云はずと。坂田はいつからするぞ。同くは其傾城買をせよかし。其藝ぶりを見にばかり。百三十里の海山を越て來にとあれば。もはや此世にては叶はぬおねがひ。藤十郎評判にはたゞ一べんのお念佛々々と申す程に。花紫大かたならぬおもひ。はる／＼のぼりしかいこそなけれと。涙ぐむほどに。何とぞ其男に。佛の似たる役者もがな。せめてそれなりとも見せて思ひばらしにと。森大盡たのまれれば。肴屋うけたまはつて。大和屋甚左衛門といふ若手の役者の藝ぶり。坂田か心になひたるにや。一とせ狂言に事よせ。大事の紙子をゆづられしが。是もはな／＼しき口舌を見ねば。藤十郎替にも云ひがたし。さいわひ龍安寺邊にてお花後家とて。藤十郎一刀三禮の姿人形魂迄をこめおき。朝暮是を愛せらるゝ若後家あり。この方へいざない申し。せめて名残の人形をおめにかけんと申せば。それなりとも見て日頃のねがひをはらすべしと。此處まで魚やが案内で來られしが。是にかぎらず。さいぜん野遊山と見えし絹幕打たる女中も。皆此人形をきゝつたへに。坂田が佛をのぞみにばかり來りあつまる女。小袖をかざり風情をつくり。東山の花の頃を見るごとく。すげがさぬりがさ

後家帽子。絹被きてくるもあり。又は女乗物打つゞき。開帳まゐりのやうに女の山をなして。池の邊は錦をしきたるごとく。藤十郎様の御影ををがませて下さんせと。群集する事おびたゞし。時にお花後家人形を臺にのせ。しづかに持出。かく大勢一度に込込入給ひては。大事の人形に疵もやつかん。ひとりづつ是へ來て見たまへとあれば。先一番に十八九なる女。脇明けながらはぐるをつけて。男持たるにはうたがひもなき風義なりしが。此人形を一め見てさめざめとないて。旅くしぼこより刺刀取出し。しめつけ島田に。ふき鬢の黒髪。もとゆひぎはより思ひ切たる風情。常の氣とは沙汰しがたし。其次は廿六七なる女。風俗は國妻女ものに。そなはりしすがりと見えしが。今織出しの紅じまの下着に。紫鹿子中着を正風にして。上は地なしの菊揃の小袖。帯は中幅の大内時代の花うさぎの金入。塗笠にめつきのくはんも。しめやかにして見よし。やとい鼻のやうなる供ひとりつれて。人形のそばちかくより。いつぞは／＼とようだまして。一度の枕物語もせず。佛になつてしまはれて。何のたのしみがあるぞ。あのうそつきがと。泪一筆こぼさず。にらみつけてかへりぬ。其跡から四十ばかりの比丘尼。白無垢の三つ重。淺黄ちりめんのごき帯前にむすび。すそほら／＼と緋りんずの内衣見えわたり。ほつそりとして瘦じゝなるが。ふところより延の紙二折出して。紙のありだけ泪をこぼし。去上つがたの。稀なる牡丹の根を申請してくれたらば。いかにも心にしたがふべしと。實事師の一言を誠とおもひ。なりにくい一本を命にかへて所望し。あまつさへ伏見から砂まで取よせ。お氣に入やうにして進せしに。尼をおとせば互に後の世でわるいと。よいかげんなへらをつかひ。誠のちぎりがなにと。たゞ戀は心ざしひとつじやと上手をいひて。あはせぬをいかふ恨におもひました。今しなれてから思合せば。本に水が大切にその始末じやと思へば。おいとしたい事もせず。たうとい所へござつて。さりとは残おほい事やと。しみ／＼とないてかへりぬ。つゞいて其さまいやしき八十にちかき祖母。杖にすがりてよろほい來り。是藤十郎殿こなたを見るもうらめしいと。齒もないはくきをくいしばれば。そばにいる女どもをかしがりて。年にこそよれこなた

も坂田殿にほれてかと云へば。いや老にほれました。わらはがむす子めならぬ世帯をすてゝおいて。不^ふ断^{だん}し^ばる^へつ^かつて^ゐて。藤十郎が一^へ重^{かみ}紙^こ子の^やつ^しは。又あつた物ではない。あのやうにして見たいと。朝夕こなたを浦山^{うらやま}がつて。その念^{ねん}がといて今は素^す紙^{かみ}子^こ一^くわ^んで。謠^{うた}う^たふ^てひ^とつ^かみ^づ貫^{くわ}ふ^て。此^こ祖^そ母^ぼに^不自^じ由^{ゆう}な^めを^さし^をる^も。皆^{みな}あり^さま^ゆゑ^じや。おなじ事^{こと}なら^けい^せい^買の^大盡^{じん}に^なつ^となり^おら^いて。紙^{かみ}子^この^やつ^しは^見る^もう^たて^いと。涙^{なみだ}を^なが^して^かへ^りし^は。か^くべ^つな^るな^げき。何^{なに}か^につ^けて^坂田^たが^噂は。萬^ま年^{ねん}も^つき^まじ^と。都^{みやこ}の^男女^おし^みて^なげ^きぬ。

寛潤役者片氣 上之巻 終

寛潤役者片質 下之巻

役者大和詞

- (イ) ひつならび とはねん
ごろなる事をいふ。是は
がくやにてとなりづから
ひつならびてふだん出會
心やすくする故にねんこ
るなるをかくはいへり
- (ロ) 石仲間 とはにつめの
役者をいへり。三十石と
云ふも同前也
- (ハ) はやし とは三味せん
たいこふを小歌うたいす
べてはやし方のぶんをい
へり
- (ニ) 杉本坊 とは九八やら
ん
- (ホ) 海坊主 とは傳十とや
らん
- (ヘ) 青侍 とは勘七とやら
ん
- (ト) みのむし とは又四と
やらん

第一 役者樂枕心やすひねぎめの提重

去^さ者^{もの}は^日々^に疎^そし^とい^へど。坂^さ田^た計^{けい}は^月日^のた^つほ^ど。役^{やく}者^{もの}仲^な間^まに^申出^まし^て涙^{なみだ}を^こぼ^しぬ。増^まて^引廻^{まわ}し^あづ^かり^て。今^{いま}一枚^{まい}看^{かん}板^{ばん}に^のせ^らる^も藤^{とう}十^{じゅう}郎^{らう}殿^{どの}の^お蔭^{かげ}と。櫃^び井^いの^藝子^{ぎし}四^し五^ご人^{にん}か^るい^ねぎ^めに^精進^{しんじん}看^{かん}い^れさ^せ。く^ふた^どう^しの^石仲^な間^ま。心^{こゝろ}よ^い囉^わ子^しの^者。ゑ^りぬ^いて。三^{さん}人^{にん}か^れこ^れ八^{はち}人^{にん}連^{れん}に^て。藤^{とう}十^{じゅう}郎^{らう}が^墓に^まう^て。日^{にっ}頃^{けい}奇^き麗^{れい}す^きした^まふ^とて。水^{みづ}向^{むか}の^石鉢^{はち}さ^らに^てみ^がき。水^{みづ}い^くた^びか^かへ^て。心^{こゝろ}し^づか^に念^{ねん}佛^{ぶつ}題^{だい}目^めん^く心^{こゝろ}々^々の^手向^{むか}。そ^れよ^りか^へる^さに。愛^{あい}宕^{たう}の^觀音^{おん}の^邊に^知れる^道心^{だうしん}者^{もの}の^方へ^たづ^ねゆ^けば。よ^くこ^そお^出。わ^れら^はは^只今^{いま}非^ひ時^じに^まゐ^る。ゆ^るり^と遊^{あそ}び^てか^へり^たま^へ。奈^な良^ら茶^{ちや}に^ても^まゐ^らば。そ^れな^る小^こ引^ひ出^だに^黒大^{くわい}豆^{まめ}大^{たい}角^{かく}豆^{まめ}近^{ちか}江^えか^らも^らふ^た日^ひ野^の茶^{ちや}も^ある。御^ご歸^きり^の時^{とき}分^{ぶん}は^表に^錠お^ろした^まへ^と。客^{きやく}に^錠錠^{じやう}わ^たし^て出^でて^ゆく。此^{こゝろ}氣^き散^{さん}じ^さ氣^きが^はら^いて^よい^は。先^まなら^茶しか^けよ^と米^{こめ}か^らと^あけ^て見^みれ^ば。白^{しろ}米^{こめ}の^上に^大の^字を^かい^てお^かれ^しは。留^る主^{しゅ}の^中斷^{ちゆうだん}なし^に米^{こめ}と^らせ^ぬ印^{いん}と^見え^{たり}。さ^りと^は此^{こゝろ}亭^{てい}坊^{ぼう}の^正直^{しやうぢき}な^る心^{こゝろ}入^いを^かし。ぬ^すむ^程の^{もの}。米^{こめ}取^とり^てか^ら跡^{あと}に^又大^{たい}の^字か^いて^おく^とい^ふ。心^{こゝろ}の^つか^ぬ愚^{おろ}か^{なる}所^{ところ}が。一^{いっ}し^ほし^ゆし^{やう}な^と。お^のく^感ず^る中^{ちゆう}に。杉^{すぎ}本^{ほん}坊^{ぼう}が^高き^鼻に^て嗅^かい^出し。爰^{こゝ}に^鱈がある^と常^{じやう}香^{かう}盤^{ばん}の^下を^あけ^れば。鯡^{にしん}と^鱈節^{せつ}一^{いつ}虎^こが^喰物^{くわくぶつ}と^礼を^つけ^られ^しは。是^{こゝ}猶^{なほ}殊^{しゆ}勝^{しょう}に^見え^侍る。海^{かい}坊^{ぼう}主^{しゅ}青^{せい}侍^じ簞^{たん}虫^{ちゆう}な^どい^ふ可^か笑^{せう}男^{なん}が。う^そく^庵中^{ちゆう}を

(チ)毛そろへとは金太夫事也此男せつきやうを唱へうしなひあたまたの禿たからおもひつきて毛ぞろへといふ上るりをかたるゆゑに名づけて金太毛ぞろへといへり

(リ)けんとはせんしやうばり向上に見せかける類の事なり

(ヌ)はつきり丸とは宇源次たしなみからなつとらにとらがらしを加へちいさく丸めて金こかしにして酒のよひがさめる藥とて用ひられしよし

(ル)手せんとはじまんする事也

(ヲ)まぢかねとは大坂清水うかむせ四郎右衛門方に菊のつぼみを醬油にてさつと煮てほいろにかけまぢかねと名をつけてうかむ瀬で飲むものよさかなに出せり

(ワ)千兩くれけるとはほらびする詞なり

(カ)柿の木とはでかしたてして却つて不興なる事をいへり

むかし柏木のゑもんといへる美君井久座敷にて酒しみて面白かりし時甚之

まはりて。さりとは氣さんじに何氣もない所じやと云へば。爰に毛そろへの男こそあれと。きんかあたたまをふつて。のまぬさきから看上るりもをかしく。もたせのねざめひらきて。さし樽のかんをさせ。けふ一日は樂あそび。しかし魚類がなくて氣のつまるせんさくと云へば。ねざめもたせし今日のていしゆ。げんなる若衆にてめづらしい看是にあり。名をさして見たまへと。外郎ほどなる黒丸き物を出す。是はとくふて見るに。にがみあつてあぢはひよく。一頃宇源治印籠にたしなみ。はつきり丸と名づけて。酒宴の座敷で大盡の氣を取りし看より。かくべつよい物。かゝる物をばいまだしら玉。何ぞと問へば大事の物じやと手せんする。其中に。ちかい頃道頓堀からのぼりし美君。舌にのせてしばらくあぢはひ。是は大坂の浮瀬屋四郎右衛門が。祕藏のまぢかねといふさかなではないかと云ふ。いかにもく。さすが難波のよしあし御ぞんじの御かたと。千兩くれける萬に出過たる事に。あぢにしまいのつくは稀なり。何事も柿の木の下手な亭主ぶりと心の中で笑ひぬ。かならずこんな人は。舞臺の藝もちぎんなるものと。悪口仲間どもが寄て。いつぞはしよげにせうと。うなづきあふて其座はざつとあさぎにして。ぼくりうもきてい。くわんりうさと。腕にくちあてをかしき音して。しまるがつかぬくと。手うちたゞきわめきながらも。奈良茶のあばれ喰して。小皿に入し。焼味噌に。灸をする。是が江州伊吹山の諸れつの門を披き。きんたうの山やうくの瀧。さんか山のいたゞきにしげもと兄弟の人々が。手合のもぐさ百よりひとつと。永々しくつらねを申せば。去若衆物知つたがほして。味噌に灸すゆるは。疫病の呪ではござらぬかといへば。それは大きなおぼえちがひ。味噌に灸は若衆さま方の痔のまじないと。是を今

介背梅を折折にして是さかなと云はれし一鉢興ありと亭主ほうびせられしを柏木羨ましくおもひ僅につぎ木の柿の木にふたついぼみ出しをへしおり是看といはれしを井久見てひざうの木なれば以ての外不興せられぬをせより出過たる事を柿の木といへりと弘法大師の釋してのたまふ

(ヨ)ちぎんとは藝のこまへなるをいふ

(タ)しよげとは大ぜいよりなぶり迷惑がらす事

(レ)ぼくりうもきていとは何の事かそれをいふ人も知らず定めて是等白うるりのたぐひにて役者三ヶの大事の其ひとつにや(ソ)かいな口あてとは童のする尻をこく眞似なり是よりきはぎの一鉢口傳あるべし

(ツ)諸れつの門とはさんか山といふ非人のたは言なり

日の惣たち。表に鏡おろして爰を立出。七月の千日参りに。人の山なす六道といふ。小野の篁の寺に入て。寒き時暑氣の時節を思出せど。北風はげしくみぞれまじりに何とやら。物すごき石佛の前をとほり。迎鐘とて。祖母の錢を。つかみ取にする釣鐘も冬がれ。篁の是より六道へかよはれしといふ所に。月代のすりのこしほどぶんだつて。印の枯芝しゆせうに氣味わろく。こんな所へ小長ふあれば。かならず來世風をうつる物じやと。酒のたらぬ役者が申出して。あたりを見れば伴ひし人々は。何時の間にはづせしやら。たゞ一人とりのこされのやうに跡にとゞまり。是はきみがわるいはと走り出んとする時に。染川十郎兵衛にゆきあひ。是は久しやお前は過し年。大坂で病死あそばせしと聞きませしが。何とて爰にござあると問ふに。そんな事はしらべぬもの。今日は中村七三郎ていしゆで。坂田藤十郎其外一人へ。かこひて茶をしんせらるゝやくそくに。我等は勝手取手に參るさいはひの折なれば。こなたへ來りてあそびたまへと。むりに引つれてゑんま堂の片蔭にゆけば。日頃目はなれぬ家づくり。舞臺ごしらへの輕い外門あつて。内の待合に正客と見えて。坂田藤十郎つゞいて。二代目の嵐三右衛門。市川團十郎。萩野澤之丞。以上四人めんくにはさみ箱あけて。上下替足袋の身拵かとおもへば。天人をどりのやうな金入の衣裳出して着替。いづれも娑婆にてはかまの肩絹きるやうに。輪後光をうしろにかけ。ちいさき蓮華を足にはき。かくと案内申せば。ていしゆ七三郎わびたる物すきにて。光後光の金箔の所々はげたるを。うくろにかけてむかひに出。さしたる靈供もなきに各そろふての御來迎。ありがたしおなくさみに。挽たためのお茶湯をしんすべしとあれば。いづれも右の肩をあらはにぬいで。一禮し。

藤十おつとつて申さるゝは。いまだ佛の行儀うい／＼しうて得てはせりふを失念申すと。笑立に露路に入ば。手水鉢には賣の池の水をくみこみ。菩提樹の枝たれ。高野槇の作木まで心ある物ずき。かこひへ入て皆々座を組しに。釜のたぎり地獄の釜の。にえ音とはちがひて。しん／＼として無明のねふりをさましぬ。扱七三手前しほらしく。たてられ。藤十前におかるれば。おしいたゞきて一口のみ。しさいに顔ふりあぢはふて。まづは結構なる御茶卒爾ながら銘はなにと尋ねれば。是はうたふやすかたをつかみし。小鷹の爪でござるといへば。いづれも珍らしきお茶をたべたと。一禮すんでのち書院に出て。なぐさみ盃もよいほどにめぐり。酒きげんにまかせて。めん／＼娑婆にありし時のあく性はなし。今は何の罪もない身や。

第二 市川が心底引わつて見る木挽町の手管娘

市川團十郎。一とせお國歌舞伎といふ狂言にて。大分のあたりをとり。諸見物早朝よりつめかけ。はじめはやく樂屋よりしらせの人。櫛のはをひくごとく。團十方へ來れば。手水そこ／＼につかひ。編笠も着ず樂屋いりせし所へ。十八九なるまだ齒もそめぬ。ふり袖の娘白き鉢巻して。たすきがけにて一腰をさし。あわたゞしく。後より來りて。團十郎さま男と見ましてたのみます。只今此邊にて敵を見つけたが。一兩人も連ある様子。私は御らんのごとく一人と申し。殊に女の身なれば。助太刀まではたのみませぬ。後詰して詞をかけられ。精をつけてくだされませ。ひとへにたのみ上るといふ。元來市川ひかぬ氣の男。平生も役者にはをしき心ざし。武士めいたる所存のすわりし頼母しきものなれば。女のさりとはかひなくしき御心底。おきづかひなされな。拙者命はこなたへしんずるとへ敵は千萬人御ざらうともおそらく鐵の櫛をついたとおぼしめせ。心をすゑて本望をとげらるべし。扱ねらはるゝ敵はと問へば。たしかに森田の芝居へはいりしを。見届たるよし申す。しからは網の中の魚のごとし。外へもるゝ氣づ

かひなし。まづゆちやにても参り心をおとしつけて。其上にて木戸のものに申つけ。しばぬを出させ。此所にてしゆびよく勝負をいたさせん。まづ是へ御立寄あそばせと。日頃ねんごろにせし荒獅子門平といふ男伊達。見物の醉狂人。又は無分別なるあばれものゝ。しばぬをさわがす時分。此門平が掛つけ。いつとても無事にしづめるゆゑに。重寶なる男と太夫元をはじめ。團十も別してねんごろにせしは。内へ入て門平に娘のけなげなる咄をして。したくにもいたされなば。心をつけて給はるべし。扱しばぬの中からは何として出すべきや。此方便早速ながらたのむといへば。門平打ちわらひ。三ヶ津にゆびををせらるゝ。一枚かんぼんの立役者のたてものになる。市川殿の前なる仕掛をうまふまゐつたの。それは今はやる屋形奉公人のいたづらなる女が。かゝへの子供衆又はおの／＼のやうな名題役者に。戀のつてなく言寄る手がかりのなきは。皆そのしかけて敵はと問へば。是でござんすと〇〇〇〇で。年來おもひこんだる敵なれば。にくさもにくし。こな様の〇〇〇〇のつよいで。〇〇まはし下さんせと。〇を〇〇つけておいて。いやともをうとも云はさぬ手管。そのがてんで女にのぞみあらば。外の人にはせぬが貴殿ならば。二階をすこしの間かしてやるべしと云へば。團十大きに肝をつぶし。弓矢白山女童めに一ぱいくはされた。踏みころしてやるべしと。とんで出るを門平おしこめ。然ればそなたは戀なれば取あはぬ所存か。中々の事もはや女のつら見るがいやと。かぶりふつて申せば。そんならだまつて拙者に此助太刀うたしてくれ。何をかくさう。女共ちかい頃産をして。七十五日はならぬ事ときびしく云ふて。此頃の徒然鐵門も〇〇〇〇〇〇。たゞ一やりにてとゞむべしと。鼻紙取てふところに入れ。表へ出んとする時かの娘内へ入り。さいぜんからあれにて様子を聞きました。さら／＼をんないたづら事ではござんせぬ。私は尾羽打からせし浪人の娘なるが。朝の風夕の雨さへしのぎがたく。わづかの裏店かりて親子三人かなしきくらし。涙は袖をしぼりのたばこ入して。其日の烟をたてけるに。あたりちかきけい庵の九兵衛といへる男。ゆゑもなきにたのもし顔にて。二升三升の米を取かへ百二百の錢をかし。こまかに通につけ立。二割とや

らんの利をかけて高メをして。此分今日明日の中急度算用いたさるべし。もし返済なりがたくば。貴殿娘のおなりを我等夫妻に給つるべし。此二つの中いづれにても埒あかずば。表向へ申出んと。壁に馬をのりかくるやうに申しかけしかなしさ。當分の難をのがれたため。わたくしには夫あれば。こなたの妻にはなる事ならず。外なる事をのぞみ給へといひし詞じちをとつて。しからば其方の夫は何と申人ぞ。名所をきいていしゆあるにまがひなくば。夫妻の望をやむべし。其夫を申せとせりつけしに。誰とも名さすべき人なく番附にて見およびしゆ。わらはが夫は市川團十郎と申したるを。誠に今日森田しばるへゆき。直に様子を聞くべしと。今朝くだんの九兵衛め参るを跡よりつけ來り。逆も形もない事なれば。かの九兵衛を討とり。わたくしも相はてんと思ひきはめて参りしが。おもはずおまへを見かけしゆ。敵討と申して餘儀なくたのみ。相手の九兵衛に。こりや市川殿はわしが男じや。をがんでおくと見せておいて。うちはたさんため。敵討と申しておひまをとりしは此の様子と。次第をかたりて泣出せば。團十肝にこたへてふびんに思ひ。それは打はたすに及ばず。其男を引よせ。我等が女房じやがおのれはぬしある女を妻にせふとは。非道至極のちくしやうめ。今一言いはゞ其座をたゞせず二つにすると。此方から見事にねだつて。手をあはする事なれば。其ものしばるに居るならば。是へよびにつかはされよと。たのもしく申にぞ。近頃々々かたじけなし。しからば九兵衛といふ男は。糸鬢に上髭のある男。くろき袖のきる物に。ちやごもんの袴はおり。藤柄のわきざしさせておる男とつぶさに云へば。人迄もない我等引さげて参らうと。門平おどり出て。しばらくしてかの男引ずり來り。この才六でござるか娘に見すれば。なる程あの人とうなづき。時に市川眼に角をたて。しばらく悪人をきめる格で。やいさ。けざい六め。うぬめは身が女房を。つまにせふの妾にせふのと。さまんくのりよくわいをほざくとある。なんと市川團十郎が二世迄とやくそくした女共を。見事うぬめは女房にせらふか。なんと返答はどうじやと。舞臺の所作をそのまゝに。切羽をまはしてきめつければ。此の男ちつともおとせず。そなたは誠にしばらく見申す市川團十郎。

しかとあの娘はこなたの内儀でござるの。ヲ、サくどい事女房も女房。秘藏の女房じやとにかりきつていへば。先以満足いたした。何とおなり様。おうれしうござりますか。其御一言きかふばかりに。此頃此狂言をもくろみ。富永平兵衛藤田長左衛門などが。思案をからずに仕組ましたが。見事仕あてたさふにござる。くどふ申すにおよばぬ。あの娘御はおふくろ様ひとりの大事のひさう子。仕度事して機嫌ようあそんでくれと。萬事心まかせのひめごせ。こなたに御執心で。大抵てはがてんなされまいとあつて拙者に御相談かくのごとくの仕合。女房も女房ひさうの女房と仰られし一言。反古にはなるまじ。ゆめの間のちぎりのみいると。門平方にてつみ立ながらの祝言。冥途へ來りても其娘が肌は。今に忘れぬと。過しむかしの懺悔ばなし。ない事かある事か有無ともに夢のたはふれ。

第三 女道衆道の堺町遊 はちがひくぎぬき

年々花は替らず歳々人同じからずといへど。役者ほど年の寄ぬものはあらじ。十年以前に見た姿も。今にかはらず。四十年過ても。角前髪のかづらの似やはぬといふ事なし。是をおもへば。不斷ぬれ狂言の世界のうまい事ばかりして。色と戀とに飽果ぬれば。外よりおもふとはちがひ。常の人よりは女の道あながちに好まず。おのづから養生よく〇〇たもつゆゑに。七十になつても白髪なく。顔に皺なく艶あつて。四十には成。ならされの男つき。坂田がしんで八十にちかき年の數を聞て。始めて京に我ををりぬ。さればたしなみふかき中にも。わけて中村七三郎。あまねく三ヶ津に名をあらはせし美男。一とせの京のぼりに。都女に腰をぬかさせ。猶又江戸の嫁娘の内儀奉公人。すべて女の形あるほどの者。此男に思をつくし。毎日千束の文は封じめとかずに。紙屑籠に七八はいもたまりて。紙屑買は外を歩行かず。此家ばかりに毎日來りて。まだ痴話文のたまりはござりませぬかと。先がねわたして買ふゆゑに。にわばたらきする下男が。おもひもよらぬ錢をもうけし事ぞかし。此外かなはぬ戀にむねをいたぬ。これがちにあまた

なり。あるひは門前に立わづらふもあり。又は神をいのるもあり。執心ぶかき女の見とるゝ眼玉。のちは軒もるあられのごとく。我めに見えてうるさくおもひ。下々出入の者迄に。女の取次いたすなと申渡して。情しらずの名をとれど。ひとりにも戀をかなへて。あふてやつたと聞ならば。何萬人の女仲間ねだらるべきも知らず。とかく命にかへられぬと。名主五人組から狀の添る女にも。いかなゝあふて笑顔も見せず。つれなくいふてもどしぬ。頃は桃の咲く彌生のはじめ。屋敷方町屋の出替。女の花盛色をつくりて。しるべゝの小宿にあつまり。在所の親の事はいはず。たゞいたづらの男の噂。いづくもおなじ心にあふた女奉公人。十人ばかりあつまり。平目のさし身に。蛤のぬき身など。さかなにして酒事をはじめ。宵から其の事のみ咄つもりて。此なかの女大將酒きげんにいていひけるは。何と皆の衆此頃めづらしき男の出あひもないかと云へば。おせうといふ茶の間つとむる女がいふやう。男は何ほどありても中村七三がやうなひろきむさしのに。又と似た人もなし。あはれ此七三郎に一夜のそひ寢がならば。それを命のうちの思出にして。見事に一生男の道とまるべし。たゞ世の中のおもふはまゝならず。いやなるはしたふならひ。かなはぬ男にむねをこがす事と。ためいきをついていへば。女詞をそろへ。われゝとも同じ思といふ中に。こしもとさかりのつなといふ細眉つくりの女すゝみ出で。かたゝは女と生れて。しんぼうのない衆かな。それではのほそい世帯はまだるいとて。持ごたえはしたまふまじ。おもひかけし一念には岩をもとほすならひ。心をくだかば七三殿じやとて。手に入まいものでないと。わかい口からはちつとおつなどの言過しにてあるべし。男世帯の店あづかりの手代なびけし格とは大きにちがひ。くぎぬきの紋付し男は思ひもよらぬ事といふ。其ならぬ男に〇〇とかすがわらはが得物と。はちげんはなせば。さあならば手に入て見たまへと。互に〇〇の下に氣をもち。眞顔になつてのせりあひ。座中の女一同にははむやくのあらそひ。隣あたりの手前もあるに。しづまり給へとせいすれば。いやおせうどのに對し。じごんじ云ふではなけれども。且は女中間のひけになる事。しるしをたべと乞ひければ。女大將縁繪

子の〇〇を出し。七三に首尾よくあはれなば。是にあふたといふ事を。一筆かいてもらひ給ひ。それを印にかへられよと。所々に〇〇〇〇のある〇〇〇〇で下さるゝ。おつなはゆ〇〇給はりて小宿を立て出けるが。立かへりかたゝは。人の心はみちのくの。わたしが〇〇〇に艶男を〇〇〇〇ば。ふたゝび又人に白粉つけしおもてをむくる事あらじ。是迄なりや柳髪。ひけばなびかいたづらの。浮氣心ぞおもしろき。扱もこしもとのつなは。只かりそめの手管では中々粹の七三殿を。手に入事はかなふまじと。小性まはしの丹助といふ男をやとい。此次第をふきこめば。それは拙者におまかせと。中ぞりして今はやりでの。浪人小性の若衆髪にゆひたて。大ふり袖の衣裳大小迄かり出し。本若衆に仕立て。色と情の堺町。しほるちかくにたゝすませ。心の程を段々に書ならべたる一通を持て。七三郎がくや入の袖口になげ入。此かへしを只今とついで来る。七三は仔細心もとなく。とかくは中見ましての事ぞ。名もしらぬ御方と。少し世間を思ひやりてがくやに入。役前の心せはしくそゝに内見。つるよみ捨て若衆の方より念者にこがるゝとは。古今ためしもなき事なり。吳服町に巻物屋の何とかや。名に聞きしいたづら後家のあるよし。度々文をおこせども封じもとかずかへすゆゑに。男の筆をかりて若衆の文體。此後家が手管なるべし。なぐさみにいたづら者のかほを見て。笑はんとおもひきはめて。ついて來りし丹助をよび。何事も見ぬ戀はなりがたし。我おぼしめさば今宵の月に。八丁堀のいなりばしに待たまへと。いひかへして後。うらなく思ふ色すきの役者にかたれば。一代の御合力に此戀たまはれと。夜の錦をまぎらかし。七三郎が身に替りて。かの橋のほとりにゆけば。おもはくちがひの若衆。淺黄ちりめんにと櫻のみだれもやう。むらさきの中はゞ帯。金鏢の一つわきざし髪は茶筌に取りみだし。そのゆたけさ女のごとく。まちなねたる體にて。我等を見るより先ものはぬ先に泣出せば。此役者おどろき我若衆ぎらひ女房せんざくと聞て。七三郎に戀をもろふて參りしに。是はかくべつの事ぞとはじめをかたれば。綱之助其袖にすがりて。七三にこがるゝ心入を残さずいひければ。此役者口をあきて。世はさまゝといへども。若衆の方よ

り念者を忍ばるゝは。是ためしすくなし。中村も諸方の戀に取まぎれ。中々ひまなき身なれども。此義はかく別我等取持て。すべし思と情一しほに。かたらせ申べしと。打つれて七三が方にゆき。中村にあらましをきかせ。其夜に引あはせけるに。つなは詞なくて目に戀をふくませし面影。堺町木挽町此二所に若衆を商賣にする。藝子の中に似たるもなかりき。さすがの七三誠の若衆とおもひこみ。かう申せば御おんにきせるやうなれど。舞臺子供に思ひつかれ。うしろだてにたのまれ。兄弟けいやくせし人其數をしらず。其業道は尤戀ながら。皆身をおもふ勤の勝手づくなる若衆。不斷念者にめづらしからぬ身なれども。地若衆のかゝるおぼし召入。身にあまりてのうれしさ。とかふは今更に申あげがたし。此上は御あきなさるゝ迄お情にあづかるべしと。見事に首尾よくまつりをわたしたての上。七三が手を取り我身誠は女なり。戀に際なきこなたさまにかりの枕物語せし事。女の本望今死しても。わすれはおかじ。一生の遺物に〇〇を〇〇〇の夢のちぎりと。此下紐に書て給はれ。しからずば今宵あひませし事。江戸中のいたづら女の仲間へひろうし。明日から數萬の女にせがまさんと。いやをふのならぬしかけ。七三も大勢の女仲間にかかれては。よもやいけてはおくまじと。人だに見せ給はずば。なる程かひて參らすべしと。ふせうぶせうに硯引よせ。のぞみのごとく二布に書いてやれば。此きはづきの所に。こなたの名判おして下されと。心のごとく書かせてとり。久しい思を一度にはらしめましたれば。一夜なれども〇〇〇〇〇ものてござらぬ。其時分は御左右申しませうと。くぎのうら迄かへしてかへりぬ。是中村が一代のはまりと宵の役者にかたれば。さりとは若衆とおもひ手に入し女を。こなたへ引つけ。是は残念千萬と齒ぎりをしてくやみぬ。中村は若衆と心得て一ぱいくひ。此役者は女と知らいで。手ばなせし事。とかくは色にかつゑぬ榮華の上の。餅のかはむくいと。是をいふべし。

第四 野良隱藝に身を打ちこむ道頓堀

誰物ずきにて藝子の小袖。是が難波のうらめづらしや。紋付の鬘斗目よき絹よりは至りせんさく。さだまつて梅にうぐひすの茶染もおもしろからず。むかし野郎は舞臺の外の藝に。小歌淨るり三味線の。ねてもさめても是をはげみぬ。今は至りて十種香をきくなど。名香の品々耳とつて鼻におほえず。それもすたれば俄に弓矢をとりつき。轟大盡に無心申して。力をも入らずして楊弓の星の林。夜は俳諧にさしあひかまはず。親方ぐるみの悪性狂ひにやだれをながし。尺八の筒もたせに出あひ。是はと手をうつ小鼓の。どうもいはれぬ至りあそび。茶の湯は此前袖島市彌がすきて。しほらしき道具をあつめしが。つゞいて玉川半太夫都にて。いななさゝ原といふ法師にたよりて。茶事もつはらにこるを見をたまねに。此堀の藝子ども。所から難波焼の土鍮子かけて。心がけのやさしく。色ある子供には一しほ似合し慰とて。抱親もゆるして。つぼ入のね所をすぐにかこひしつらひ。鹽瀬がふくさのかはりに。紫帽子の紐をときて。是又野郎のわひずき面白しとて。むしやうにはやりぬ。あるとき本町の可好といふ大盡。かはゆがられし若衆を正客にて。嵐三右衛門木津法師富澤政之助。以上四人鹽町のやしきにて。御茶下さるべきよし。嵐三右此やしきはじめてなれば。庭を見まはし。大盡の茶事おもひやりぬ。頃は春ふかく見越の松杉さまんに枝ふらせ。びやくしん虎につくり。つゞじの帆かけ舟こてまり。山吹のおれとさきし外は。皆兼好がきらひたる庭木。瓢箪の手水ひしやく。さし釣瓶の古きに摺鉢をきせたる燈籠。いづれを見ても仔細の過て。きのつまる物つき。料理もさぞとすあしぬるにたがはず。茸蕪に豆の粉かけて是自慢の肴とは。錢つかふ大盡の物ずきとはいはれず。酒さへのまれずして能加減に。物まぎれの道具ほめて旦那に油をのせまし。めつたにそやせば。あるじ悦びいづれもへ馳走に。大ぶくに立參らせんと。手まへつくるひ過てむかし行なり。殊に盆たてし見せ顔に。正客の若衆にさし出せば。身をつくりて飲かゝりしが。其つぎへもまはしかねて。俄に赤面して是にて仕舞ひますと。ひとりして飲んで。茶碗うちまであらためてさしおく。嵐をはじめ連衆は不作法とおもひながら。大盡祕藏の若衆なれば。いづれも詞をそろへ。

大ぶんのお客ぶりようはまるつたと云へば。此若衆いよくめいわくがつて。近頃々々めんぼくなけれど。わたくしの入齒。茶碗の中へおちこみまして。いかにしても外へはしんじがたくて。かくの仕合なれば御めんとの断。なほうとまし。入齒する年迄。若衆顔して客せめらるゝ事。勝手づくとはいひながら。てん是をとがめたまひ。かはゆがらるゝ大盡の前にて。今日のはぢを見せたまふと。三右衛門小聲にてさゝやき。此大夫にいやがらせしが。よくくの少人好の大盡も興をさまして。其日より女道に色かへ。嵐にまかせて新町にかよひそめ。いばら木やの半太夫にふかくあひぬ。是より藝子の茶の湯ずきは。商賣の妨とて今はすたりて。作の茶杓も篠塚が耳かきになりはてけり。かくて可好は宗旨をかへて。女郎のいろにうつりにけりな。歌よまぬ小町が佛と。名によびし半太夫にふかなづみ。雨の夜も風の夜も。親の日もかまはず。さそひ出るや嵐とともに。九軒の井づゝやにさゝめきて。銀もかはらもおなじごとく。ぐわらり／＼とまきちらし。此おもしろさをよそ唐にもあるまいと。和國屋の傳といふ大盡にあはるゝ。太夫座につくより何かかぶるにさゝやきて。度々外へつかひにやらるゝを傳見とめ。四も五もくはぬすいの寄合に。何をかさのみかくしたまふ。馴染の客が横きらふ計に。ほかの揚屋へ來てゐるといふやうな譯ならば。大かた高がしれたる。囁かずと追付參らうと。納戸飯まるるやうに。かくさずとありていを仰られて遣はされよ。その品は客によるべし。女郎の嘘を十四五手づゝさきから見てとり。はやらぬ女郎の長持に灸すゆる。内證の子迄しつてゐる者共を。いかふ前方なるものゝ様におぼしめすかと。ちと氣を持ていふをりふし。太夫様の親御さん。旦那殿の座敷普請の手傳に來て。千本づきの音頭とらしやると。年のゆかぬかぶる共が不遠慮に申せば。上する女をはじめ料理人出入のをとこ。隣の客迄さゝつけて。音頭はのぞみにあらねど。太夫様の親父様はどんな顔ぞと見たがるこそ。人の心のいちのわるさよ。大津の小坂とやら坂本とやらから來て。さりとて達者さうな親父様お持なされて。太夫様のお仕合と。わる口申す。是くるしがりて最前より禿にさゝやかれしは。とゝ様にゐんで下さんせとの吹こみなり。惣じて

此里にかぎらず勤する女郎。云ふか云はぬかならぬ親の爲に身を賣來れば。親元のわるきは知れた事ながら。女郎になりては。小判は木からはゆる物か。酒は井戸から汲て來るものぞと。まんざらかなしき世渡しらぬ顔付。人も太夫様とてもはやすに。つぎ／＼の布子に木綿縞の肩當したる。袖なしの紙子羽織着てよい年して。近江の名所浦々の名よせくどき。あれが太夫様のおやぢ様かと。目前にいはるゝ子のくるしさ。ない事はふといふ廓のわかい者共。ばつと沙汰してふびんがらるゝ。大盡迄氣のどくなる首尾なりしに。三右衛門くだんのくるのは普請場にゆき。親父にさゝやき親方の表二階へつれあがり。ひそかに譯をいひて。布子をきかへさせ編笠きせて。手ばしかくくるわを出し。親父が顔つきに似たる日雇を一人まねき。ひそかに頼み。さいぜんのおやぢが古布子に紙子羽織をきせて。嵐むなぐらを取て井筒やまで引ずり來り。何意趣あつて歴々の太夫様の親子とはさへづりけるぞ。まつすぐに様子を申せ。かくさばおのれはたゞかへさぬと。三右衛門しなれぬ實事を申出せば。此日雇嵐がいひをしへし如く。犬つくばいになりて。私あの大夫様の親父様と偽り申せしは。日外そなたに御執心なと御袖にすがりしを。勤の中はさはりとなれば。身のまゝなる時をまてとて。つれなく袂をふり切給ふ。其情なき返報にかゝる巧と申す。女郎にちじよくをあたへる企はにくけれども。其日過の戀から恨をのこす所がしほらし。汝に似合し局女郎をあげてあそべと。ふところより二角出してとらしければ。有難とてかへりぬ。それより親父沙汰はやみて。其日を送りかぬる日雇取さへ。心をつくさばよく／＼よい所のある女郎なるべしとて。却て評判宜敷申なして。過にし時より一入に。はやりけるも偏に嵐殿の御蔭と情深き三右衛門が心ざしになづみ。さま／＼文して女郎の方からくどきけれ共。御めかけらるゝ大盡の手まへもあれば。此世にてはかなはぬ事と。斷申してあはざりし。嵐がいきかたきく人今にかんじあへり。情は貴賤にかぎらずありたきものなり。わけて役者は萬人の最良なくては。たとへ上手にしてから名を取事はかたし。嵐はかゝる情あるものゆゑに。二代の稀者と名をよびつゞけて。此津に久しく角に小の字の櫓幕。嵐にひらめかして身

はきえゆけど。今に傳へて名はくちず。されば坂田も心ひろく下々迄にも情ふかくして。かりにも人にくまれぬゆゑ。はじめて村山又兵衛座に出て立役勤。それより終に二番とさがらず。京大坂二ヶ國の常芝居の外。旅芝居に一度もゆかず。今かぶき役者の先生とあふがれ諸人にほうびせらるゝは。狂言の上手のみにはあらず。たゞ京都の諸見物にくまれぬ徳ぞかし。此度追善としては。澤村長十郎藤屋伊左衛門となり。初のぼりの宇源太を夕霧にして。藤十佛の狂言見る人袖をしぼり。をしき人をころしましたと俄に精進氣になりて。茶屋から持來る提重のにしめは皆になれど。鯛かまぼこ生貝は其まゝ手もつかずして。芝居の中ののら犬共が。思ひもよらぬ口果報となつて。是等迄坂田さまの御陰々々と尾をふりぬ。樂屋には澤村がいきごみ思入のうつるを見て。立役野郎道外其外馬の跡足迄袂をぬらして。今日の涙は常の仕組と替り。泣出してとめどはなかりき。誠に此世にあつては心のまゝの榮華を極め。息引取と爰をさる事藤十郎。日頃得物の居狂言。紫の雲のしきふとんに。傾城の御來迎をまちうけ。釋迦はやり手みだいは道引。弘誓の引舟口舌の浪にかち取。かぶのぼさつは無明の眠をさまし。ねはんの床入坂田が成佛うたがひなく。一步小判の金ふり下り。天人をどりははなをちらし。あまりをどれば浮名のたつに。いざ歸らん我宿へ。

寛潤役者片質下之卷大尾

諸國武道容氣

諸國武道容氣總目錄

一之卷

此段は物善寺濱ばなし

第一郡山染

武道見がゝざる魂ぬけた所が一寸さきの闇討一家中の亂やきば師弟のわかれ

第二心寺

おく病者の欲。あかがきつてから六道の遣錢尋ねに生玉の寺町。入相の鐘あぢ死出の門出

第三天満嶋

宿替のはきちがゑ。だますに手もりをくふ親敵に相生町のとりぐ

第四惣善寺

霜月四日の朝嵐。砂ふきかくる富士嵐。おや兄弟の身の果にくしと思ふ一念。我とめつする八人の敵

二之卷

此段は京の噂

第一春日山

なら坂や此手あの手の養子親。ともかくにも子ゆへのやみ

第二三笠山

諸國武道容氣

第三 恨うらみの山やま ひん家のさよめ事。くはねど高楊枝。袖乞してもしらぬが佛。命の親父様も一座のせんしやう

第四 鏢つるぎの山やま 立身の門出振舞。ぬし有中を引わけて手妾奉公にやるおや

三之卷

此段は阿州の咄

第一 今長ちやう範はん

第二 今五右衛門 底前物見の松あてのみの酒。是二つ割の極め。朱にまはればまつかいな連判

第三 今忠ちゆう孝かう 知恵をつむはや舟。乗出して和田のみさきの海盜。明舟に命の鐘さき

第四 今孝かう々々 鳶とびが鷹たか。生れぬさきのちゝぞ戀しき。あらはれ月。悪をさへづる村雀

四之卷

此段は長崎遠目鏡

第一 人の上越高木の松

築花きくはなに餅もちのかは。十六夜のいざよひ小こずもふ入さ山の月もろともともにきゆる命

第二 虎この威いををかる猫ねこ侍ざむらい 時雨しぐれのゑんふん。ふりがよりの喧嘩けんか侍ざむらい四人 肥前肥前のいとびん長崎長崎のそりさげ

第三 五嶋町ごとうまち暮方くれかたの狼藉らうじやく 人たがひにむかふ疵かさのどよみ五十年の命死出の旅酒

第四 武道の風吹おらるゝ高松 主も下人も一ツ枕まくらにあかねの原衆道はらしゆうだうもちあいの敵討かたきうちおさめたる太刀風の音

五之卷

此段は伏見京橋の咄

第一 老人行合の難義 すぐめは百になりても。おどりわすれぬ人心。昔の鏢今のながたな

第二 中書嶋の朝別れ 傾城瀧川二度の勤。色はほだしのもとしのび。情の化花散ぬるおとこ

第三 ぶ首尾は葛の里 三人あそびのひとりころび。馬方六藏がほうかいりんき。茶代はふくさに残す形見のかね

第四 京橋は十番切の物真似 とはずがたりに身のうへ咄。行がけのだちん馬。六藏がつかい錢

諸國武道容氣總目錄終

諸國武道容氣一之卷

第一郡山染

鏢よく身をまもれども時としては身をほろぼすのうちはたり。親疎變化の寶より。人をやぶらずそなはぬ知恵の鏢ぞたつとかる。今太平の御代として國々のはし／＼島々もおさまる國のはじめとは。大和の國をさしていふ。城下あまたの中に小泉とやらんほとりに。田代宇太夫といへる兵法指南者のけいこ場に。あけに染たるしが有門流はうばいきくとひとしく。かけあつまり立より見れば。堀氏新平なり。其まゝ上へうつたへしかば。けんしの役人江原新左衛門宇野十右衛門。高ちやうちんを立させ宇太夫屋敷へ入れれば。東の山もしらみつゝはや明がたと思ふころ。新平兄武右衛門。次男武介。母妙頓。かい／＼しくかけ付。しがいを見ると血眼にくだれないの涙。なくもなかれずうろろとくるひまはれど。相手なく。けんくわすぎてのぼうちぎりき。無念と斗はざししみし。やれ兄弟のもの共いかと思ふと立まどふ。時にけんしの兩人三人にむかひ。いづれも新平ふりよの御生害殘念におぼされん。扱宇太夫殿。尤やしきのそとながら門弟衆の兵法は貴殿の内も同前たり。御ぞんじないとは申されまじ。役目たる身なれば過言の段は御めんあれ。それにひかへし御弟子衆。いづれも夜前の參會とや。わかいどしの儀。武藝の外に何にても思召入もこれあらば。つゝまず申出られよと一座をきつと見渡せば。門弟はうばい詞をそろへ。御尤なる御尋ね。夜前にかぎりいぶかしき儀候はず。外を御せんぎ有べきむね。宇太夫罷出。おの／＼しづまれよ。ちと心あての子細といつは。私近年病氣付役目の武藝門弟のけいこ。内外にいたる迄養子金八にゆづり。萬事の支配ぞんぜぬ所。あまたの弟子有中に堀の内三兄弟武藝をばけみ申さるゝ中にも。弟新平儀わざも修行もいたり。金八などよりはたらしきなどちよ

つかに見おろし候ゆへ。けいこのせきにはつらなれど。ついに勝負もせざりしが。夜前いかなる子細でか相手になりてゑんりよなく金八を打ふせ。一座の興もさますよし。家來のものにうけたまはる。扱おの／＼歸宅の後跡より罷出けるが。今に歸らぬふしぎ。殊にしがいのうしろ疵。此新平といふ男。敵何十人あればとてうしろを見するものならず。大かた是は金八め品へのいしゆをふくみ。だまし討にまぎれなし。ひきやう千萬有まじきしわざ。たとへ何方にしのべばとて天道のにくしみふかく。ついにさがし出されしばかりをうたれん事。一家のめんぼく口をしと。生れつきの正直より。思ふ事共のへけるにぞ。詮議是にすみ。ひきやうしごくの金八と口をそろへの給ふ時。は、妙頓罷出。御如在もなき御詞何と申さんやうもなし。こりや兄弟敵はしれた。是よりすぐに追かけ。敵を打て此母がむねんをはらさしてくれよと。いさぎよくはいへ共。さすがおや子のわかれ。しのびに涙あまるにぞ。兄弟檢死に打むかい。我々いまのいきどをりおかみへ申上られ。よろしく頼奉るといんぎんにのべける時。宇野重右衛門申さるゝは。一通り御尤なれ共。新平儀は三男。親兄伯父のならば敵討の作法もあらん。弟の敵うつ事は其禮ぞんせぬ事なれば。まづは御しあんしかるべし。そつじはかみへ申されずと。いわれて兄弟さしうつむき涙をながしいたりける。母妙頓もどかしく。やれ腰ぬけの兄弟共。ねがひと云は大法にて武士のけりやう。おこたらが命と知行をかばふゆへ。侍の義がたゝす。はゞかりながら兄弟が知行を指上申なり。かやうに申さば狂氣かとおぼしめさんが。さにあらず。かれらがちゝの武太夫。小知ながらもあつばれな。武士といわれし其子として弟の敵をうたておめおめくらすかと。うしろゆびをさゝれん事。いか斗口惜からめ。殿様へのはゞかりは母にゆるして給はるべし。お返事きくにおよばぬ事。兄弟共にお主はなし。うかがふ所もなきぞとよ。これよりすぐにくつたて。とく／＼とすゝむれば。兄弟嬉しく身づくろふ。妙頓重て。いづくに足をとゝむる共文のたよりを致すべし。是今生のいとま乞。いゝ度事は大海の其白浪とさはげ共。なま中武士の妻とよばれ涙一てきこぼされぬ。思ひもよらぬ旅出立たがい無事で吉想を。松虫のこゑほそ／＼となくも

なかれぬうきわかれ。兄弟わざと詞に角。お心やすかれ兄弟が心をあはせ候うへは。敵何十人あればとてねらふ所は金八ひとり。飛鳥のごとくはたらく共何程の事あらん。くび引さげて新平に手むけの水ともろ共に。未來をたすけ申さんと。けんしにむかい。御前ていよろしく頼奉る。承りとゞけたり。いさい御ひろう申さんと。疵のやうだい書付屋形に歸れば。宇太夫は家來にいふ。新平しがい籠にのせ。門前迄おくり出。是兄弟衆。ねらはるゝは養子にてねらひに行は弟子ぞかし。いはゞ是又子同前。いづれをそれとわけぬ内。悪敷を捨てよきに付。元來世悴金八は播州も。當地を立のき行とても實父の方へはよせつけじ。大坂へんに暫はしのひかくるゝ所有。片時もはやく立越本望たつし申さるべし。見れば新平ぬき刀手に持ながらしゝたれば。金八も手をふまじき物ならず。外科金瘡のみしやにたより。心を付て尋ぬべし。かならず口論いたさるなど。むつまじき教訓に兄弟頭をかたむけ一禮すれば。母よろこびことぶきいはふ旅出立。死がいかこの前後につき。逆さまごとの世をうらみ。野邊のいとなみいとま乞さらばゝと立わかれ行

第二一 一心寺

田代金八は事なき意趣をふくみ。堀新平を討てのき。すぐに其場を立のき。大坂にしるべの有けるをたよりに尋ねしかど。はやさき立てしらせの有けるにや。武士の有まじきしわざとかくまはるゝ事は扱置。さんぐにさげ生まれ。面目うしない。生國播州に下り朋友方へ立越。段々身の上をかたりしに。爰にてもしゆびあしく。しばしも足のとめがたく。又大坂に立歸り。天満のはづれ在ちかきにわづかなる家をか。表の柱に田代近八はり札して。一人の小者をつかいかくれしが。ねられぬまゝの物だくみ。きけば堀武右衛門弟武介心をあはせ。知行をさしあげ國を立のき。某をねらふよし。きやつらが手わざ我々およぶ物ならず。何とぞ知恵を出し兄弟が有家を尋出し。討てとるより外

はなしと。國元へ飛脚を立。小間物屋治平といへる中間あがりの商人をまねきよせ。其方をよびのぼす事よの儀にあらず。身が口論の儀しるとをりのいわく。心やすく目をかくるといふは汝ばかり。殊に兄弟方へも出入心やすくかたりし故。頼といふは此事。兄弟當地に住居し。商人にさまをかへ某をねらふときく。其方我にかとうどし大坂にあしをとめ。町中をかけたまはり。兄弟が有家を見とゞけくれなばいかばかりうれしからんと。かたる詞の下より金子五兩是は當座の心づけなりとさしをけば。治平はね耳に山吹色。一め見るより笑顔。お前の御恩かねくほうじたく存る所。拙者相應の御用。一命をさし上申うへいか様お心にしたがい申さん。殊に兄弟とは心やすく致せし中。某には心をゆるし諸事打あけ申さん。随分住居を見とゞけお心をやすめ申さんと。夜とゞもかたりあくと。もゝ引わらぢおゝこにふるしき包をかけ。先くんじゆのばなりと生玉邊へ出たりぬ。天しるといふ事武右衛門此うはさを聞出し。ゆだんなく町々小路をあるき歸る頃は暮がた。ある日武右衛門只壹人生玉へ參詣し。下向に八まん宮に詣祈願をこらし。そこらあたりをけんぶつする折ふし。治平見付おひさしや武右衛門様。めづらしいの治平何ゆへこゝに來りしぞ。さん候昨日買物に參り明日下ります所。生玉萬歳おもしろき評判にひかれ見物に參りましたとかたる。それは一段國元にかはりし事はなきや。先こゝはくんじゆ。人なき所へ同道しつもの事もかたりたし。いざとさそはれ。治平が心の内には。爰にてあひしは天の引合せ。某が仕合いつく迄もつれ立。様子を見とゞけんと思ひ。いかさま人立きのどく。さびしき方へお供申さんと。中寺町を南天王寺を西へあゆみ。一心寺のうしろやぶのほとり迄つれ立。爰はとをりもまれ。いざくつろいでなさんと草原に腰打かけ。武右衛門申けるは。きけば其方金八にたのまれ。我々兄弟が有家をさがすとの風分。それは何ゆへ尋ぬる事ぞ。様子を聞て同道し。年來のよしみだけ酒の一つもふるまはん。まつすぐに白狀あれ。少しにてもちんすると其方身だめあしからんと。とはれて治平ぎよつとし。すこしは目の色顔色かはり。言舌前後の相違し。是申武右衛門様。それは何ものゝわんざんにて。左様なる跡かたもなきそら事を申ぞ。誠に

おの／＼様お國元に御座のせつは内外お心安くぞんじ。萬端お世話に罷成。只今小あまなひ仕も御兄弟様がたのお影。たとへ所をすればとてかくすべきを。金八などに頼まれ御兄弟にあだを仕らんすべなければ。いか様に申とも御うたがひをやめられ下さるべし。弓矢神もせうらんあれ。毛頭おぼへこれなし。國元お立のきあそばして。只今迄いづかたにござるぞ。よほど月日も立事。路銀などごぶじうたるべきとあんじこそいたせ。何いしゆ有ておの／＼様のぎんみ仕らんやと。けんもほろ／＼涙くみいゝわけするといへ共。武右衛門一つのみこまぬ顔。たとへば金八頼まれ有家を尋ねるとも其方にとがはなし。最前よりの眞節先以うれし。其所存たがはずば金八有家を申べし。治平聞ておのおの様御居所をさへぞんぜぬ私。金八所何ゆへしるべし。それは御難題と申物。御浪人あそばしお心迄。ひがみいろの儀を御尋ねなさる。ながるはおそれおいとま申ませう。御そく才にて年來の御本意とげらるべし。武介様へもよろしくお心へ頼奉る。お國元のおふくろ様へ御用もあらば御多かりよく仰付らるべし。先おいとまと立所を武右衛門おしとめ。それはひきやう。汝今こそ町人なれ以前は武士にまじはりしやべつをぞんじながら。ひやうりをつかひ。一寸ぬけのあいさつ。誠をいはぬと命をとると刀にそり打手をかくれば。少しもさはがず。とがなくて命をとらるゝ法をしらぬ。事をしらぬと申は私の正直。それをせひしるとはむたいといふもの。其心にては大望心もとなし。いや舌ながなる一言かくごせよと打かくる。はづしてにげんとする所を。すかさず追かけ首打おとし。ふところをさがしみれば金八方よりよひに遣したる書中。ひらいてみれば我々が身のうへの事共を書。をくに金八所付。三度いたゞき懐中し。治平がくび半町斗り脇へなげこみ。定めし武介まちかねつらんと。いそぎじたくに歸りしと也

第三 天 満 嶋

其年もくれは鳥。あくればはるの山かすみ。木の葉の色も青によしなら迄ゆかね追わけの。茶やより籠をかり切。大

坂天満へいそぐ武士。田代宇太夫中間壹人めしつれ道をいそぐに。程なく暮かた前に天満のほとりに付たり。こゝかしこ尋ねめぐるに。ふしきの宿札田代近八と有。うれしやこゝよと案内す。内よりていしゆとおぼしき人罷出。いつかたよりとこたへしかば。田代金八と有宿札に付少用事有て参りし者。此段通じ下さるべし。時にていしゆ手を打。是は此方のそそう。私も夜前宿替致此所へ参りしもの。手前取込宿札其まゝ置事此方の不調法。宿札主は一昨日宿替いたされ候。其かたへあい度ばこれより二丁北よこ町をひちまがり。そんじよそのかうし作りといへ共宇太夫合點せず。いやるすつかふものにあらず。則金八おや宇太夫と申者。他行などいたしなば歸る迄まち申さんと。おとし付たるいふん。扱は私の申ぶんいつわりとおぼしめし。只今の一言。それほどうたがはしくば其金八殿をこれへよびあはしますればしれる事。暫それにといゝすて金八かたへはしり行。其折から武右衛門武介所しれるをさいはい天満のほとりかけまはり。あやしき宿札田代近八と有。金八金はこがねといふ字をかきしに。金のじかへしはいぶかし。かけ入もし人たがひならばかうさんして外を尋ねん。しかしゆだんすべからずとはちまきしめて身つくりい。めぐぎに氣をばつけあい。つか／＼とかけいれば。宇太夫はつと出むかひ。めづらしの兄弟。さつする所かた／＼も金八宿と思ふてか。爰は所ちがいにて金八やどは外なりといふ。兄弟聞て是宇太夫殿。國元にては眞節に弟師子と有ていろ／＼の指圖は當座の義利ばかり。根は金八へかとうどにて是迄の御出。其段は親子のちなみ。はり札に迄しるし置金八やどでないなどは近比ひきやうの御一言。殊に金八の近の字書ちがへ置たる。金八心に一物有。助太刀せんとおぼしめさばいやとは申さじ。其節は師弟のよしみ歸り見ず。ゑんりよは互にない事といふに。宇太夫せんかたなく。いひわけ迄におよばぬ事。只今金八参るうへ引あはすれば別儀なし。せけばかならずしそこなふ暫またれとせいする。兄弟心とけぬ共。師の一言にめいじ。しばしためらいる所に。ていしゆと打つれ金八は何心なく入來る。兄弟やがて立よるを宇太夫中になつて入。武右衛門兄弟其方をうたんが爲に來れり。じんじやうに勝負をせよ。兄弟も又心を合し日比の

本望たつすべし。心へたりとすつと立。名乗におよばず弟の敵。さあ／＼ぬけとつめかくる。金八いかゞ思ひけん。かしこにどうと居なをり。大小からりとなげ出し。其方立の弟新平を討てのいたは某也。心まかせにはからへと。くびさしのべてるたりぬ。宇太夫眼に角を立。其手はくわぬ。金八りつばにみせてひやうり物。はる／＼敵討に來て丸腰ならば討まじと高をくゝるか。ひきやうもの立あがらぬかといわれて。金八打わらひ。命おしまぬしようこには今いる宿にも此家にも。田代金八と書からは此方にひきやうはなし。其方立こそおくびやうもの。弟の敵うたんとて某がおや宇太夫殿をさきに立てくる所存。いかに養父なればとて一旦おやと奉りし人に。手むかいなるべきかと思ひもよらぬ一言に兄弟眼に角を立。宇太夫殿はおのれがたのんだ助太刀なるは。いや其方が助太刀とたがひに論じせりあへば。宇太夫双方おししづめ金八に打むかい。今迄はにくし／＼と思ひの外。今の一言満足せり。身ふしやうながら我家は代代武士の指南し。列をくづさぬ役目ゆへぶこつこの汝を養子とし。名跡迄ゆづりしは一生のあやまり。刀を腰にはさむ身のだまし討は何事ぞ。武右衛門武助さし置某がさがし出し討てすてんとおもひしに。少しはけなげなる詞をきく。百年いきても一生は夢の内の夢ぞかし。くちぬは武士の名名字と。此むねとくといゝきかし。すみやかに勝負をさせん心にてよしない所へ來かゝり。兄弟にもうたがはれ。そちにもあやしめらるゝ事。思へばふかくのいたり。敵味方とはわかれとも。弟子なり子なり。たとへ討共うたるゝ共見ては中々いられまじ。拙者は國へ歸るべし。爰は町やの事なれば。さうどうさせていらぬ物。兩方日限相極め人家をはなれ打はたせ。はやとくいそげといさむるに。兄弟悦サア金八いざ野はづれへとかけ出る。金八しぼしとおしとめ。宇太夫に申けるは。今晚の勝負二三日のべ給はれ。子細といつは。國元の弟子はうばい助太刀をうたんと存人は。湯治をいゝ立此程當地へ罷越。様子をうかゞひ立まはる。こよひ勝負と聞ならば追々かけつけんはひつじやう。二三日延引せば某他國といゝふらし。かれらを國へもどし。じんじやうの勝負をけつせん了簡あるまじやと尋しかば。宇太夫かんじ。其一言にいつはりなきや。萬一此場をのがれ

